
覇王の義兄は転生者

春雷海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

覇王の義兄は転生者

【Nコード】

N93290

【作者名】

春雷海

【あらすじ】

彼は覇王の義兄で武道の天才、そして転生者（だからと言ってオタクなんかじゃない）である。

『リリカルなのは』の世界で彼はどのような物語を紡ぐのだろうか……。

プロローグ

長さ3 mは軽くある扉の前に立っていた。

「……なんだこりゃ？」

辺りを見渡してもなにもない——ただただ白い空間が広がっているだけだ。

『病魔に犯されながらも懸命に生きた少年、さかきばら榊原 とうま冬馬』

と後ろから声が掛けられた俺は振り向いて見ると、そこには一對の翼を羽ばたかせ金髪の髪を靡かす一人の女性がいた。

「……………誰？」

『君は何故家族を愛していた？』

しかし、彼女は俺の問いに答えることもなく、言葉を紡ぐ。

『健康な体を持つ姉や双子を、そしてこんな身体にした自分を生んだ母親を、一度は自分を見捨てかけた父親を、憎んだことはなかったのか？』

「……………あるさ」

彼女の言葉のすべてを否定することなんてできなかった。

姉と双子はなんで健康の身体を持っているんだと、逆恨みのようだけれど自分をこんな身体にした母親を、そして俺を見捨てるような行為をした父親を、本気で憎んでいた。

「一度、俺は家族を憎んでいることを言った……情けないことに泣きながらな」

『……………』

女性は何も答えず、俺の言葉を聞いている。

「そしたらさ、あの人たちはそれでも俺のことを愛しているって言うてくれたんだ。その言葉を信じた……大事な家族だから」

あの気丈が強い姉が泣きながら、双子が涙と鼻水をぐちゃぐちゃにしながら、両親が涙を流すのをこらえながら、言ってくれた言葉を。

「昔の俺は憎んでいた……でも今は違う！俺はあの人たちのことを憎んじやいない！」

『そうか……ならば大丈夫だな』

何が大丈夫なんだと聞こうとする前に、女性は微笑みながら扉を指差す。

『その扉は汝の新たな人生を迎える扉……どのように生きるかは汝の自由。だがこれだけは言わせてもらおう……幸せになれよ』

そう言いながら女性の身体は粒子となって消えていった———なんだあんなことを聞いたのが結局聞けなかった。

幸せになれよか……。

「ま、住む世界によっては幸せになれるかもな」

そう言いながら俺は扉を押し始めた——おもっ!? 俺は力を込めて扉を押していく。

そして徐々に扉が開いていき、光が漏れ始めた……。

「も、もう少し……!」

自分の中にある筋肉を最大限に使い、扉を押していき——ついに扉が開いた。

ま、まぶし……っ!

目が潰れるんじゃないかと思うくらい的大量の光が俺を浴びていく。

光を浴びれば浴びるほど、俺は眠気を感じてきた……そして俺の視界はブラックアウトした。

プロローグ（後書き）

プロローグ終了です。

主人公がいったいどのような物語を紡ぐのかを楽しみにしてください！ 一応主人公はチートにしようかなって考えていますーただからと言って超チートにはしません。

プロローグ2（前書き）

今回も短いです、亀更新になります。

プロローグ 2

暗くなるかならないかの境目の時間帯、いつもだったらにぎやかなこの公園も今は静かさを漂っていた。

「ふう、今日も疲れたわねー」

そんな公園に軽く伸びをしながらゴムパンにトレーナーのラフな格好のリュックを背負い、一際目立つ碧銀の髪をポニーテールに纏めた女性が歩いていた。

「家に帰ったら、あの人の手料理が待っているんだし、早く帰りましょ♪」

女性は家で待っているだろう愛する人とその手料理を思い、急いで帰るために駆け足になりかけたが、

「あら？」

ベンチにある白い布に包まれた何かに目を惹きつけられ、ゆっくりとそれに近づいていった。

気にするなと心の中で思ってもどうしても見たくなってしまう。

女性は胸の中から湧き出る好奇心に負けて剥ぎ取った。

「え………？」

そこには一人の赤ん坊が穏やかな眠りを着いていた。

女性は死んでんじゃないかと思い、慌てて赤ん坊の頬をやさしく叩く。

「お、起きて！ 起きなさい！ 起きなさいってば！」

「……………あ？」

赤ん坊はゆっくりと瞼を開いた。

それに女性は安堵の息を吐く。

「ふう、よかったー。 ひどい親がいるものねえ、あなたを捨てるだなんて…………」

「うう…………」

女性の放った言葉に理解できたのかどうかは知らないが赤ん坊は頷きかけるが、再び眠りに落ちた。

しかし、女性はそれに気づくことなく、赤ん坊を抱き締める。

「もう大丈夫よ、あなたは私たちが引き取ってあげるからね」

女性がそう言って、赤ん坊を自分の家へと連れていった。

＋ ＋ ＋

冬馬 side

再び目を覚ましてみると、見知らぬ男女が俺を見つめていた。
……………どちら様？

「ああ、よかった。ちゃんと目を覚ましてくれた！」

「よかったね、マリカ」

女性は嬉しそうに微笑み、男性はその女性の頭を優しく撫でる。

……………ああ、思い出した。

確か俺は両親に捨てられたんだ。

瞳の色——紅い瞳が気持ち悪いと言われて、俺は捨てられたんだ。

これで俺の新たな人生は終了だと思って寝ていたら……………あの女性が
助けてくれたんだっけな。

「——でどう？」

「いいね、君もそれでいいかい？」

「ふぁ？」

え？ 何が？

俺の困惑を無視——当たり前だが——して女性……………マリカさんは人
はにこりと笑う。

「それじゃ、これからよろしくね、リンク♪」

え？ リンクって……まさか俺！？

こうして俺はリンクという新しい名とストラトスという名字を貰い、リンク・ストラトスという名で新たな人生を歩むことになりました。

プロローグ2（後書き）

長く書くって結構難しい、でも頑張りますので、どうかよろしくお願ひいたします。

第1話（前書き）

PV5000到達しました、ありがとうございます！

更新は亀並みに遅いですがよろしく願いいたします！

第1話

漆黒の空に降り注いでくる雨のなか、自分にとって知らないはずの場所に立っている、少年がいた。

少年は周りを見渡す……ここがいったいどこなのかを調べるために。

周りを見渡しても、少年にとっても見覚えのない場所……。

少年は歩き出そうと足を動かそうとしたとき——背後からなにかを感じた。

少年は慌てて振り向くと、そこには——

「……………また、あの夢か」

少年は見慣れた天井が見えると同時にため息混じりにその言葉を放った。

ベットから降りて、少年は軽く伸びをする。

「まったく、何なんだあの夢は、気になるところでプツンと消えるなんて」

ぶつぶつ文句を言いながら少年は着慣れたパジャマを脱ぎ捨て、これまた着慣れているジャージに着替えて、自分の部屋に出る。

廊下を歩いていると、いい匂いが漂うリビングに少年は顔を出す。

そこには鼻歌を歌いながら料理をしている痩せ細い身体の男の姿があった。

「父さん、おはよう」

少年、リンク・ストラトスは自分の父親に挨拶をすると、父は料理する手を止めてリンクのほうへ振り向いた。

「ああ、おはよう、リンク」

優しい微笑みを彼に向けて、そう言った。

「今日もアルスさんの特訓かい？」

「うん、だから心配しないで」

そう言ってリンクは玄関に歩きだしていった。

残された父——ルーク・ストラトスはため息をつきながら、

「……そう言って怪我したじゃないか、リンク。心配だ」

＋　？　＋　？　＋　？　＋

リンク side

どうもこんにちは、前世の名前が冬馬だったリンクです。

俺がここに転生、そして母に拾われてから9年が経ちました……時の流れって早いね。

俺が今いる世界は地球ではなくミッドチルダといわれる世界にいます。

………この世界ってすごくない？ だって地球の科学技術を軽く上回ってるんだぞ？ 地球の人が見たら、なんじゃこりゃっと思うだろうな。

まあそんな世界にかれこれ9年もいれば、流石に慣れてきました。

っと、急がないと遅刻しちゃうな。

え？ なにに？ 特訓さ、特訓……っと着いた着いた。

「遅れて申し訳ございませんでした、アルスさん」

「ん、気にするな。そんなに遅れてなんていないぞ」

伸びきったダークブラウンの髪を乱雑に纏めている20代後半の男性、武道の師匠であるアルスさんがベンチからゆっくりと腰を上げる。そしてその隣には、

「………なんで母さんがここにいるの？」

俺の母であるマリカ・ストラトスがニコニコしながら座っていた。

「ん？ わたしの大切な息子を痛めつけないように見張っているのよ♪」

「……いや、痛めつけてるわけではない。ただ特訓を」

「そう言って2週間前に大怪我させたのは誰だったかしらあ？」

あ、アルスさんの顔が真っ青になった。

母さんは微笑みながら指をゴツキンゴツキン鳴らし始めた………怖っ！

——二週間前、俺とアルスさんは普通に訓練していたのだが、アルスさんが使っていた秘技を真似して放ったのだ。

しかし、その切っ先がアルスさんに当たる前に、俺は意識を失った。肩への激痛と共に目が覚めたら、そこは自分の部屋で、心配そうに見てくれた父さんと母さん、そしてぼろにされたアルスさんが土下座で謝っている姿があった。

「今度あんなことしたら……命だけじゃすまさないわよ？」

「は、はい！」

アルスさんは怯えながら母さんに敬礼する……。

……助けてあげよう、なんかかわいそうになってきた。

「アルスさん、早く特訓しましょう」

「あ、ああ、そうだな」

アルスさんは心から助かったと言わんばかり顔を輝かせ、傍らに置いてあった刀身の軟らかい剣——と言っても中には細い鉄の棒が入っていると聞いた——を取り出した。

以前は木刀だったのだが、2週間前のことがあったため、このような剣になった。

それを一本は俺に渡し、もう一本はアルスさんが持ち構えだした。

俺もそれを構え、そして、

「はじめっ！」

母さんの掛け声と同時に俺とアルスさんの剣がぶつかり合った。

一合、二合、三合、四合、五合と刃をぶつかり合わせた。

次に横薙ぎ、払い上げ、袈裟懸け、基本である斬撃を放つが、アルスさんは片手で受け止める。

「なら、虎牙破斬！」

アルスさん直伝の技を放つと、アルスさんは両手で柄を持ち、すべ

てを受け止めた。

「ふむ、惜しい」

「ま、まだまだあ！」

叫ぶと同時に跳躍し、自然落下を利用した威力の高い斬撃を放つ――分かる人は分かる龍槌閃だ。

これはアルスさんから学んではない……前世に読んだ『るろ剣』で、使ってみたいと思ったので、独学で学んだ。

しかし、これも、

「うむ、やっぱり惜しい」

いとも簡単に受け止められ、俺は地面に足を着くと同時に尻餅ついた。

「つ、つかれた……………ってうわあ！」

いきなり母さんは俺の足を掴み、背負った。

「それじゃあね、アルス」

「ああ、それじゃあな。 リンク、学校がんばれよ」

アルスさんは二本の剣を手に持ち、俺たちとは逆の方向に歩き出ていった。

背負われた俺はばたばたと暴れたのだが、如何せんうまくいかない。
足を持たれてしまい、まさか母さんを殴るわけにもいかないから手
も動かせない。

「か、母さん！ 大丈夫だよ、心配しないで！」

9歳の頃だったらしいだろうが、俺は前世の記憶があるから恥ずかしい。

「駄目よ♪ これから学校でしょ？ 疲れて眠っちゃうじゃない、だから甘えなさい」

「いや、だから！」

口論——と言っても俺が一方的に言って、母さんはのりくらりと避けられてるけど——をしながら母さんと俺は家へと帰っていった。

第1話（後書き）

……早く原作キャラを出せるように必死こいて書いていきますので、本当によろしくお願いいたします！

第2話（前書き）

亀更新で申し訳ございません、まだ当分アインハルト出て来ないかもしれません

第2話

リンク side

「それでは今日の授業は終わりです、気をつけておかえりなさい」

『はい！』

教卓の前に立っている先生がそう言うと、生徒たちはそう言って立ち上がり帰っていく。

「んうゝ、疲れたなゝ」

生徒たちに雑じって俺は大きく伸びをしながら下足場へと向かうと、

「やあ、リンク」

そこには二人の人物が俺を待つかのように立っていた。そのうちの一人は青髪の少年、もう一人はピンクの髪の少女だ。

「レノンとセラ。待っててくれたの？」

「一緒に行く約束していたじゃないか。それに先に帰ったら、セラのやつが怒っちゃうからね♪」

「レ、レノン！」

レノンがにやにや笑いながらそう言うと、セラは頬を真っ赤に染めてレノンを咎めるように言い放った。

……こうして見ると兄弟みたいだよな、この二人って。

彼はレノン・ナカジマ、彼女はセラ・ファロン。

この二人は俺の親友とも言えるべき存在だ。

クラス別でも俺たちは休み時間の間でも仲良く遊んでいるので、『仲良し三人組』と言われている。

「ほらほら、レノンもからかうのはやめな、セラがかわいそうだろう?」

「へへっ、よかったね、王子様が助けに来てくれて」

「むう~~~~~!」

「だからやめなって……」

………ちゃんと仲良しだよ?

学校から出て数分後、俺たちはショッピング街にある手作りの装飾品店にいた。

このお店はかなりの人気店であり、女子学生や年配の女性、さらには彼女にプレゼントをするために男子たちも結構来るらしいのだ。

「見て見て、これなんかどうかな?」

セラが指差したのは飾られているイヤリング。

値段を見てみる………2000円か、高校生や中学生ぐらいだったら買えたんだが、

「僕たちの小遣いを合わせても、それは買えないよ……」

「合わせても1300円だから……」

残念ながら、あと700円足りないな。

セラは「そっか」と残念そうに言って、再び店のものに視線を映し始めた。

なかなかいいものを見つからないな、あの人に似合う装飾品は本当にあるのかな？

三人で探していると、

「あっ！　これがいんじゃないかな？」

セラが指差した先には、藍色と青色が見事にコラボレーションされているロケットペンダントが飾られていた。

……うん、いいな。

値段もちょうど1300円だし、なによりあの人にあっているかもしれないな。

俺たちはそれを買うことに決定し、ロケットペンダンドを手に取り、それをレジにいるお姉さんまで持っていき差し出す。

しかし、

「はい、1365円です」

………しまった、消費税も込みだっことを忘れていたな。

全員での1300円は持っているのだが、あと65円は残念ながら俺は持っていない。

困った俺はダメもとで2人を見るが、

「……………」

「……………」

2人も縫るように俺を見る、だが俺も持っていないので、両手を上げた。

やれやれ、諦めるしかない様だな、俺はお姉さんにやめますと声をかけようとしたら、

「ほい、これならいいかな？」

突如、聞きなれた声と同時に俺の手の中に65円が上から落ちてきた。

それに俺は思わず顔を上にあげると、

「よっ、リンク、それにレノンもセラも」

「こんにちは、お兄ちゃんたち！」

オレンジの髪が目立つお兄さん……ティード・ランスターと、その妹のティアナ・ランスターの姿があった。

第2話（後書き）

今回も短すぎてゴメンなさい、あの人というのはまだ秘密ですが、次に出てくるかもしれません。

第3話（前書き）

皆様のおかげで、p v 1 8 8 4 5 ユニークが4 5 7 7 になりました。
まことにありがとうございました！

第3話

「助かりました、ティーダさん」

「いや、気にすんな。あの時いたのは本当に偶然だったんだ」

ティーダさんの助けでロケットペンダントを買えた俺たちは店を出て、ある人の家へと向かっていた。

ティアナはレノンと手をつないでうれしそうに歩き、レノンは恥ずかしいのか頬を紅く染めながら歩き、セラはレノンをからかいながら歩いている。

前へ進んでいくティアナとレノンにセラに対し、俺たちは後ろで見守るように歩いている。

「リンクはあのなかに行かないのか？」

「あそこに行ってしまったら、俺まで巻き添えになっちゃいますよ」

ティーダさんの言葉に苦笑しながら言った。

「やれやれ、レノンも可哀想だな」

「いやいや、いつもセラをからかって、喧嘩しそうなところを俺が止めてやってるんです。その罰としてこれくらいは受けてもらわないと」

にやりと笑うと、ティーダも「なるほど」と言って、返すようにに

やりと笑った。

「だったら見守ろうか」

「ええ」

俺たちは悪友のように笑いあった。

時折、レノンの助けを求める視線を感じたのだが、俺らはそれを気がつかないふりをして話しをしていた。

俺たちが歩くこと五分が経ち、家に行く際に通り過ぎるはずだった公園。

しかし、俺は公園内で黒いワンピースを着た金髪の女の子が木を見上げていた。

みんなに待っていてと声を掛けて、俺はその女の子に近づいていた。

* * * * *

どうしよう……なのはがくれたリボンがあんなところに。

登ろうにも、私は木登りなんてしたことないし、バルディッシュもない。

でも、なのはがくれたリボンを放っておいて、帰れないよ……っ。

……よしっ！ 登ろう、大丈夫、何とかなるはず！

私は木に登ろうと一歩近づくと、

「どうしたの？」

後ろから声を掛けられ、思わず振り向いてみると、そこには私と同じルビーのような紅い瞳で漆黒の髪の子がいた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊
リンク side

「どうしたの？」

そう声を掛けると、女の子は肩をビクツと震わせて、俺のほうへ振り向いた。

おお、この子は俺と同じ紅い瞳なのか……。

「え？ あ、き、きみは？」

「どうかしたの？ 木なんか見ちゃって」

女の子の問いに俺は軽く無視して、訪ねた。

その子は戸惑いながらも木——3メートルぐらいある高さ——を見上げた、俺も釣られるように見上げてみると、

「ああ、リボンが引っかかっちゃたんだ、ちょっと待ってて」

俺は木の枝を掴み、スルスルと登っていく。

途中、細い枝が俺の頬を擦ったが、気にせずにリボンが引っかかっている枝に近づき、腕を伸ばせば届く距離だ。

俺は腕を伸ばして、掴もうとしたとき、

突然の強い風が吹いてきた。

その風によって、リボンは飛んでいってしまった。

「ちっ！」

運がいいことに、俺が足についているのは太い枝だったため、跳躍することができた。

ひらひらと飛ばされそうになっているリボンを片手で掴んだのだが、足元は空中にあり地面などないため、重力によって俺は落ちていく。

女の子が悲鳴を上げ、ティードさんたちも慌ててこちらにやってくる。

「やれやれ……」

そう一言ついて、俺は横になっている身体の体制を整え、縦回転をしながら、地面に降り立った。

そんな光景にみんなも呆然として俺を見ている。

「ほい、これだろ」

「あ……うん、ありがとう」

差し出されたりボンと俺の顔を互いに見やりながら言った。

「大切なもんなら、吹き飛ばされないようにちゃんと大事に持っていないよ」

俺はそう言って女の子の頭をやさしく撫で、不器用ながらもリボンをつけてあげた。

「それじゃ、ティーダさん、行……………あだっ！」

「きましようか」とつづくことはなく俺はティーダさんに拳骨を喰らい、さらには俺のこめかみに両手を添えてグリグリさせた。

「この馬鹿！ 心配させるんじゃないっ！」

「いだだ、いだいいだいい！ たすけてえっ！」

「私たちを心配させた罰だよ、リンク」

「僕もセラと同意」

セラとレノンは助ける気はないらしく、ティアナに助けを求めたが、
プイッと顔を逸らした……ああ君もか。

「ぶっ……くすくす」

女の子も面白そうに笑い始めた……うああ、恥ずかしい恥ずかしすぎる！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

男の子がグリグリから開放されたのは、三分経ってからだった。

「いててて、ひどい目にあったよお」

男の子は涙目でこめかみを押さえながら言うけど、オレンジ髪のお兄さんは「コレくらいで済んだんだから、ありがたく思え」と呆れながら言った。

……まさか、あれ以上のことをしようとしたのかな？

「それじゃ、そろそろ行こうか」

青い髪の男の子は苦笑しながら言うと、その場にいたみんなが頷いて、歩き出していった。

「それじゃあ、今度は飛ばされないように気をつけてね」

男の子は私の頭を撫でながらそう言って、歩き出そうとしたとき、

「私は……フェイト・テストロッサ。　また、会えるかな？」

男の子は振り向いて、いたずらっ子のような笑顔を見せて言った。

「俺の名前はリンクだ、運がよければ会えるさ。　またな」

そう言って男の子、リンクは遠く行ってしまった友達のところまで走って去っていった。

「うん……またね、リンク」

リンクの名前を言ったら、顔が熱くなっていく………なんですか？

第3話（後書き）

今回も、例のあの人はでない………いつたいいつになったら出せるんだろう。

第4話（前書き）

……今回も短いですが、すんません。

更新が遅いけれども、がんばっていきます！
これからよろしく
お願いします！

第4話

リンクSide

あの人の家にたどり着いた俺たち、そこには母さんたちが既に着いていて、みんなで飾り付けをしていた。

「ねえ、リンク。これでいいかな？」

セラはくるりと回転し、可愛いピンクのドレスの裾を翻しながら、水色の折り紙で花の形にしている俺に聞いてきた。

「うん、似合ってる。セラはやっぱりピンクの服が似合ってるな」

「えへへ、そうかな？」

はにかみながらセラは頬を両手で押さえるその姿は大人たちでさえ魅惑してしまいそうなほど可愛い。

「うん、ほんと……うわっ！」

「リンク兄さん」

ゆっくりと立ち上がろうとしたら、背中に軽い衝撃がきた。

甘え声で自分に抱きついてきたのは、

「ギンガじゃないか、どうしたの？」

レノンの義妹である、ギンガ・ナカジマだった。

「えへへ、どうですか？」

ギンガも青いドレスの裾を軽くつかみながら、そう聞いてきた。

どうもなにも……、

「似合ってるじゃないか」

「わーい♪」

ギンガがうれしそうにそして喜びながら両手を上げた。

しかしそれと同時に、セラの顔が膨れっ面に変わり、俺を睨んできた——しかし俺のほうが背が高いので、上目遣いで睨んでいる、だがあまり怖くない。

「？ どうした？」

「なんでもない！」

そう言ってセラはプリプリと怒って、様々な色がある輪を飾っている母さんと父さんのところに向かった。

「……？」

何を怒ってるんだ？ 何か悪いことを言ったかな、俺？

「あらあら、怒らせてしまったわね」

後ろから面白そうに掛けてくる声に振り向いてみると、そこには紫の髪が特徴な女性、メガーヌさんの姿があった。

しかし、その腕にはあの子がいなかった。

「あれ？ ルーテシアはどうかしたんですか？」

「ああ、あの子はアルスさんが面倒見てくれてるわ」

メガーヌさんが指差す方向を見ると、アルスさんが赤ん坊――メガーヌさんとアルスさんの愛の結晶である――ルーテシアを抱いている。

「……なんかほのぼのとしちゃいますね」

「そうね、ってそうじゃなくって」

メガーヌさんは俺にぺちつと軽く頭をたたくと、俺を軽く睨む。

「駄目よ、セラを傷つけちゃ」

「？ 傷つけていませんか？ ただ、俺はギンガのドレスがかわいい
いって言っただけですよ？」

「んゝ、それがね、セラを傷つけたってことが分からない？」

「??:」

メガーヌさんの言葉に俺は首をかしげる……いったいどういう意味だ？　ギンガにかわいいって言っただけでセラが傷つくのか？

「うーん、なんて言ったらいいのかしら？」

「リンクにそんなこと言っても無駄ですよ」

そう言いながら呆れ顔でやってきたのはセラの姉であるエクレールさん。

セラと違うのは目じりがどこか厳しく見えるところかな？

「こいつは鈍感ですから、恋愛に関しては特に」

「あらあら、そうなの？　これはあの子達、苦労するわね」

「ええ、まったくです」

エクレールさんとメガーヌさんは俺の顔を見ると、ため息と同時に苦笑いをしてしまった。

？　なんなんだ、本当に？

俺が二人に何を言っているのかを尋ねようと声を掛けようとしたら、

「おーい、リンク！　サボっていないで、手伝ってよお！」

「あっ！　ごめんごめん！」

レノンが情けない声で俺を呼んだため、声を掛けることを断念し、

レノンの下へと走っていった。

マ
リ
カ
S
i
d
e

「ほら、ここはこうやるんだよ」

「むう、結構難しいね」

リンクはレノン君に色とりどりある折り紙を使って花の作り方を教えている。

ただ、レノン君はゲンやさんと同じで不器用だから、作るのに四苦八苦していた。

まるで、兄弟のように接している二人の姿を見て、私は思わず笑ってしまった。

それと同時にリンクが強く優しい子になってくれたのがうれしくも感じた、たまに大人っぽい雰囲気を出す不思議な子だけでも、それでも私たちの大切に愛しい子。

「母さん、どうしたの？」

突然笑い出した私に疑問を思ったのか、首を傾げて聞いてくるリンクに、私はなんでもないわと言って、その場を離れ、ルークの元へと歩んでいった。

「手伝うわ、
ルール」

「ああ、ありがとう」

ルークが笑顔で礼を言うと、色とりどりの輪を取り出して、私に手渡してくれたそれを壁に飾り始めた。

第5話（前書き）

……今回も短い。

でも後悔は！ 後悔は………しています、マジですいませんでした。

第5話

ミッドチルダにある住宅街を、白髪の男性はどこか恥ずかしげに、女性は恥ずかしさを見せずに笑顔を浮かべながら、腕を組んで仲良く歩いていた。

「今日は楽しかったわ、ありがとう、あなた」

「礼を言われる筋合いはねえぞ、クイント。 今日はお前の誕生日だろう、でもまあ……たまにはデートってのもいいな」

男性、ゲンヤ・ナカジマは照れくさそうに頬を掻きながら、自分の妻であるクイント・ナカジマにそう伝えたと、クイントは思わずゲンヤの身体に抱きついてきた。

「おっ、おいおい！ ここ、住宅街だぞ！？」

「いいじゃない、気にしないで」

「気にするわっ！ 早く、離れろ！」

ゲンヤは抱きつかれたことにより頬がかなり紅潮した。

クイントを引き離そうと彼女の肩をつかんで放させようとしたが、クイントの力がかかなり強いいため引き離すことができなかった。

しかし、ゲンヤは諦めずに何度も彼女を引き離そうとしたが、すべてが無駄に終わった。

ついに諦めたのか、ゲンヤも彼女を抱きしめ、顔を彼女の髪に埋めた。

「……何をやっておるんだ、お前たちは」

呆れた声で二人に声を掛けた――ゲンヤにとっては天の助け、クイントにとってはお邪魔虫となった――のはレジアス・ゲイズであった。

その隣には親友のゼスト・グライガンツとその娘であるオーリス・ゲイズの姿もあった。

ゼストもレジアスと同じ呆れた顔で見えており、オーリスは顔を真っ赤にさせていた。

「お前たちは、別に抱きつくなどとはいわんが……」

「さすがに場所を考えろ、場所を」

レジアスとゼストがやれやれとため息を吐きながらそう言うと、オーリスもそれに同意なのかコクコクと頷いた。

ゲンヤはりんごのように顔を真っ赤にさせ、クイントは不貞腐れたように「はい」と言った。

「さてと、さっさと行くぞ、ゲンヤ。あの子たちが待っているぞ」

「……………はい、ほら行くぞ、クイント」

不貞腐れているクイントの手を引っ張って、ゲンヤは自分の家の前にクイントを立たせた。

「? どうしたの?」

クイントの問いには答えずに、ゲンヤはただ扉を開けるように促していた。

頭にハテナを浮かべながら、クイントが扉を開けると同時に、

パンパンっと小気味のいい音が鳴った。

「ふえ……?」

『誕生日おめでとう、クイント(さん)!!』

目の前にいるのは、クラッカーを持った親友たちと自分の愛しい子たちとその友達が笑顔で自分を迎えていた。

クイントは思いがけないサプライズで呆然としてしまった。

「えへへへ、大成功!」

マリカがいたずらっ子のように笑いながら、ルークとアルスとメガーヌとエクレールにハイタッチをする。

「こ、これっていったい……」

クイントがそう聞くと、彼女の子供らが近づいてきた。

「えへへ、母さんを喜ばせようとして、僕たち全員が考えたことだよ」

「大好きなお母さんを喜ばせたかったの」

「いつも、私たちのことを好きでいてくれる母さんのために」

レノンとスバルとギンガが笑顔でクイントにそう告げると、クイントは三人を思いっきり抱きしめた。

「っ……あ、あり、ぐずっ、ありが、ぐずっ、ありがとおうう…」

涙を流しているけれども表情はうれしそうに笑っているクイントを見て、その場にいた全員——先ほどやったマリカたちも——ハイタッチをした。

第6話（前書き）

もうすぐ、年があけますね。

新年もよろしくお願いします。

第6話

リンク side

「さあさあ！ クイントの誕生日会の始まり始まり！」

母さんはクイントさんをテーブルの真ん中の席に座らせると、そう叫びながら、自らも席に座った。

「それじゃあ、まずクイントへとプレゼントよ。最初はわたしたちからよ、ルーク！」

「はいはい」

そう言うと、父さんは、椅子の下から青い袋を取り出し、それを渡した。

「ありがとう、マリカ、ルーク」

「気にいってくれればいいんだけど……」

母さんは不安そうに頬を掻いた。

それに関しては大丈夫だと思う、母さんとクイントさんってどこか似ているから……。

多分、俺の予想だと、プレゼントはスニーカーかもしれない。

「はい、私たちはこれよ」

メガーヌさんが取り出したのは、クイントさんが前から欲しいと言っていた、映画のDVDだった。

「ああ！ それって限定物の！？」

「そうよ、アルスさんと一緒に探したのよ、結構苦労したわね」

「そうだな、もう何軒くらい回ったのかも、客たちの凄まじい勢いも、忘れてしまったよ……」

アルスさんは遠い目をしながら、そう語った。

隣りに座っていたティーダさんは、アルスさんに黙祷していた……そこまでつらかったなのか？

ティーダさん曰く「あれって、豪華俳優がインタビューに答える場面や撮影現場にNG集も入った、超限定物だからな。手に入れただけでもすげえよ」とのこと。

「アルスのぼやきは放っておいて、次はエクレールちゃんよ」

「あつ、はい。私が選んだのは、ありきたりなものですが、どうぞ」

なにげにひどいことを言うな、母さん。

エクレールさんは、慌てながらもどこか恥ずかしげに、包装された小さな箱を渡すと、クイントさんは微笑みながら、エクレールさんの頭を撫でた。

「ありがとう、エクレールちゃん、嬉しいわ」

「あつ、いえ、そんな」

普段、生真面目なエクレールさんが顔を真っ赤にしている姿など、あまり見られないので、なんだか新鮮に見えてしまう。

隣にいる、セラは何処かニヤニヤしながら、エクレールさんを見ている。

「つ、次はスバルとギンガ、お前たちが渡してやれ」

エクレールさんはそつとクイントさんの手を離し、まだかまだかと疼いているスバルとギンガにそう言うと、パツと輝かんばかりの笑顔を見せて、クイントさんに近づいていった。

「えへへ、あたしはこれ！」

「お母さん、使ってね！」

スバルは青いエプロンを、ギンガは『簡単料理レシピ集』の本を、渡した。

クイントさんはちょっと顔を引きつらせながらも、二人にありがとうと言って、受け取った。

……普通のお母さんたちだったら、嬉しく思うのだが、如何せん、クイントさんはうちの母さんと同じで、料理が下手だ。

なので、俺の家は父さん、レノンたちはゲンヤさんが、料理を作っている。

この間、レノンたちの家で、クイントさんの料理を食べたのだが…
…一瞬で意識を失った。

そして、目を覚ましたのが夕方頃だったという記憶があった……。

まあ、そんな、暗黒の記憶は置いといて。

「さてと、最後は俺たちだな、セラ」

俺がそう呼びかけると、セラは仰々しく立ち上がった。

ピンク色のドレスを着たセラが両裾を軽く摘み、姫様のようにお辞儀をする。

そして、ゆつくりとクイントさんに近づき、包装された箱を渡した。

「これは、私とリンクとレノンが選んだ、プレゼントです。どうか、使ってください」

「開けてもいいかしら？」

「はい、どうぞ」

クイントさんは恐る恐る包装を外し、そっと箱を開けて、俺たちが買ったロケットペンダントを、大事に、皆に見えるように掲げた。

「ほお、中々の物だな……」

レジアスさんは自分の髭を撫でながら、そう褒めてくれた。

それに同意なのか、娘さんであるオーリスさんも、みんなも、頷いてくれた。

「スバル、ギンガ、レノン、それとリンクくんも来て」

クイントさんが、俺たちを呼んだ。

もしかして、気にいらなかったか……………？

俺は頭を捻らせ、傍に寄ると、

クイントさんが、俺たち五人を一斉に抱きしめた。

『っ!?!?』

「ありがとう、最高のプレゼントよ」

クイントさんは本当に綺麗な笑顔を、俺たちに見せてくれた。

それを見ただけで、このパーティを開催して、本当によかった。

プレゼントを渡した終えたあと、俺たちは時間のことなんて気にせず、楽しくパーティを過ごしていた。

第6話（後書き）

2011も頑張っています！

第7話（前書き）

今回はほのぼの？

路線でいこうと思って書きました、

第7話

リンク side

『夏休み』……それは学生にとっては嫌いな授業を休みにする休暇のことである。

しかし、『夏休み』に入ると同時に、嬉しくもないものまで付いてくる。

それは………宿題である。

そして、現在、俺の家で、そして俺の部屋にある正方形型のテーブルの周りに座っているのは、俺とセラとレノンだ。

「ううゝ、難しいよおゝ」

セラは涙目でテーブルの上にある問題集に突っ伏す、その姿に俺とレノンはため息付いた。

「ほら、セラ。早くやらないと……」

「ううゝ」

「……唸っても、宿題は無くならないよ」

唸り出したセラにレノンは困ったように言う。

やれやれ、仕方ないな……。

「しょうがないな、これ以上やらないなら、教えても意味ない。
レノン、さっさとかえ……」

「ごめんなさい！ やります！」

セラはガバツと突っ伏した頭を上げて、問題集に取り掛かった。

ふっ、楽勝だな。

「……うにゅ、やっぱりわかんないよ」

……前言撤回、やっぱり面倒くさい。

そもそも、俺たちは一体何をやっているのかというと、夏休みの宿題である。

別に今日が夏休みの最終日という訳ではない。

むしろ、まだ始まったばかり、というか初日だ。

なぜ、今、宿題をやっているかと言うと……セラのせいである。

彼女は宿題を溜め込むタイプであり、去年の夏も最終日になって、セラは俺たちに助けを求めた。

唯一まともにやっていた宿題は、工作ぐらいだったな……。

それぞれの科目の入った、問題集のほとんどが真っ白だった……あれはひどかったな。

俺たちは必至にセラにヒントを出したり、問題の答えを出していたりして、やっと片付けたんだよな……地獄だったな、うん。

「仕方ないな……それじゃあ、ヒントを言うから、自分でやってみろよ？　俺たちがやったら、意味ないしな」

「うん……」

セラは頷き、問題集に取り掛かった。
？

問題…『線路の上を列車が走る』というかん字をひらがなにしなさい。

「せんろのじょうをれつしゃがはしる？」

「わけわかんないよ、せんろのじょうって！？　そんでもって、れつしゃってなに！？」

「セラ、『上』をじょうって読むな、そんで、れつしゃの『つ』を

小さくしろ」

そう言うのと、セラは、「わかった!」と言って、書き始めた。

見てみると、ちゃんとした答えになっていたので、OK。

次だ、次。

問題…『汽車はせきたんで走ります』　せきたんというひらがなを
かん字にしなさい。

「あっ、こうかな?」

セラが答えを回答欄に書いたので、見てみると。

『席炭』

「なにその漢字!?　なに、席炭って!?　どう言う意味だよおお
おおおお!?!」

「それは同意見だけでも、落ち着け。　セラ、それは後半は合っ
てはいるけど、前半はまったく違うぞ」

ヒントを言うのも、バカらしいので、答えを書くと、セラは恥ずかしそうに書き直した。

? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

問題.. 333個の五円チョコを買いました、そして更に45個の五円チョコを買いました。 これらを買った分をたすと、何円ですか？

読み終えたセラは、首を傾げながら、一言。

「333×45？」

「問題をよく見なよ！？ どこに『かけてみなさい』ってあんの！？
？ とうか、なんで次のページから、算数になるの！？ さっき
やっていたのって、国語だよね！？ わけわかんないよ、セラの答えもそうだけど、この問題集も！」

激しいツツコミを入れる、レノン。

そんな彼を、落ち着かせる様に、肩をポンポンと軽く叩いた。

「……セラ、レノンの言うとおりだぞ。 最後になんて書いてある？」

書かれてある文を指すと、セラはまた恥ずかしそうに、答えを書き

始めていった。

問題…次のかけ算をしなさい

$$20 \times 5 \parallel$$

$$30 \times 2 \parallel$$

$$45 \times 6 \parallel$$

$$55 \times 3 \parallel$$

$$73 \times 9 \parallel$$

ああ、これは無理だな、うん。

そう思っていた、次の瞬間。

「100、60、270、165、657」

すらすらと答えを出した、セラ。

「ごめん、絶対に間違えるなって思った、僕を許して」

「……セラ……俺はお前を誤解していたよ、やればできる子なんだな」

優しい笑顔を浮かべながら、俺たちはそう言う。

「二人ともひどいよ！ 私だって、ちゃんとできるもん!!」

涙目で俺たちに訴えるセラ。 うん、悪かったって、だからそんな目で俺たちを見ないで。

そんなこんなをしているうちに、気付けば、もう夕方になっていた。固まってしまった身体をほぐすために、軽く伸びをする。

「……………ふわぁ」

セラは軽い欠伸をすると、それに続くようにレノンも欠伸をした。

そして、俺も釣られるように欠伸をしてしまった。

「……眠いね」

「……………ここで、寝ない？」

「……………賛成だ」

俺たちは、軽い言葉のキャッチボールをし終わると、仲良く揃ってベットのの中に入り、仰向けで横になった。

そして、すぐさま、眠気が襲い掛かり、瞼を閉じてしまった。

ルーク side

「レノンくん、セラちゃん、お迎えが……………」

リンクの部屋の扉を開けてみると、ベットの布団が盛り上がっているのが分かる。

僕はそっと近づいてみると……、

『……………』

三人が仲良くすやすやと熟睡していた。

なんだか、起こすのを躊躇ってしまうほど、可愛らしい寝顔で。

「……起きるのを、待っててもらおうかな」

迎えにきた彼らには申し訳ないが、僕は起こすのをどうも躊躇ってしまう。

だから、彼らには、もうちょっと、待っててもらおう。

僕はゆっくりと部屋から出て、そつと扉を閉めた。

軽い足音を立てながら、部屋から離れていった。

第8話（前書き）

いつも短くてすみません……。

第8話

本文

四方を高い木々に囲まれた森の奥、その場所には様々な色合いの花が咲き誇っていた――しかしその花々のなかには季節ごとにしか咲くことのない花もあった。

その中心には、石で作られたであろう台座が備えられており、台座には美しい輝きを見せる一振りの剣が突き刺さっていた。

すると、その剣から白い影が生まれ、それは女性の形を作った。

女性は地に膝を着け、祈るように両手を組んだ。

「……………何だ、あの夢」

自身を象徴するかのように鳴り響く目覚まし時計を止め、俺はさっきの夢の内容を思い出す。

森のなかにある剣と女性……………あれは一体何なんだ？

だけでも、考えても考えても思い付かないので、考え止めた。

俺はTシャツと長ズボンに着替えて、一階のリビングに下りたら、誰もいなかった。

「あれ？」

いつもなら、料理を作っている父さんがいるはずなのに……。

リビングにあるのは、サランラップで包まれている朝食と一枚の紙だった。

それを手に取り、見てみると、

『今日は、大型スーパー『ダイヤモンド』の特売日なので、出掛けてきます B y ルーク』

………そういえば、昨日、寝る前に、父さんが真剣な目でチラシに書かれている商品を赤ペンで書いてたな。

なるほど、その目的のために、朝早く出て行ったわけか。さすがは主夫だ。

「さてと、暑いけど、どこかへ出かけようかな」

今日は、アルスさんの特訓はないから暇なんだよな。ゲームセンターに行こうにも、一人でやってもつまらない。

いつも一緒にいるレノン家族と一緒に出かけていき、セラもレクノールさんと一緒に買い物に出かけて行った。

とりあえず家にいてもつまらないし、どっかへ出かけようっと。

……暑い、暑すぎる。 何なんだ、この暑さはよ。

やっぱり、家にいたほうがよかったかも——。

滴る汗をぬぐいながら、ため息をつくとき、チラッと見えたのが、大型の総合スーパー『ディエンダー』だった。

「……涼んでいこうっと」

俺はそう呟いて、その大型の総合スーパーのなかに入ってしまった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「……………どうしよう」

私は大勢の人が歩んでいるなか、ただ呆然と立っていて、周りを見渡した。

やっぱり、いないなあ……。

「どうしよう、まさか迷子になっちゃうなんて」

周りを見渡しても、あの特徴的な色の髪のある人はいない。

私はあの人を探すため、歩き出そうとしたとき、

「? もしかして、フェイト?」

「え?」

幼い男の子の声で、私の名前を呼ばれたことに驚きを隠さないで、後ろに振り向いてみると、

「やっぱり、フェイトだ。 どうしたの、こんなところで?」

先日、会ったばかりで、危険を顧みず、私のリボンを取ってくれた男の子……リンクがいた。

第8話（後書き）

アインハルトはもしかしたらまだ当分出てこないかもしれません…
…マジですいません！

第9話（前書き）

更新が遅くなってしまう申し訳ございません。

今回も短いのですが、よろしく願いいたします。

第9話

フェイトと再会した俺は、彼女を連れて、ディエンダーの中にある喫茶店に入った。

フェイトにはカフェオレを、俺はブレンドコーヒーを注文し、今は椅子に座っている。

注文の品はすぐにやって来て、今は俺たちの目の前にある。

「なるほど、色々なものに興味を惹かれていって、周りをキョロキョロとしていたら、その人を見失ったんだ……」

「うん……」

フェイトは恥ずかしそうに頷き、カフェオレを飲む。

別に、恥ずかしがることはないと思う。このディエンダーは結構広い上に、色々な商品が置いてある。

それらに目を向けては、迷子になるだなんてのは、子供の頃にはよく経験するものだ。

「まあ、これを飲んだら、その人を探しにいかうか」

「え？ 探してくれるの？」

「当たり前だろ、こんなただっ広い場所で、一人を探すだなんて、無理だ。それに、君を放っては出来ないからね」

ブレンドコーヒーで口の中を潤し、フェイトにウィンクする。

「あ、ありがとう」

フェイトは頬を赤く染め、カフェオレを飲み、俺も残っているブレンドコーヒーを飲む。

それを何故かフェイトが驚きで目を見開いていた……なんでだ？

「リンク、それって苦くないの？ ミルクと砂糖入れた方がいいんじゃないかな？」

「ん？ 慣ればおいしいよ、フェイトにはまだ無理かもな」

まだ、フェイトは子供だ。子供の味覚で、このブレンドコーヒーをおいしいだなんて感じる事など無理だろう。

病院生活をしていた俺は飲む機会はないと思われがちだが自販機で買って飲んでいる。

そして、時たまに自宅休養の許可が出て、家に帰る途中、よく姉さんと一緒に、喫茶店に行くこともあるのだ。

しかし、フェイトが俺の言葉に怒りを覚えたのか、

「むっ……飲むよ！ ちょっと貸して！」

「え？ べ、別にいいけど」

フエイトの勢いにちよつと引きながらも、ブレンドコーヒーを手渡す。

フエイトは、ブレンドコーヒーの色に難しい顔をしたが、すぐにブレンドコーヒーを口付けると同時に、

「う、ううゝ、苦いゝ」

涙目でプルプルと震えだした。 やつぱり、子供にとっては苦いよ
うだ。

「だ、大丈夫か？」

「う、うん……」

フエイトは口元を抑え、カフェオレで口直しをする。

「だから、やめておけばよかったのに……バカだな」

「あっ……」

俺はブレンドコーヒーを取り上げ、それを飲む。

うん、この苦味がおいしいんだよな……。

「この味を理解するには、お子ちゃまには分からないな」

「む、むううゝゝゝゝ」

頬を膨らませながら悔しそうに睨みつけてくるが、あまり怖くない。

それに苦笑しながら、ブレンドコーヒーを飲む。

「さてっ、怒っている暇はないだろ。早く飲みなよ、お子ちゃま」

「う、ううゝゝゝゝ」

より一層、俺を睨みつけてくるが、あまり怖くないので、笑って受け流した。

「どこで離れたのかわかるか？」

「確か、三階で……」

「了解。そんじゃあ、行ってみよう」

喫茶店から出た私たちは、三階に行こうと歩みだそうとしたとき、

「パパ、動かないよ」

「うーん……もう古くなったからかな」

その会話を偶然耳に捉えてしまい、そこに振り向いてみると、スパー袋を持った男の人と女の子が一つの玩具を見ていた。

話を聞いてみると、女の子の持っているネズミの玩具——外見は既にボロボロになっており、動くのが不思議なくらいなもの——が動かないでいるよう……。

「よしっ、新しいのを買おうか。それはもう……」

「いやっ、捨てない」

男の人が『捨てよう』と言う前に、女の子はすぐさまそれを否定した。

「パパが買ってくれたものなんだもん！　捨てない！」

「うーん、でもねえ……」

「横槍失礼」

隣にいたはずのリンクがすぐさま女の子の持っている玩具を手にとった。

は、はやいつ。　一体いつの間に……。？

私は慌てふためいてリンクの傍に小走りした。

「な、なんだ、君は？」

「おじ……お兄さん、買ったばかりのドライバー借りますよ」

いま、おじさんって言いかけたよね、リンク。

リンクはドライバーで玩具のボトルを取り始める。

すらすらとボトルを取り出したあと、玩具の蓋を取り出し、その中

を覗き込む。 私もそれに続くようにそれを覗き込んだ。

ゼンマイの歯車が、埃だらけになっており、中には小さな石が引っかかっていた。

リンクはゆっくりと息を吹きかけて埃を吹き飛ばし、指で石を取り上げた。

全てが綺麗になったあと、リンクはボトルを差し込んで、玩具を元通りにした。

「リンク、これで動くの……？」

私がそう尋ねると、リンクは笑う――その笑顔を見た私はドキッとした。

「まあ、見てなって」

リンクは玩具の側面についている軸を何回か廻し終えたと、

「わぁ！ 動いた動いたぁ！」

玩具はちゅーちゅー鳴きながら四足歩行になっている足を動きだした。

「よかったな、動きだしてくれて」

「うんっ、ありがとう、お兄ちゃん！」

リンクはそう言って、女の子の頭を撫でる。

それに何故か私は嫌な気持ちになった……ただリンクが女の子の頭を撫でているだけなのに。

どうして、こんな気持ちになってしまっただろう。

「放って置いて、ごめんな。さあ、行こうか」

リンクの声が聞こえたのと同時に、リンクの手が私の手を掴んだ。？

それと同時に、嫌な気持ちから嬉しいのか恥ずかしいのか分からない気持ちになった……なんなんだろうこの気持ち。

第10話

リンク side

ディエンダーの三階は衣料品を取り扱っている。？だからだろうか、その階には結構な人数で賑わっていた。

衣料品を取り扱っていることなのか、女性の数が多い。フェイトの探している人が男だったらいいけど……。

「フェイト、お前の探している人は男の人か？」

「ううん、女の人だよ」

ううむ、それだったら、探すのも手間かかるな……。見る限り、女性の数が多いから……そうだ！

「それじゃあ、何か目立つ特徴的なものないか？ それだったら、見つけることができるかもしれないからさ」

「ええと、特徴的なもの……髪が翠色でポニーテールにしている人」

おお、そんな目立つ特徴だったら、見つけ出すことができるかもしれないな。

ただ、条件は、この階にいるのかということだ。もしかしたら、フェイトを探すために、上の階か下の階に行ってるかもしれない。

まあ、とりあえずはこの階から探し出そう。

結果は残念でした。

この階のあらゆるところを周りまくったのだが見つけることができなかった。そして、ずっと歩き通しだったので疲れてしまい、今は階段側に備えられているベンチに座っている。

「参ったな、一体どこに行っただが」

「……ごめんね、リンク」

いきなり謝ってきたフェイトに、俺は疑問を浮かべながら彼女の方に振り向いた。

「? なんでいきなり謝るんだ?」

「……私の所為でリンクに迷惑かけているから……」

「いや、迷惑かかってねえよ」

フェイトの言葉をバツサリと切り落としたあと、おもいきりフェイトの額にデコピン。

「あうっ!」

赤くなった額をさすり、涙目で俺を睨みつけるフェイトに、俺は苦笑しながら怒気を膨らませながら言葉を紡ぐ。

「あのなあ、俺がいつ迷惑かったなんて言ったよ。それに、俺はどうせ暇だったんだ、探してやることくらいしてやる……。いや、俺じゃなくても助けているかな」

「え？」

「だって、俺たちはもう友達だろ？」

俺がそう言った瞬間、フェイトは驚きのせいか目を大きくしていた。

……なんだ？ 俺はなにかななことでも言ったか？

「どうした？」

「と、友達……リンクと私が……？」

「おうよ。まだ名前を呼び合ったか、喫茶店で一緒に飲んだ程度しかないけど、こうして仲良くなっているんだから、一応は友達だろう？」

「う、うん！　そうだね！　もう、友達だよね！」

フェイトは嬉しそうにこくこくと頷いた。そんな嬉しいか……？

フ
エ
イ
ト
S
i
d
e

リンクと友達になれるなんて……すごく嬉しい。

心の中で溢れ出る嬉しさで、私は笑ってしまう。

「? どうした?」

「え、な、なにもないよ」

リンクはそっかと言って、私の手を握る。温かい温度が伝わってくるのと同時に、恥ずかしさが混み上がってくる。

「それじゃあ、行こうか」

私は「うん」と言おうとしたとき、

「ど、泥棒ーーーー!」?

女の人の叫びに、私とリンクは思わず叫んだ方向に振り向いた。

見ると、男の人が見るからに高そうなバックを抱えながら走っている姿が見えた。

リンクはすぐさま下りエスカレーターの近寄って通せんぼのように立ち塞がった。

「どけえええええ、ガキイ!」

「リンク!」

あのままじゃ、リンクが男の人に突き飛ばされちゃうっ!

でもっ、バルディッシュがないから、私は只の子供だ。

……それでも、リンクが傷つくのは見たくない！　なにか、あの人の気を逸らすものがあればいいけど……あ！

私の目に留まったのは、空カゴだった。

私は両手でカゴを持ち、思いっきり投げ飛ばした。

投げ飛ばしたカゴは、運良く吸い込まれるように男の人の顔に叩きつけられた。

「んぎゃ！」

男の人は悲鳴を上げて、顔を両手で押さえる。その隙に、リンクは男の人に近づいて、男の人の首筋を殴り付けた。

「Good Night……」

男の人は口から泡を噴き出しながら倒れた。

「……ふう、フェイト」

リンクは一息着くと、私を呼ぶ。私はリンクの傍に駆け寄ると、リンクは優しく微笑んで、私の頭を撫で始めた。

「サンキュ、助かったよ」

「……あ」

温かい温度が伝わってくるのと同時に、顔が熱くなり、恥ずかしさが出たけども、そんなことよりも……………。

「えへへへ」

リンクにお礼を言われたのと、撫でられたので、嬉しく感じた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

リンク side

ひったくりしたおっさんは警備員さんによって連れていかれた。

それを見送った俺たちは、フェイトの知り合いを探すために、再び歩き出そうとしたとき、

「フェイトさん！」

女の人の声が聞こえた方向に振り向くと、そこには、翠色の髪がポニーテールにしている女性が息を絶え絶えにしながら立っている姿があった。

フェイトの言っていた特徴的なものが揃っているのです、この人がそうなのだろう。

「見つかってよかったな、それじゃあな」

「あっ！ リンク！」

下りエスカレーターに足掛けようとしたとき、フェイトが俺を呼んだ。

顔だけを動かし、振り向くと、フェイトは頬を赤く染め、もじもじしながら言う。

「ま、また、会えるよね？」

「……もちろん。今度は、俺の友達も紹介してやる」

そう言って、俺は自分の携帯の電話番号が書かれてある一枚の紙を投げ渡した。

「暇ができれば、電話してくれよ」

「あ……うん、絶対にするから！」

フェイトは強く頷いて、可愛い笑顔でそう言ってくれた。

俺も笑顔で返し、腕を振りながら、去っていった。

第10話（後書き）

とりあえずは、フラグは立てておきました♪

更新は遅いですが、よろしくお願いします。

第11話（前書き）

久しぶりに、アクセス解析を覗いて見たら、何とPVが104420になっておりました！ これも、みなさんのおかげです、ありがとうございます！ これからもよろしくお願い致します！

第11話

リンク side

ディエンダーを出たときには、もう昼は過ぎており、13時前後。

フェイトと一緒に探していたので、結構な時間が過ぎていたんだな……。
通りで、お腹がなっているわけだな。

どこかご飯食いに行くわけでもないから、家に帰ろ。多分、今頃、父さんが家に帰ってきて、冷たいお昼ご飯を作ってくれているだろうし。

俺は、早く帰るため、駆け足となって、家路に急ぐ。

家路の途中にある、商店街を通っていると、福引屋がやっているの
に目に止まった。

それによって、俺はポケットの中を探る。確か、父さんと一緒に、
スーパーで食品を買った時に、貰った福引券があったはず。

ポケットから取り出して、見てみると、三枚の福引券があったのは
あったのだが、期限が今日までだった。

このまま、期限切れになって捨てるのも勿体ないし、無駄だと思う
けど、やってみるか。

「おじさん、よろしくお願いします」

「おうよ、三枚な。　そんなじゃ、三回、クルクル回してくれや」

そう言って、おじさんは抽選機を俺の方に引き寄せてくれた。

俺は、抽選機をクルクルと回転させると、白い玉が出てきた。

「残念。　ポケットティッシュだ」

……うん、まあ、分かってはいたけど、残念な気持ちになるな。

苦笑しながらも受け取って、再び回転させる。

次に出てきたのは、黄色い玉だった。

「黄色い玉は商品券3000円だ、お母さんに上げな」

……俺の家の場合は、母さんじゃなくて、父さんが喜ぶんだよな。

おじさんから白い封筒を受け取ると、俺はポケットの中に入れる。
？最後の一回に期待しながら、俺はクルクルと回転させた。

そして、出てきたのは………金色の玉だった。

「おめでとおおおおおおう！　一等だーーーーー！！」

おじさんが鐘をちりんちりと鳴らすと同時に、

「うそおおおおおおおおっ！！！？？」

まさかの一等を当ててしまったので、俺は思わず大きな叫び声を上げてしまった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「……というわけなんだ」

目の前に座って、昼食の素麺を啜っている父さんにそう言うと、頬が思いっきり膨れ上がって、咽せた。

「げほっ、げほっ、がはっ、ぐほっ！　ほ、本当なのかい、リンク！」

「本当だよ、ほい、証拠」

そう言って、俺は一枚の封筒から、あるチケットを取り出して、父さんに手渡した。

父さんは、そのチケットを、じっと見つめる。

「管理世界『ガイアミュール』での次元旅行券十名様まで。………偽物じゃないよね？」

「その言葉、俺も福引屋さんのおじさんに言っただけ、本物だって言ってたよ」

まさか、次元旅行券を、タダ当然に手に入れてしまったんだからな。思わず、おじさんにそう言ってしまったよ。

「はあ、すごいな、リンクは」

「いや、ただ運がよかったただけだって。それでさ、その次元旅行……レノンたちも誘っていいかな？」

まさかの、十名まで誘える旅行券を当ててしまったのだ。流石に、俺たち家族だけっていうのは、寂しい。？俺自身、レノンとセラたちを誘って、一緒に旅行がしたい。？

しかし、それを決めるのは、父さんや母さんなのだ。子供である俺が決めていいわけじゃない。

だから、父さんに聞いた。レノンたちを誘ってもいいのかを。

「うん、いいよ」

「……え？ いいの？」

「もちろんさ。マリカも『みんなで行った方が楽しいわ♪』って言うと思うから、大丈夫だよ」

健やかな笑顔でそう言ってくれる父さんに、俺は笑みを溢しながら、「ありがとう」って礼を言った。

ちなみに、夜に帰ってきた母さんに旅行の件を言ったら、絶叫を上げた。そりゃそうだよな、息子が次元旅行券を手に入れたんだからな。？

そして、その次元旅行にレノンたちを連れてっていいかを、母さんに聞いたら、父さんの言ったとおりに、了承をしてくれた。??

第12話

リンクside

俺が次元旅行券を手に入れてから、三日が経った。

今、俺たちは管理世界【ガイアミュール】に行くため、時空空港にいる。

【ガイアミュール】に行くメンバーは、俺たち家族、レノン、セラ、ランスター兄妹、エクレールさん、そして、

「いや、ルークさん。申し訳ないですね、私たちまで誘っていただいて……」

「いえいえ、お気になさらないでください。たまには、息抜きをしてくださいね」

「ごめんなさいね、マリカ……」

「別にいいわよ、この旅行でゆっくりしなさい」

セラとエクレールさんの両親……リユージュさんとノエルさんである。

この二人を見たのって、確か半年ぶりだったじゃなかったっけ……。この二人は、共働きをしているから、この旅行でリラックスしてほしいものだな。

ちなみに、ナカジマ家は仕事が忙しく、姉妹は仲良く風邪を引いて

しまったようで、行けなかった。？他の人たちは、仕事によって、行けないとのこと。まあ、仕方のない事である。

「リンク、リンク、あれ見て」

セラが面白そうに俺に声をかけ、ある方向に指差す。俺は何だろ
うと思ひながら、セラの指差す方向を見ると。

「おりよ……」

そこには、レノンの腕に抱き付いて、嬉しそうにしているティアナの姿があった。？

「おお、ラブラブだねえ♪」

「熱いね〜♪」

俺とセラは、顔を見合わせて、ニヤニヤと笑う。

「お前らって、意外と腹黒いな……」

ティードさんは頬を掻きながら苦笑する。何を言っているんだ、ティードさん。殆どの人は、ああいうのを見ると、ニヤニヤ笑ってしまふもんだぜ。

「まあ、いいじゃないですか、ティードさん。（いずれ、あいつもあなるから、今のうちに笑わせてあげましょう）」

「ま、そうだな。（……そう考えると、あいつが哀れになってきたぞ）」

なんか、エクレールさんとティードさんが、物騒なことを言っているような気がするが、気のせいだろう。

そう心の中で納得させ、俺はセラと一緒に再びニヤニヤしながら、レノンとティアナの姿を見る。

すると、レノンは、俺たちの視線に気づいたのか、頬を真っ赤に染まってしまった。

レノン
side

なんだか、生暖かい視線を感じるの、その方向を見てみる。

そこには、リンクとセラが、ニヤニヤしながら、こつちを見ていた……！

まずい！ あれは、絶対に飛行機内であらかわれる可能性が、**确实**にある！ それを避けるには……、

「レノンお兄ちゃん？」

「ティアナちゃん、ぼ、僕の腕から、離れてくれないかな？」

「え……もしかして、レノンお兄ちゃん、ティアナのこと嫌いになった？」

「あ……いや……」

僕の言葉に傷ついたのか、ティアナちゃんは涙目になった。むう……可哀想だけど、無理矢理にでも……………!!? ……

ティアナちゃんから離れようとしたら、急激に背中が寒くなった。僕は、それで思わず固まってしまった。

「……レノンお兄ちゃん？」

「えっ、ああ、いや、僕は、ティアナちゃんのこと好きだよ。だから、このままでいいよ」

「ほんとっ!?!」
レノンお兄ちゃん、大好き!!」

ティアナちゃんは嬉しそうに、僕の体に抱き付いてきたと同時に、
 背中の中の寒さがなくなっていく、一体何だったんだ……。○

リンク
side

よしよし、くつついたな。あのまま、離れたら、つまんなくなるからな。

もうちょっとだけ、楽しませてもらうぜ、レノン。

「……お前つてやつは」

「エクレール、何を言っても無駄だ、やめろって」

ハイハイ、無視無視。もう、俺はお二人のため息なんざ聞こえないよ。

ただ、セラと一緒にニヤニヤしているだけだからな。

「うんうん、ラブラブだね」

「いやゝ、暑いなあ。羨ましいなあ」

俺は二人を見て、笑いながらそう言うと、セラが驚愕な表情を浮かべながら、こっちを見る。

なに？　なんか、変なこと言った、俺？

「……羨ましいの？」

「ああ、俺もティアナちゃんと同じことしてみたいなゝって思うよ」
前世では、いつも病院生活を送っていた上に寝てばっかだったから、抱きつかれたことはあるものの、ああやって抱きつくのって、やったことがないんだよな。

「……あ、じゃ、じゃあ、私たちも、やってみる？」

「ん？　いいの？」

「う、うん……」

セラの言葉に甘え、遠慮なく俺はセラに抱き付いた。

「!?!?」

「ふん、こういう感じなのか」

意外と密着するもんなんだな、それに甘い匂いも漂ってくるし、男の俺と違って、柔らかい。恋人同士がやるのも、分かるかもしれないな。

「……………おい、リンク。いい加減にセラを離してやれ、死にかけているから」

? どういう意味だ? エクレールさんの言葉に、そんな疑問を残しつつ、セラから離れてみると、

「きゅん……………」

セラが頬を真っ赤に染まりながらも、どこか幸せそうに微笑みながら、気絶しかけていた。

「のわあああああああ!?!? セラ、セラ、どうしたんだー!?!?」

そんな二人の姿を見ている、エクレールとティードは、ため息をついて、こう呟いた。

「「やれやれ」」

さらには、そんな子供たちの両親である母たちは、どこか面白げな笑みをしていた。

「うふふっ、セラったら、自分から誘ったくせに、気絶しちゃったわね」

「我が子ながら素晴らしいと思うわ♪」

そして、父親たちは、そんな母たちを苦笑しながら見つめていた。
???

第12話（後書き）

今回は、リンクがちょっと羨ましいかも……それは冗談ですV V
リンクは恋愛に関しては、かなりの子供レベルです、だから20歳
でもああも簡単に抱き付くことができます。

第13話〈旅行編〉（前書き）

今更な通知なんですが、リユージュとノエルはオリジナルキャラクターでございます。

第13話〈旅行編〉

『ガイアミュール』？

そこはミッドチルダのような先進都市ではなく、人と自然がともに暮らす世界であり、古き良き暮らしを愛する者たちが暮らす世界である。

この世界にたどり着いたあと、リンクたちは山と海に挟まれた街――『ルミナス』にやってきた。？この街の高級ホテルに泊まり、二泊三日の楽しい旅行を楽しむのだ。

リンク side

ホテルのチェックインを終えた俺たちは海岸までやってきた。

勿論、海に来たので、格好は水着である。

「うーん、自然の香りが気持ちいいなあ」

決して、都会では嗅ぐことのできない、気持ちいが安らぐような匂いを俺は思いつきり吸い込む。

「何だか落ち着くな……」

俺は背筋を伸ばすと同時に、

「ぶっ！」

バシャッと顔に冷たい水が掛かり、塩っ辛い味が口の中に広がった。

「あははは、リンカー、早く来なよー」

セラは笑いながら、水鉄砲を俺に向けながらそう言う。

その近くには、レノンと、浮き輪にしがみついているティアナの姿もあった。

なんだか気持ちよさそうにしているので、俺も海の中に入りたくなってきた。？何より顔にかけてくれたお礼をしなくちゃいけないしな。

俺はニヤリと笑いながら、両手で海水を掬って三人に掛けたあと、三人の近くに思いつきダイビングした。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

リンクが飛び込んだことで、水柱が上がリ、セラたちは悲鳴を上げてはいるが、どこかその悲鳴は楽しげに聞こえる。

「ふふっ、みんな楽しそうね」

「ええ、改めて来てよかったと思うわ……」

マリカとノエルは子供たちが遊んでいる光景を微笑ましげに見つめていた。

「おお、はしゃいでいますね」

「子供の力を舐めちゃいけないって、改めて思うね」

リユーグとルークは面白げに見ながら、手元にある缶ジュースを飲む。

「うっは、すげーな」

「……あそこに行ける勇氣ありますか、ティーダさんは」

「いや、俺はちよいと遠慮してえな……」

二組の両親とは対照的に、エクレールは引きつった笑みで、ティーダはおっかなびっくりという顔で、子供たちを見ていた。

それもそのはず。子供たちは、物凄い勢いで海水を掛け合ったり、鬼ごっこをしたりしているのだから。

はつきり言って、エクレールとティーダはあそこに行く勇氣が湧かない。もし、自分たちがあそこに行ってしまったら、自分たちはおそらく明日の朝は筋肉痛になるかもしれない……。

いや、ティーダは大丈夫だろうが、エクレールは確実に筋肉痛になるだろう。

「わたしもなんだか混ざりたくなってきたわ」

マリカは腕を軽く伸ばしたあと、笑みを浮かべながら、走って行った。

？

「それじゃ、私らも行くか、久々にセラと遊べるからな」

「そうね、行きましようか」

リユージュとノエルは互いに微笑みながら顔を見合わせる。

リユージュの言っていた『久々に』というのは言葉どおりの意味である。

この二人は地上管理局の陸上警備隊、しかも災害部に所属していることで、家に帰れるのは、ごく稀に等しいのだ。

「さてと、エクレールも行くぞ」

「ええ！？ 私も！？」

「あら、あれで怖じけついちゃったの？ 情けないわね」

「むっ……怖じけついてなんていない！ 行こう！」

……その数分後には、エクレールは後悔した。だが、この旅行に来たみんなは笑顔でこの楽しい時間を過ごして行った。

第14話〈旅行編〉

リンク side

海水浴を楽しみ、ホテルで一休憩を入れたあと、自由解散となった。

レノンティアナの要望でティーダさんと一緒に買いものをしにいき、セラは家族と一緒に観光しに行った。?……エクレールさんはゾンビのようにフラフラしていたが。

そして、俺は今どこにいるのかというと、ルミナスの露店街を散策していた。

ちなみに、父さんと母さんは、ホテルで二人っきりにさせてあげている。

最近、あの二人は、イチャコラしていないだろうからな。

しかし、俺一人で行ってくるって言ったら、父さんと母さんは俺を引き止めようとしたが、

「迷子にならないように気をつけるから、大丈夫だよ」

? 確かに見知らぬ街だけど、迷子にはならないように気をつけて、地図も持ってるし。

それでも、俺一人で行く事に渋っていたが、そこはなんとかねじ伏せた。

それとおまけにこう言い残した。

「新しい家族、期待しているよ」

それを言っただアを締め切ったと同時に、母さんの声にならない悲鳴が聞こえた。

……お盛んなのは構わないが、せめて静かにやってほしいものだ。

だって、父さんと母さんの部屋の隣に、俺が寝てるんだ。精神年齢20にとってはキツイ。

まあ、その分、新しい弟妹ができるのを期待させてもらっているが。

それはさておき
閑話休題

しかし、ルミナスの店は色々なものが売ってるな。樹で作ったお守りとか、アクセサリーとか、採れたて新鮮の野菜に魚までもが売られているんだからな。

ミッドチルダじゃ、決して売られないであろう商品たちである。

「おっ」

とある露店店で、目に惹かれたのは、樹で彫って作られた手裏剣型とダイア型にハート型ペンダントがあった。

俺はそれをどこか気に入り、これを両親へのサプライズプレゼントとして買うことにした。

「すみません、これいいですか？」

「あいよ、三つで800ツェンだ」

ちなみに、この世界での【円】はツェンと言われるお札である。

俺は空港で変金したツェンを取り出し、おばちゃんに手渡す。おばちゃんは二つは可愛らしい袋で包み、手裏剣型のペンダントは俺の首に掛けてくれた。

「ありがとうございます」

「あいよ、気をつけてね」

おばちゃんの言葉に、頷き、俺は歩き出した。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

露店街を歩き終え、俺は先にある木の階段を上り、森林公園へと入っていった。

そこは、樹の香りが漂い、心を落ち着かせるような雰囲気漂わせていた。

「いい香りだ……」

その香りを、俺は思いつき吸い込んで、この空気を味わう。　うん、美味しいな。

周りの景色を楽しみ、俺は散歩していると、そこで二つに分かれた道があった。？看板には右は普通の子供が遊ぶ遊具広場があり、左は遺跡の扉があるというのが書かれていた。

遊具には興味がないし、左に行ってみるか。そう判断をした、俺は左へと進んで行った。

歩いてから、わずか数分で、遺跡の扉にたどり着く。

「おお」

縦長さ一メートルの石造りの扉がそこに佇んでおり、その扉の表面には紋章のようなものが掘られおり、古代の雰囲気漂わせていた。しかし、それ以外は何もなさそうなので、すぐさま飽きてしまった。さっさと帰ろうと、遺跡の扉に背を向けると、

——私のもとに……来て……——

「？」

何かの声が聞こえた、でも周りを見渡しても、誰もいない、ここには俺しかいない。

まさか、幽霊……！？？

いや、それはないか……幼いころはまともにそれを信じ込んでしまったが、流石に14歳になると信じられなくなってきたし。

俺はそう決めて、この場を去って行った。

第14話〈旅行編? (後書き)〉

リンクくんは病院の中でも勉強をしていたので、子供の作り方ぐら
いは学びましたよ。あくまで教科書の知識なので、深くまでは…
…………。

第15話〈旅行編〉

ホテルに戻り、部屋に入った俺が見たのは、服が若干はだけ、頬を真っ赤に染めた母さんと、幸せそうな顔をしながら気絶した父さんの姿があった。

「あっ！　り、リンク！　お帰りっ！」

「……ただいま」

なにをやっていたんだとはあえて聞かないでおこう。

そうしたほうが母さんにとってはありがたいだろうし、そうだ。

「母さん、これ」

さっき、買ったハート型ペンダントの入った袋を母さんに渡す。

「これは？」

「プレゼント、さっき買ってきたんだ」

母さんは袋を開けて、ハート型ペンダントを取り出すと、俺の頭を撫でる。

「ありがとう、嬉しいわ、リンク」

「えへへっ、どういたしまして」

それをやられると、恥ずかしさと、照れくささの、二つを感じてしまう。それを感じてしまうということは俺もまだまだ子供ということなのかな……。

「ただいま」 「ただいま、戻りました」

セラとレノンの声が聞こえたのと同時に、ドタバタと音を立てながら、こちらにやってくる。 どうか、全員戻ってきたようだ。？

俺は、母さんの手をそつと下ろす。 頭を撫でられたのを見られたら、あいつらにどういう目で見られるのが分からんからな。

母さんはどこか寂しげにしていたので、申し訳ないと思ったのだが、

「母さん、服整えてね」

「つつっ!!??」

流石に、服が若干はだけたまま、皆に会ってもらっては困るからな、そこを指摘させてもらおう。

母さんは慌てて、服を整え直し、どうにか皆の目を誤魔化すことができた。

ちなみに、皆は、何故父さんが幸せそうな顔をしながら気絶しているのか不思議に思ったが、そこは難なくスルーしてくれた。

……まあ、リユージュさんとノエルさん、ティーダさんは何となく察したようだが。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

父さんが目覚めたのは、皆が帰ってきてから、一時間後だった。

俺たちは、ちょっと早めの夕飯を取るようになった。

夕飯は、バイキング形式であり、好きなだけ食べれるのだ。

野菜や魚などで作られた料理をズラリと並べられているので、とても美味しそうだ。

料理を取り終えた、俺たちはテーブルの元へやってきた。

「……相変わらず、母さんは食べるな」

「……僕の母さんという勝負だね」

「……すげえな、こりゃ」

「マリカさん、すごい！」

「い、いいじゃない！　だって美味しそうなんだもん！　食べたいんだもん！」

「あははは、リンク、レノンくん、ティーダくん、あまり苛めないであげて」

ティアナは純粹に驚き、俺たちは母さんの持ってきた料理の数に、呆れたようにため息をついた。お皿はもう置く場所もなく、しかもプレートの上には三枚の皿が乗っかっておりながら、プレートを

二枚まとめて使うなんて、どんだけの食欲があるんだ、母さん。

「あら、エクレール。どうしたの？　ずいぶんと少ないじゃない」

「いや、その……………」

「実はね、お姉ちゃん、最近体重増えちゃったことを気にしちゃっているから——」

「セラッ！」

「見た目はあまり変わっていないから、大丈夫だよ、エクレール」

「それでも、気にしちゃうんだ！　男にはわからない気持ちなんだ、これは！」

「同じ女だから、分かるわ……。　リユーグ！　エクレールに謝りなさい！」

「謝りなさい！」

「ええっ！？　慰めただけなのに！？」

こっちはこっちで、リユーグさんが面倒なことになっているし……。

まあ、なんとも騒がしい夕食になってしまったが、それでも楽しいとしか感じられなかった。

第15話〈旅行編〉（後書き）

ちなみに、部屋の設定なのですが、みんなで一緒に寝泊りしています。リリカルなのは温泉旅館と一緒に考えてくれればありがたいです。

第16話〈旅行編〉（前書き）

今回は展開が速く、短いです。ご了承ください。

第16話〈旅行編〉

——来て…………——

……誰だ？

——私のもとに来て——

あんたは一体、誰だ？

——お願い…………ここにきて、誰か…………——

いや、だから……

——【扉】に来て…………——

【扉】？

リンクside

……変な夢だったな。

一体なんだったんだ、あの夢は。

俺は頭を掻きながら、周りを見渡すと、全員はまだ眠っていた。

もう一度寝ようかと考えたけれども、どうもあの夢が気になって、眠れない。

扉
ねえ……。

「あの森林公園にあった、扉のことか？」

昨日もあそこでさっきの声が聞こえたわけだし、他の場所にそんな【扉】なんて見たこともないしな。夢なんだから放っておこうと思っ
てはいゐるんだが、どうも気になってしょうがない。

俺はそこに行くことを決心し、パジャマを脱ぎ、ゴムパンツにTシャツを着て、皆を起こさないように部屋から出た。

*
 *
 *
 *
 *
 *

遺跡の扉にやってきたが、やっぱり昨日と同じ光景だった。

開いた形跡もなければ、開く気配もない。

帰ろうかと思ったのだが、ここまで来たんだから、なんか言つてから帰ろう。

「おい、呼ばれたんで、来てやったぞー」

え？

いま、なんか聞こえた……よな？

俺の気のせいなのか？

「お、おーい、あんたは夢のなかで、俺を呼ばなかった？」

——わたしの声が聞こえるのですか！？——

「ぬおっ！？　び、びっくりしたぁ！」

いきなり、大きな声で、しかも問い詰めるかのように聞いてくるので、思わず上半身をそってしまった。

——あっ、ごめんなさい、つい……——

「いや、別にいいよ。それより、あんたなのか、ここに来て欲しいって言ったの」

——はい。今から、ここを開けます——

扉が一瞬だけ光ると同時に、物々しい音を立てながら、ゆっくりと観音開きで開いていった。

——さぁ、どうぞ——

「……………」

今ならまだ引き返せる、ここに入ったら、厄介な運命に巻き込まれるかもしれないぞ？　それでもいいのか？　お前は普通の人生を過ごせばいいじゃないか。

自分にそう問いかける、ここでどうするかによって俺の人生が決まるかもしれない……。

普通だったら行かずにさっさと帰るかもしれないけど———今ここで帰ったら後悔する、俺はなぜかそう思った。

俺はゆっくりと歩き出し、その扉のなかへ入っていった。それと同時に、扉はゆっくりとひとりでに閉まった。

第17話〈旅行編〉（前書き）

展開早いと思われそうですが、よろしくお願いいたします。

第17話〈旅行編〉

リンク side

そこは、一種の自然の世界だった。

俺が歩く先には季節ごとにしか咲くことのない花が咲いており、周りには成長しきっている木々たち、そのなかには大樹もあった。そして、そこには兎や鹿などの野生動物たちの姿もあった。

この光景は、夢のなかで見たことがある。でも、ひとつだけ何かが足りないのがある、それは一本の剣……。もしかしたら、この奥にあるのか？

——はい、わたしはこの奥にいます——

「っ！　び、びっくりしたあ！」

いきなり声を掛けられたからではなく、その女性は俺の心を読んだから、驚いたのだ。

まあ、とりあえず、まっすぐ進めば、剣があるわけで、その女性もいるってことだ。

俺は草を踏み、花を潰さないように足元を気をつけながら、まっすぐ進み始めた。

歩き始めてから数分ぐらい経つと、どうゆう風に作られたかわから

ないが、木によって作られた橋が見えてきた。

「ここを通ればいいのか……」

俺はゆっくりとその橋の上を歩いていった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

??? side

わたしは今でも驚きを隠せない。

この80年、誰もわたしの声を聞いてくれるものなどいなかったのに、この日ついにわたしの声を聞いた人間がいるのだから……。

恐らく声の高さにして、まだ幼き少年……驚くなどいわれても無理です。

いま、彼はゆっくりとわたしの元に近づいてくるのが分かる。

それと同時に、昔、『彼』もこうやってわたしのもとに来たことに、懐かしさを感じる。

そして、ついに、その少年がから現れ……え？

なんで？ どうして？ なぜ、あなたが『彼』そっくりなんですか？

違うと分かっているけど、わたしは少年に『彼』の名前で紡ぎ呼んだ。

——ルーン……——

*
*
*
*
?
.

リンク side

ルーン？
なんのことだ？
誰かの名前なのか？

——……当たり前、ですよ。もう、永い時間ながいが過ぎたんですか
ら——

「ん？ 永い時間？」

つまり、この女性はもう随分と長く生きてきたってことか——あれ？

「おい、どこにいるのー？」

いままで、俺に声を掛けていた女性の姿がない……つたく、呼び出した本人がいなくてどういふことなんだよ。

——待ってください、今出ますから——

？
今出ますから？
どういう意味だ？

すると、劍から白い影が生まれた、その白い影はゆっくりと人の形を創っていき、それは白いドレスを着た銀髪の女性の形へと変わった。

その女性は恐らく十人中十人は必ず振り向くだろう、無駄な贅肉は

何もない美しい女性であった。

『わたしの名はエクセリ阿斯……あなたを呼んだ者です』

「……あんたは、剣、なんだよな」

『はい、わたしはこの剣自身です』

女性——エクセリ阿斯は台座に突き刺さっている剣を指を指しながらそう言う。

……信じられないと言いたい、しかし先ほどの光景を見てしまったので、信じるしかないのだ。

しかし、ひとつ疑問がある。

「だけど、なんで俺なんかを呼んだんだよ、他の人を呼べば良いじゃないか」

なんで俺みたいな子供を呼んだってことだ。別に俺じゃなくたって、大人——例えば管理局員、鍛えられた戦士とか——を呼べばいいのではないかという疑問。

それをストレートにぶつけると、女性の顔が暗くなった。

『……わたしは、この80年間、ずっと呼びかけました。誰かに、わたしのもとに来てくれるように』

「……………」

『ですが、誰も来てはくれなかった。誰もわたしの声に反応してくれなかった！もう駄目なんじゃないかと、思っていましたがついに……』

「俺が来たってことか……あれ？」

この言い方をすると、あの夢を見せているのは、エクセリアスの仕業じゃなかったのか……。

「来たのはいいけど、俺に何をしろって言うんだ？」

『……わたしを抜いて欲しいのです』

……それだけ？

それだったら簡単じゃないか。？俺は台座に近寄り、剣の柄に手を添える。

柄を掴み、力を籠めて、上に引っ張りあげる！

剣はゆっくりと台座から離れていき、ついにその刀身が現された！

その刀身は両刃で純銀に、そして鏡のように美しく輝く、一種の芸術品のようなものであった。

剣——エクセリアスを天に掲げると同時に、急激な光が俺を包み込む。

あまりの眩しさに思わず目をくらますと、意識を失ってしまった。

第18話〈旅行編（終）（前書き）

旅行編強制終了です。

まだ、アインハルト出ないかもしれませんので、楽しみにしている方、申し訳ございません。

第18話〈旅行編（終）〉

漆黒の雲に覆われし空、地面は草木も生えていない乾いた荒地、そこはまるで無の世界のように感じられる。

しかし、そんな世界に、一人の若者――雲のせい、顔が見えない――が立っていた。

だが、そこにいたのは彼だけではなかった。

若者とは数メートルは離れている、邪悪な気配を漂わせる体格の良い一人の男――こちらでも顔が見えない――が立っていた。

若者はその男を一瞥すると同時に、一振りの剣を具現し、上半身を覆う鎧を身に着け、男に突っ込んで行った。

男はペンダントを、剣に変え、若者の刃とぶつかり合った。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊
リンク side

「……………うあ」

なんなんだ、さっきの。 夢……………なのか？ なんて、あんな夢を。

というか、ここどこ？ 顔だけを動かし、周りを見渡すと、どうやら病院のよう。

身体を動かそうとも、身体中のダルさのせいで、動くことができない

どうしようかと考えていると、ガチャリとドアが開いた音が聞こえ、顔を動かして見ると、そこには母さんが呆然と立っていた。

「大丈夫っ! ? 身体は痛んでない! ? わたしのこと分かる! ? 」

母さんの鬼気迫る表情に、思わず引いてしまいそうだったが、両手で落ち着かせるジェスチャーをしたのだが、どうも落ち着かない。

「どうしたんだよ、母さん、落ち着けって」

「……？」
何日間？」

*
*
*
*
*
*
?

131

あのあと、数分後にナースとお医者さんがやってきて、母さんと一緒に、事情を教えてくださいました。

旅行二日目、【扉】の前に気絶している俺を、母さんたちが見つけた。すぐさま病院に連れて行った。

身体の外傷は見つからなかったが、意識不明になっていたらしく、皆が皆不安でしやうがなかったらしい。あと、一日の旅行日なんて知ったこっちゃないといわんばかりに、すぐ『ミッドチルダ』に帰る、病院へと入院。

それから2週間もの間、俺はずっと意識不明でずっと眠っていたらしい。

まあ、そんなことは置いといて——置いといちやいけないが。

それよりも、もう8月なのか………実感湧かないな。いや、それはどうでもいいか。

問題は、エクセリアスだ。あいつは、いったいどこにいるんだ？

——ここにおりますが？——

「ぬえい!？」

思わず変な声を上げながら、俺は慌てながら、周りを見渡した。

なに、どこにいるの、エクセリ阿斯!?

——…貴方様の中にいます——

おいこら、若干呆れただろう、お前。しょうがないじゃん、だって生前いぜんの俺は魔法の世界なんかじゃない、現実リアルの世界で生きてたんだからよ。　　というか、人の心を読むなよ、人権被害で訴えてやるぞ。

「つて、俺の中?　もしかして、俺の身体の中に剣が?」

——そのとおりです、剣は貴方の中に収められています。　　貴方の一部へとなったのです——

……それって、まさかロストログアには入らないよね?　　後で、ちよいとアルスさんたちに調べてもらおっかな?

「とりあえず、それ出せる?」

——はい、出せます。　　右手に剣わたしをイメージしてみてください——
ずっと瞼を閉じて、右手にエクセリ阿斯が出るというイメージと念を込めると、なにかが手に乗ったと同時に、軽い脱力感が俺に襲った。

多分だが、エクセリ阿斯を召喚よびだしたことによって、魔力が減ったのだろう。

ちなみに、俺の魔力値はCぐらい。

瞼を開くと、手にはエクセリアスの姿があった。

「……………すっげ」

まったく重さも感じられないし、めっちゃくちゃ軽い……………まるで羽を持っているような感じだった。

しかし、まだ入院中の身、無茶をしてしまったので、すぐさまエクセリアスは消えてしまった。

「うう…………どつと疲れた」

——ごめんなさい、無茶をさせてしまって——

「いや、気にすんな。出したいという欲に負けてしまった俺が悪いんだからな」

くわあつとあくびを出した後、徐々に眠気が俺に襲い掛かった。

ウトウトとしていき、俺はゆっくりと瞼を閉ざし、眠り陥った。

第19話

リンクside

俺が退院し、さらには夏休みが終わってから、あれから2ヶ月半は経ちました。

暑かった季節も終わり、涼しい毎日を過ごしています。

もちろん、それはエクセリアスもそうです。

ただ、この世界での、エクセリアスの動揺が凄かったな。

その一部を紹介しよう……。

——マスター、マスター！ 箱のなかに、人が入っております！
コレは一体何なのですか！？——

——マスター！ 鎧を装着した鳥みたいなのが飛んでいます！ あ
れは一体なんなんですか！？——

——マスター、なにか変なものを乗せて走っています！ あれは

なんですか!?!――

――マスター! なんですか、このへんちくりんなものは!?! どころから水を出しているのですか!?! とうか、こんなので、服を洗えるのですか!?!―― e t c. e t c. e t c

……うん、めっちゃ疲れたね。あの勢いは凄かったとしか言えなかったな、うむ。

それと、アルスさんとレジアスさんに、エクセリ阿斯というロストログアがあるのかを聞いてみた。

調べてもらった結果、存在しないとのこと。

それはぶっちゃけありがたいとしか言いようがなかったな。だって、ロストログアを持っていると、管理局に入らなければならないとか言うのを聞いたことあるし。

俺は管理局なんか就職せずに、普通の職業に就職したいからな……喫茶店の店員か、母さんみたいな格闘術――ストライクアーツといわれている――を教える教官とか。あつ、因みに、俺は剣術だけじゃなくて、ストライクアーツも学んでいる。

ああ、そうだ、一言言っておこうかな。

母さんのお腹の中に、新しい生命が宿りました。？

多分、旅行でデキたんだと思います。

周りはもちろんおめでとうと祝ってくれたのだが、両親はなんか微妙な雰囲気を漂わせていました。

まあ、当然だな。

因みに、俺が寝ようとしたときに、トイレに行って、部屋に帰ろうとしたときに、偶然聞いた会話がある。

それをちよつと再生してみよう。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「……ま、まさか、あの時のでデキたなんてね」

「~~~~っ！　もう！　バカッ！」

「い、いいじゃないか。それに、リンクも1人だから、可哀想じゃないか」

「そ、それはそうなんだけど……。だって、リンク、知ってるんだよ、あの旅行で、わたしたちがその、——したこと」

「ぶっ!!　　そ、それって本当!？」

「ううゝ、どうしよゝ」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

はい、ここまで。

後の会話は聞かないであげようと、早目に退散いたしましたので、その後の会話は知らない。

そして、明日は休みという日に――フェイトから電話が来た。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊？

『~~~~~♪』

着信音が響き、パジャマのズボンを着替えると、すぐさま携帯を手に取り、ボタンを押す。

『あ、あの、リンクさん、ですか?』

「はいはい、そうですよー」

『ああ、よかった』

フェイトの安堵の息を吐くのが聞こえる。？

ちゃんと、電話が繋がるか心配だったんだな……。

『あ、あのね、明日って遊べるかな？』

「ん？ 別に構わんけど、俺の親友らも誘っていいか？ お前のことも紹介したいし」

『うん。 もちろん ？』

「それじゃあ、お昼を食べ終えたあと、最初にお前と出会った、あの公園で会おう」

『うん、また明日、バイバイ』

「バイバイ」

プツンと電話を切って、俺はベッドに横になり、瞼を瞑り、すぐに眠った。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

フェイト side

「はあ……………」

受話器を置いて、私は一息ついた。

男の子を誘うのにこんなに緊張するなんて思わなかった、まだ胸が

ドキドキしているもん。

明日はリンクに会うつてだけなのに、なんだか嬉しくなってきた。

遅刻しないように——お昼の^{あと}後に会うから、しな**い**と思うけど——
早めに寝ないと。

私はベットの上で横になり、ゆっくりと目を瞑った。

第20話〈フェイトとお出かけ? (前書き)〉

アインハルトも出ていない上に、長ったらしく書いていてすみません……。

一応予定では、このお出かけシリーズを終えたら、展開を進めようかなと思っておりますので、お付き合いお願いします。

第20話 くフェイトとお出かけ？

リンク side

「ねえねえ、リンク、その女の子ってまだなの？」

「うーん、もう少しのはずなんだが……」

フェイトと始めて出会った公園で、俺たちは彼女を持っていた。

かれこれ、五分は経っている——まだ五分だけど、こいつらにとっては長く感じるのか、俺に聞いてくる。

俺は別にそうは感じられないんだが……年の功か？

「ちゃんと、この時間であっているのかい、リンク？」

「レノン。俺はちゃんと彼女にお昼を食べ終えた後って言ったんだから、大丈夫だって」

「…………お昼を食べ終えた後って、それじゃあ、約束の時間とか言っていないじゃない」

「————あ」

セラの言葉に、俺は思わずピシッと固まった。

しまった……俺としたことが時間のことを言っていなかった！

「いやー、参ったね、こりゃ」

ペチンと頭をたたいて、おどけるが。

「「……………」」

——マスター、あなたはなにをやっているのですか…………——

二人の呆れた目が俺を貫き、ため息混じりに俺を攻めるエクセリアス。

うわぁ、四面楚歌、俺の周り敵ばっかじゃん。しかし、悪いのは俺なんだよな、謝るか。

俺は二人と、胸のなかにいる一人に、謝ろうとしたとき、

「リ、リンク！ 遅れちゃって、ごめんね！」

声が聞こえたので、俺は背後を振り向くと、そこには黒いワンピースを着たフェイトがいた。

「いや、遅れてなんかいないよ。むしろ、俺たちはついさっき来たからな」

「よ、よかった。それと、あの、そこにいる人たちって」

「おお、覚えているか。そうだよ、俺がティードさんに拷問されているってのに、助けてくれなかった薄情な幼馴染二人」

「いや、あの時は確実にリンクが悪かったからね？」 「私、まだ

怒ってるからね」

……レノン、後でシバク。　なんだよいい加減許してくれたっていいじゃないか、サラ。

「まあいいや、お前ら自己紹介しろ」

「はいはい。　僕は、レノン・ナカジマだよ。　リンクの幼馴染だよ、よろしく」

レノンは律儀に腰を折って挨拶。

礼儀正しいな、やっぱりゲンヤさんとクイントさんの息子だからか？　いや、俺と比べると低いが、精神年齢がちょっと高いからか？

まあ、そんなことどうでもいいか。

「私はセラ・ファロンって言うの。　私もリンクの幼馴染なんだ、よろしくね」

「うん、二人とも、よろしくね」

「ほい、そんじゃ、フェイト。　お前も自己紹介しろ」

フェイトが軽く咳をして、喉の調子を整える。

「私はフェイト・テストロッサ……です。　よければ、私と、友達に、なってください」

「はあ……」

フェイトの言葉に、俺は軽いため息を吐いて、フェイトに近づいて。

「こんのドアホ」

「ふみゃ!?!」

思いつきりデコピン。しかし、面白い悲鳴を上げるなこの子。

「い、いたい……」

「なにが、『友達になってください』だ。もう、自己紹介した時点で、友達になったんだからよ」

なにを言っているんだろうね、この子は。

俺がそう言うと、セラとレノンも軽く笑いながら、フェイトに近づく。

「そうだよ、名前を呼び合ったんだから、もう友達だよ」

「セラの言うとおり。もしかして、まだ友達になっていないかな?」

「!?! ううん!! もう、私たち友達だよ!!」

レノンの言葉に、必死に言葉を紡ぐフェイトに、俺たちは思わず笑みをこぼしてしまう。

「う、うう~~~~」

しかし、笑みをこぼす俺たちに、フェイトは変な声を出して、睨みつける。

「くくっ、さてと、それじゃ行こうか。俺たちのお勧めスポットを紹介してやるぜ」

と言っても、商店街内にあるやつらだけだな……。

しかし、なかにはお勧めのスポットがあるのは事実だけだな。

「それじゃあ、行こうよ、フェイトちゃん」

セラはニコリと邪気のない笑みを浮かべて、フェイトと手をつないだ。

「あつ、うん。よろしくね、皆」

その言葉に、俺たちは微笑みながら頷いた。

第21話くフェイトとお出かけ？

リンクside

商店街にある、手作り装飾品店――以前、クイントさんのプレゼントを買った場所――に俺たちはいた。

「うーん、フェイトちゃんに、これは似合わないな」

「そうかな？　でも、わたしはこれがいいかな……」

「ダメダメ！　フェイトちゃんは女の子なんだから、こういうのはダメなの！」

「あ、う、うん……」

セラの勢いに思わずフェイトは腰が弾いている……。

まあ、セラ言い分は確かだな。フェイトも女の子なんだ、そんな黒いブレスレットはあんまり似合わないし、付けない方がいいと俺も思う。

「セラ……そんな鬼のような顔をしちゃダメだよ。フェイトさんが怯えているじゃないか」

「鬼のような顔って何！？　それだったら、レノンなんか……レノンなんか……ええ」と

「「思いつかないのかよ」」

言いどよむセラに、俺たちは思わず突っ込んでしまった。

その光景に、フェイトは笑った。

「うう！？ フェイトちゃん、笑わないでよ」

「クスクス、だって……」

「フェイトも呆れちゃったんだな、セラに」

「な！？ リンク、酷い！」

セラは「うう」と上目遣いで睨んでくるが、全然怖くないので、品物を物色。

ふむ、前にも来たことはあるが、やっぱり色々あるんだな……。

フェイトに似合いそうな装飾品はあるかな……。

そう考えて、目にチラッと入ったのが、金属細工で作られた金色の薔薇で彩られているブレスレットだった。

これ、フェイトに似合うんじゃないかと思い、そのブレスレットを手に取り、眼前まで持ってくる。

値段は……1000円か、ちょうどいいな。

だけど、フェイトにちよいと聞いてみるか。

「なあ、フェイト、これなんてどうだ？」

「え……このブレスレット？」

「ああ、気に入ってくれたなら、買うぜ。フェイトに似合いそうなんだけど、一応聞いておこうと思ってな」

フェイトはそのブレスレットを手に取り、右腕に付けた。

そして、セラとレノンにブレスレットを付けた姿を見せると、

「うんうん！ フェイトちゃん、似合う！」

「うん、本当に似合うよ」

「あ、ありがとう、二人とも。リンク、買ってくれるかな？」

フェイトはどこか申し訳なさそうに、ブレスレットをおずおずと俺に突き出してくる。

その姿に思わず苦笑しながら、頭を撫でる。

「もちろん。友達の最初のお断りを断ることなんてできないからな」

俺は財布を開いてレジのほうへ向かう、このブレスレットを買うために……。

「あつ、やべ、細かいのないや。 レノン、50円貸して」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

フェイトside

リンクの一言に思わずガクツとしそうになっちゃった。

だって、さっきまで、あんなカッコイイこと言ったのに、いきなりあんなことを言い出しちゃうんだもん……。

「なんなんだよ、 さっきまでの台詞、台無しだよ!？」

「だって、しょうがないじゃん。 ないもんはないんだから」

「あゝ、はいはい、きみはいつもそういう奴だったね、すっかり忘れてたよ、僕は」

「そんなことどうでもいいから、さっさと50円」

「はいはい、どうぞ」

ありがとうと言って、リンクはレジのほうへ歩いた。

「あはは、さっきのがなかったら、かつこよかったのにね、フェイトちゃん」

「そうだね……」

でも、さっき、頭を撫でてくれたのが、凄く嬉しかったな……。

リンクが撫でてくれた頭を、私はそっと手で押さえる。？

「？ どうしたの、フェイトちゃん？」

「！ う、ううん、なんでもないよ！ リンクが撫でてくれたのが嬉しいだなんて思ってたないよ！？」

「……ふっふん」

はう！？ し、しまったぁ……。

ジト目で見えるセラに、私はできるだけ、セラと視線を合わせずに、辺りを見渡す。

うう、なんで、セラはそんな目で私を見るのお……………。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

セラside

フェイトちゃんが……ええっと自爆（？本人は自白と言いたかったが、これしか思いつかなかった）？して、わたしが思ったのは一つ。

この子は、私の敵だということが分かった。

でもでも、たったそれだけで、フエイトちゃんとは喧嘩しないよ。

だって、そんなことしても、悲しいだけだもん。でも、リンクは
分け合いっこしたいなあ……。

第22話〜フェイトとお出かけ？（前書き）

まさかのあの三人組が出てきます……出す予定はなかったんですけど、なんかこっちのほうがいいかと思って、出しちゃいました。

第22話くフェイトとお出かけ？

リンク side

装飾品店を出て、次に俺たちが向かったのは商店街から離れた、街の一角にある駄菓子屋にやってきた。

この近未来街——前世の記憶を持っている俺にとっては近未来街——に駄菓子屋なんてあるわけがないと思っていたのだが、一年前、アルスさんにこの駄菓子屋に連れられたのだ。

それなりの年月が経っているため、汚れがついていたり、壁の一部が若干欠けたりしている、駄菓子屋『チャールド』。

その駄菓子屋の周りには、子供たちが集まっていて、駄菓子やら小さいカップめんを食べていた。

「……変な名前だね」

「まあ、そう言いたくなるよね」

フェイトの一言に、レノンと俺は思わず苦笑いをしてしまう。

俺たちもこの駄菓子屋に来たときはそう言っちゃったし。

「早く入ろうよ！ お菓子を買おう！」

セラがきらきらと目を輝かせながら言うので、俺たち——遂にフェ

イトまでもが——苦笑してしまう。

これじゃあ、どちらが案内をしているのか分からないな、まったく。

俺たちは、『チャールルド』の店内に入った。

「うわあ……」

フェイトは店内にある沢山の駄菓子をまるで宝物のように眩しそうに見る。

——ふふっ、どうやら、フェイトさんは世間知らずのようですね——

（ははっ、一ヶ月前に来たときのお前も、フェイトと同じように声を上げてたぞ）

——はう……——

（だけど、エクセリウスは仕方ないか、ずっとあそこにいたんだからな……）

——そ、そうですとも！ 私は80年もあそこにいたのですから、分からなくて当然なのです！——

（必死に言うなよ、まったく……）

エクセリウスに呆れながらも苦笑してしまう。

「？ どうしたの、リンク」

「いや、なんでもないよ。 フェイト、ここの駄菓子屋は人気だぞ」

「そうなの？」

「子供たちのお小遣いでも結構買えるし、おいしいからね、ここの駄菓子」

「そうそう！ 私とリンクとレノン、たまにだけど、学校の帰りに、寄っているんだ！ ね、リンク？」

セラの言葉に頷くと、店の奥にいた、白髪の60代のおじいさんが出てきた。

「おう、仲良し三人組、元気かい？」

「ああ、元気だよ、おじいさん。 腰痛はどう？」

「相変わらず、リンクは難しい言葉知ってるの。 ん？ その可愛い子は？」

おじいさんはフェイトに気づき、指差す。 おい、おじいさんよ、人に指差すなよ、失礼だろう。

「ああ、新しい友達の、フェイトっていうんだ」

「ほう、フェイトちゃんか。 そうかそうか、まあ、よろしくなあ」

につこりという擬音が着きそうな笑顔を浮かべるおじいさんに、フェイトも返すように微笑んだ。

「ちなみに、おじさん、フェイトは始めて来たからさ、安く売ってあげてよ」

……駄菓子屋なんで、そんな高いお菓子は売ってはいないと思うが、一応言っておこう、うん。

「かまわんよ。　そんなじゃあ、初のお客さんであるフェイトちゃんは3つ、ただでやろう。　だが、仲良し三人組は、金払えよ」

「「ええー」」

「はい」

レノンとセラは不満の声を上げるが、俺は苦笑しながら、それに了承した。

二人は渋々と駄菓子を見ていくなかで、俺は自分の好きなお菓子を買おうとすると、フェイトが声を掛けてきた。

「リンク……」

「ん？　なに、フェイト？」

「私、こういうの初めてだから、なにを買ったらいいいのか、分かんなくって……どれがお勧めなのか教えてくれる？」

「うーん、俺も、どの駄菓子がお勧めなのか分からないから……」

そこまで、俺たちは駄菓子に興味を持っているわけじゃない。　た

だ安くお菓子が買えるので、買おうというレベルなのだ。　なので
どんなお菓子がお勧めなのか分からないんだよね……。

「フェイトが欲しいと思ったのを買えばいいと思うよ?」

「私の……?」

「そう、お勧めのお菓子を買うんじゃないくて、フェイトが、自分の
欲しいものを普通に買ってあげばいいんじゃないか?」

俺の言葉に、フェイトは笑顔で「うん!」と頷いて、駄菓子を見出し
て行った。

さてと、俺はいつものチョコレートバットとミニカニパンにラムネ
でも買おうかな……。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

駄菓子を買え終えた俺たちは、ベンチに座って、買った駄菓子を食
べていた。

レノンとは、チョコレートバットに野菜棒、チューチューアイス。

セラは、キャラメルにミニチョコパン、飲むヨーグルト。

フェイトは、麦チョコにヤングドーナツ、ミルク。

「リンクはいつも同じの買ってるね、違うのを買えばいいのに」

「君には、飽きるって言葉はないのかい？」

「いいじゃないか、これがおいしいんだから」

「そうなんだ。じゃあ、今度、それ買ってみようかな」

それぞれ買ったお菓子を食べながら談笑していると、

「相変わらずだな、その三人組」

と声を掛けてきたのは、ひとつ年上の生意気真っ盛りの少年……サ
イファー・アルマシーであった。

その隣にいるのは、同じくひとつ年上の少女、風神。そして、筋
肉が結構ついている少年、雷神の姿もあった。

「いや、相変わらずなのは君たちもだろう」

「うるさいだもんよ！」

雷神はレノンに言われたのが、気に食わなかったのか、怒りながら
そう言った。

……身体は大きくても、精神年齢はレノンのほうが高いかな。

「あ？　なんだ、その女は」

サイファーがフェイトに気づき、俺に聞いてくる。

「この子は俺たちの新しい友達だ。それと、俺たちに何の用だ？」

サイファーが、ただ俺たちに声をかけるだけっていうのは、絶対にあり得ない。きっと、なにか面倒なことを、ふっかけてきたのだろう。

「……復讐」

『はぁ？』

風神の一言に、俺たちは思わず呆けた声を出した。

復讐？？　どういう意味だ？

俺たちのわけ分からないといった顔に、サイファーが馬鹿にしたように「ふんっ」と鼻で笑った――どういう意味なのかが分からない俺たちを馬鹿にするように。

レノンとセラにフェイトは、それが不快だったのか、顔が険しくなった。

サイファーはそんな三人を無視し、俺に言った。

「リンク、俺と、もう一度ストライクアーツで勝負しろ」

第22話くフェイトとお出かけ？（後書き）

サイファアの口調ってあれでよかったんでしたっけ？

雷神は簡単でいいけど、風神の口調が難しい……。。

第23話〈フェイトとお出かけ〉（前書き）

どうも、諸事情で、更新が遅くなってしまい、申し訳ございませんでした。

リンクVSサイファー……なのですが、ぶっちゃけ、すぐに終わりますV

いい加減に、アインハルト出さねばなりませんし……。

第23話くフェイトとお出かけ？

区民センター内スポーツコート、このスタッフに借りた防具を身に着けるリンクとサイファアの姿があった。

レノン、セラ、フェイト、雷神、風神は二人から離れているところで見ていた。

「前は手加減してやっただけだ、今度はマジで行くぞ」

「それじゃあ、お互いに本気でやらないとな」

サイファアとリンクは両腕を身体の前に構える。

「手加減なんざ、すんなよ」

「そっちこそ」

二人は、軽く言葉を混じ合わせ終えたと同時に、互いの拳をぶつけ合わせた。

拳をぶつけ合ったあと、一旦離れ、再び突っ込んだ。

互いの腕をぶつけ合わせた後、サイファアの拳がリンクの頬を狙う。

その攻撃を、リンクは右手首に付けてある防具で受け、サイファアに中段蹴りを放つ。

しかし、蹴りがサイファアの腹に入る前に、サイファアはバックス

と見ていた。

リンクとサイファーさんとの戦いに興奮を覚えちゃうけど、リンクが怪我をしたらどうしようという不安があった。

私は、できるだけリンクが怪我しないように、祈るように手を組んだ。

「大丈夫だよ」

セラが私の手を優しく握った。セラの表情には不安なんてなく、笑顔で私を見ていた。

「……不安じゃないの、リンクのこと」

私の言葉に、セラは首を横に振るう。

「だって、リンクは強いもん、だから心配する必要ないよ。」

優しくも力強い声で、私を励ましてくれるセラ。

壁の片隅で沈んでいる雷神さんの様子を見ると、口争いに勝ったレノンが微笑みながら頷いた。

それだけで、私はこの二人が、どれだけリンクを信じているのかが分かった。

「だから、フェイトちゃんも、リンクを信じよう、ね？」

私が「うん」と言おうとしたとき、ドタンと倒れた音が聞こえた。

音が聞こえたほうに振り向くと、サイファーさんが倒れていて、リンクはパンパンと手をはたいていた。

リンクが勝った！

私とセウは「やったあ!」とお互いの手を叩きあい、レノン「よっしゃ」と言ってガッツポーズをした。

雷神さんと風神さんは『サイファー!』と言って、倒れたサイファーさんの元に向かった

リンク [Side](#)

「はい、俺の勝ち」

「く、くそ……っ、これで、勝った、と、思う、なよ」

悪態つくほどの元気があるみたいなので、別に心配する必要はないな。

「サ、サイファーは補修の疲れで負けたんだもんよ！」

「仕方がない！」

負けたサイファーを庇って、フォローする二人に、俺は「はいはい」と軽く流して、防具を外したあと、俺はフェイトたちのほうに駆け寄った。

「すごかったよ、リンクッ」

フェイトはどこか興奮気味にそう言ってきた。

もしかしたら、フェイトはストライク・アーツを見たのは初めてかもしれないな。

ふむ、今度、フェイトを連れて、ストライク・アーツの練習試合を見せてあげようかな。

「それじゃあ、早く次のスポットに行こうよ。フェイトちゃんに紹介したい場所、まだあるんだもん」

俺たちはセラの言葉に頷いて、歩き出していった。

第23話くフェイトとお出かけ？（後書き）

……風神ってあんな口調でよかったんでしたっけ？

最近、原作の風神のことが、薄れていくから、不安になっていく…
…。

第24話くフェイトとお出かけ（終）（前書き）

なんだか、終わりが中途半端です……。

終わりが中途半端ってことは、自分はまだまだだってことっすね……。

第24話〈フェイトとお出かけ（終）〉

リンク side

あれから、俺たちは様々な場所——ゲームセンター、パン屋、喫茶店、玩具屋等々を巡った。

どの店でも、フェイトは楽しげな笑みを浮かべてくれたので、俺は『よかった』と感じた。

しかし、楽しい時間も長くは続かない。終わりの時は、必ず迎えるのだ。

夕焼けが街を染まっている時間帯に、俺たちは昼に出会った公園にいた。

「……もうこんな時間帯なんだね」

「時間は経つのが早いからね……」

まだ遊び足りないといわんばかりの表情を浮かべているレノンとセラ。

それでも時間は時間、俺たちのような子供は帰らなければならない。

「フェイト、もうそろそろ帰らなきゃ」

「……………うん」

ゲームセンターで取った景品——熊のぬいぐるみと、とあるゲームに出ているピンク色の丸い生命体を抱きしめながら、フェイトは悲しそうにこくりと頷いた。

そんなフェイトに、俺はぺちんと弱く頭を叩いた。

「ふゃ！」

そして、思いつきり、頭をグリグリと力強く撫でた。力強く撫でているので、微妙に痛いだろうが……。

「あい、あたたっ」

「リ、リンク、ちょっとやりすぎじゃないかい？」

何を言うか、レノン。これはまだ序の口だぞ？

「リンク、フェイトちゃんが痛がっているから、やめてあげなよ！」

——マスター、止めてあげてください——

セラとエクセリアスは、同じ女の子であるフェイトに暴力——とまではないかないが、フェイトが痛がっているので、セラの目にはそう見えているのだろうが——を振るっている俺を非難。

さすがに、非難されると、心が痛むので、俺はゆっくりと放す。

フェイトは痛む頭をスリスリと撫でながら、涙目で俺を睨む——ご

めん、ぜんぜん怖くない。

「ひ、ひどいよ、リンク」

「うるさい、なに勝手に、寂しそうな顔になっているんだ」

「う……だ、だって……」

「俺たちだって、お前と別れるのは辛いし寂しいよ。だからって、これが最後ってわけじゃないだろ？」

「……でも、私、またいつ会えるか分からないよ」

「フェイトちゃん、どこか引越すの？」

セラの言葉に、フェイトは「……そんなところかな」と悲しそうな笑顔で俯いてしまった。

……なるほど、それで寂しそうにしていたのか。

だけど、敢えて言わせてもらおう。

「それがどうした」

「え……？」

俺の言葉に、驚いたのか、フェイトは俺を見る。

「また、会えるだろ？」

俺はフェイトに近寄り、そつと頭を撫でた。

フェイトは頭を撫でられたことが恥ずかしいのか、頬が赤くなった。

「そうだよ、リンクの言うとおり！　また会えるよ！」

セラは、フェイトの手を握って、太陽のような笑顔を、暗い雰囲気
を漂わせていたフェイトに見せる。

その笑顔のおかげか、若干だけど、フェイトが漂わせていたくらい
雰囲気が薄れていく。

「そ、そうだよね」

「そうさ。　もし、寂しくなったら、メールを送るよ。　それで、
元気だしなよ」

レノン優しく微笑みながら、フェイトの肩を優しく、ポンポンと
叩いた。

「――うん！」

もう、フェイトには暗い雰囲気は漂わせてはいなかった。

彼女にあるのは、かわいらしく、明るい笑顔だった。

第25話く誕生?く(前書き)

かなり進んじゃいますけど、遂にあの子が生まれます!

みなさん、待たせてしまったすいません!

第25話〈誕生?〉

幾時の月日が流れた。

その月日は、彼らは騒がしくも、楽しい日常が流れた。

マリカのお腹は徐々に膨れ上がり、良好している。

そして、年が明け、リンクたちもひとつ歳が上がり、自分たちの誕生日を迎えれば、晴れて10歳となるだろう。

そして、ついに……彼女が生まれる。

リンクside

小雨が降っているにもかかわらず、俺は傘も差さずに必死に走っていた。

冷たい水滴が、俺に張り付いてくるが、そんなこと気にせず、走り続ける。

なぜ、俺がこんなに急いでいるかというと、今から五分前に遡る。

「ああ、くそつ。 やっぱり、売られてたか、悔しいなあ……」

そのとき、俺はとある小説を買うために本屋にいた。

でも、学校を終えてそのまま行ったにもかかわらず、その小説は売り切れになっていた。

その本を買えるのを楽しみにしていたのに、とても悔しかったとか言いようがなかった。

もう、このまま家に帰ろうと思い、本屋から出ると。

『~~~~♪』

携帯の着信音が鳴り、取り出すと、父さんからの電話だった。

なんだろうと思いつつ、俺は携帯の電源をつける。

『リリリリリ、リンク!? いいいい、今、どどどど、どこにいるの!?』

「? 本屋だけど、それがなに?」

普段落ち着いた雰囲気を表す父さんがここまで慌てているのは珍しいなと暢気に考えていると。

『いいいいいい、今すぐ、びよ、病院に、くるんだ! お、おんんあか、の、子、供が、うううう、生まれそそ、うなんんだ!』

.....!!???

「はああああ!!??」

本屋の前にもかかわらず、俺は思いっきり叫んでしまった。

ちよっ、えっ!? 予定より、まだ一ヶ月も先じゃん!? どうな
ってるんだよ、おいおい!?

——マスター。 混乱する気持ちは分かりますが、今は病院に向か
いましょう——

「そ、そうだな、じゃ、じゃあ、行こう!!」

つまりは、そういうわけだ。

予定より、一ヶ月も先にもかかわらず、生まれるというわけなので
すよ。 アアア、なんで俺はこんなときに本屋に行っちゃってたん
だ、俺の馬鹿野郎!

——……マスター、落ち着いてください——

無理に決まってるだろう、エクセリアス!!

ああ、大丈夫かな、母さん!!

——母さんなら大丈夫だといっていたのは、マスターですよ。 だ

から、落ち着いてください。　こんな雨のなか走っていたら、怪我をしてしまいます――

エクセリアスに言われて、走っていた足をゆっくりとした歩みとなった。

混乱は徐々に納まり、俺はようやく冷静になっていった。

――ですが、マスターの気持ちは分かります。　どうしても、心配になってしまいますよね――

不安にもなるよ、部屋の外からでも聞こえる悲鳴で、思わず竦みあがっちゃうよ。

(……前世まえにも体験したけど、やっぱり慣れないよな)

こういうときに限って、男ってやつは情けないよな。

――本当ですね、情けなかったですよ。　さっきのマスターは――

さっきまでの慌てていた自分を思い出すのと同時に恥ずかしさを覚える。

ああ、畜生、否定できないのが悔しいよ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

病院内にて、手術室前にて、ウロウロしているルークの姿があった。
そんなルークを呆れたように見ているのは、今日は非番――という

よりも、アルスと結婚したときから、主婦としてやっている——のルーテシアを抱いているメガーヌと夫であるアルス。

なぜ、この二人がいるかというと、メガーヌはルークとマリカの自宅で、お茶をしていたからである。ちなみに、アルスは部下から『働きすぎなので、休んでください』と言われて、仕事場から追い出されたので、暇だったため、二人の自宅に寄った。

「……ルーク、少しは落ち着いたらどうだ？」

「いいいい、いや、だだっだっだっ」

「あらあら、そんなこと言っても無駄みたい」

動揺しているルークに落ち着かせようとしているのだが、それは焼け石に水であり、まったくと言っていいほど無駄だった。

「やれやれ……情けないもんだな」

「あら。そういうアルスだって、私がルーテシアを産んでいるとき、普段の様子とは慌てていたって聞いたわよ。あと、あたりをウロウロしていたってことも」

「……………おい、それをどこで聞いた。というか、誰が言ったんだ、そんなこと。クイントか？」

「リンク君が教えてくれたわよ」

ヒクツと口元をゆがみ、指をゴキンゴキンと鳴らすアルス。

どうやら、メガーヌに教えたことに腹立っているようだが、アルスの頬が若干赤い。

恐らくだが、腹立っているのと同時に、恥ずかしさもあるのだろう。

まあ、大切な人にそんな恥ずかしいことを告げ口されてしまえば、そうなってしまうだろう………たぶん。

「あつ、メガーヌさんにアルスさん。来てたんですか」

タイミングが良いのか悪いのかは分からないが、リンクはやってきた。

「リンク、明日覚悟しろよ」

「はい？」

突然の言葉に、リンクは首を傾げるが、その意味を知ったのは後日。

まあ、それはともかく閑話休題として。

「リリリリ、リンク！ マママママ、マリカがが」

「落ち着いて、父さん。 ほら、深呼吸深呼吸」

「おおおおおおおちおちつ——」

「ったく。 ごめん、父さん！」

まったくと言っていいほど落ち着きを見せない父親に、リンクはなぜか謝罪の言葉を述べる。

そして、何を思ったのか、ルークの腹を思いっきり殴った。

「ぐう……おう」

ルークは一体何が起こったのかわからないまま、そのまま気絶した。まさかの光景に、メガーヌは「ええ!？」と驚いたが、アルスに関しては――

「うむ、腕は確実に上がっているな、リンク。これからも精進しろよ」

「ありがとうございます♪」

リンクを褒めていた。

第25話 誕生? (後書き)

……すいません、もうちょっとお待ちください。

というか、最近忙しいな。一年前までは楽だったのに、どうしてだ？

第26話〈誕生〉（終）

リンクside

父さんが気絶してから、3分後、父さんは目覚めた。

「あいたたた……ひどいよ、リンク」

「だから言ったじゃん、ごめんって」

「ああ、なるほど。あのときの『ごめん』ってそういう意味だったの……って！ だからと言って、思いっきり殴ることないじゃないか！」

「だって、あのときの父さんを落ち尽かさせるためにはああするしかなかったんだもん」

「いや、だからって……」

「騒ぐな、ここは病院だぞ」

俺たちの口争いに終止符付けたのは、アルスさんだった。

「ぶっちゃけ、もしもリンクが殴らなかったら、俺が殴っていたかも知れんぞ、リンク」

「……………」

アルスさんの言葉に、父さんは固まり青ざめてしまった。

もし、アルスさんが父さんを殴ったら、俺よりもひどいんじゃないか。

多分、氣絶した後も、ビクンビクンと痙攣していると思う……。

「……リンク、止めてくれてありがとう」

……息子に殴られた父親が言う台詞ではないと思うが、とりあえず「うん」と返しておいた。

「——んくっ、つうあ、はあああ！」

手術室から、苦痛に耐えている声が聞こえる。

その声を聞きたびに、俺は——いや、俺と父さんは身体を疎^{すく}んでしま^うう。

アルスさんはただただ冷静に腕を組んでおり、メガーヌさんは両手を胸元で組んでいた。

あり、ちくしょう、どうも慣れないなあ。

貧乏揺すりがぜんぜん止まらない……止めようと思っても止められないのだ。

「マリカの傍にすら、いてられないなんて……」

父さんもなんかどんよりしてるし……こういうときって男ってやつは情けなくなる

「……ねえ、二人とも」

そんな俺たちに声を掛けるのは、優しい微笑を浮かべているメガ―ヌさん。

「マリカを信じて待ちましょう？」

——信じて待ちましょうって言われてもな。

「あなたたちが不安になる気持ちは分かるわ。でも、あの子だって、子を産むのを受け入れて、試練を受けているの。だから、あなたたちは、あの子が必ず無事でいるって信じていればいいと思うの」

メガ―ヌさんはそう言って、俺の手を優しくそつと握る。アルスさんは、父さんの頭をグリグリと撫でる。

俺と父さんは互いの顔を見合って、互いに笑みを浮かべて頷いた。

そうだよ……母さんはがんばって試練を受けているんだ、そんな母さんを信じて待たないでどうするんだ。

だから――

「それじゃあ、父さん。　ちょっと早いけど、母さんの退院祝いでも考えよっか」

ちょっと早いけど、父さんと一緒に母さんの祝いを考えよう。

必ず帰ってくるって言うことを前提にして。

「そうだね。　料理はマリカの大好物でも作ろうか」

「プレゼントは何にしようか……ペンダントにする？」

「うーん、いや、料理本でも買ってあげよう。　少しは自分で出来るようにしないと――」

母さんの祝いについて話し合って一時間後――。

『おぎゃあ！　おぎゃあ！　おっぎゃあ！　おぎゃああ！』

赤ちゃんの泣き声が聞こえ、俺たちは立ち上がった。

そして、手術室の扉が開き、看護婦さんが小走りでこちらにやってきた。

「おめでとうございます！ 元気な女の子が生まれましたよ！」

「っ、マリカは大丈夫ですか!？」

切羽詰った父さんの顔に、動揺せず看護師さんは「無事ですよ」と言っただけだった。

「がんばった奥さんに声を掛けてあげてください、皆さんも」

看護師さんがそう言ったのと同時に、手術室からストレッチャーに乗せられた母さんが運ばれてきた。

「ああ、ルーク」

「マリカ、よく頑張ったね……」

「えへへ……下手な運動よりキツかったよ」

母さんは力が入っていないへにやりとした笑顔で言った。

「メガーヌ、アルス、あなたたちと同じ女の子だったよ、仲良くしてあげてね」

「ええ、もちろん」

メガーヌさんは優しくに微笑み、アルスさんは力強く頷いた。

母さんは俺のほうを向いて、そっと俺の頭を撫でて、言った。

「リンク、今日からあなたはお兄ちゃんよ。あの子の——アインハルトの優しくて良いお兄ちゃんになってね」

第26話〈誕生〉（終）（後書き）

アインハルト、遂に生まれました！

これからがんばっていきますので、よろしくお願いいたします

第27話（前書き）

今回から、かなり時間軸を進めました。

アインハルトを書いたのですが……上手く書けたかな？

第27話

新暦71年。

朝7時、ストラトス家の二階にある一室。

そこには14歳となったリンク・ストラトスの部屋、そこで彼は今心地良い寝息を立てながら眠っていた。

今日は春休みの初日ということで気が緩み、さらにはアルスの特訓もないということで、スヤスヤと眠っている。

起きる気配はまったくなく、ただただ寝息だけが支配する部屋に――ガチャリと扉が開いた音が響いた。

「うう……やっぱり、ねむってます……」

碧銀の髪と紺と青の虹彩異色が特徴的な少女、リンクの妹――アインハルトだ。

「おにいちゃん、おきてください」

アインハルトは兄の身体を揺り動かすが、リンクは起きることもなく寝息を立てていた。

「むう……、だったらこうです」

舌足らずな言葉でそう言うと、アインハルトは布団のなかに入る。

「……………」

大好きなリンクの香りに、アインハルトはポーとしてしまったが、頭を振って、すぐに気を取り戻し、

「ちょちょちょちょ~~~~」

「つぐ、あはっ、はははははははははは！」

リンクの脇下やお腹などを擦らせ、強制的に起こした。

その笑い声は一階のリビング——二人の父であるルークや、母のマリカまで聞こえていた。

「あらあら、本当に仲がいいわね」

「そうだね、ついほのぼのしちゃうよ」

リンクside

「……アインハルト、なんでこんな時間帯に起こしたんだ？」

ベットで座っているアインハルトに俺は尋ねた。

今の時刻は朝の七時……こんな朝早く起こさなくたっていいじゃないか。

「うう、その、ええと」

「ええとじゃないよ、一体どうして俺をこんな時間帯に起こしたんだ？」

俺は優しく聞くとアインハルトは恥ずかしそうに俯いた。

「きょうは、その、みなさんとおでかけですよね……」

「ん？ ああ、そうだな」

アインハルトの言うとおり、今日はレノンやセラと一緒に出かける予定——自然公園で弁当を食べたり、買いものなどをしようとセラが提案してくれた。

「そ、それで、うれしくって、ついはおきちゃって……、やこそくのじかんまでいっしょにあそびたいなあって……」

恥ずかしいのか頬を紅くしながら、そう言ってくるアインハルトに、

「可愛いなあ、アインハルトは……」

俺はアインハルトを優しく抱きしめ、スリスリと頬ずりした。

「うにゃあ、にいさ〜ん♪」

頬擦りされるのが嬉しいのかアインハルトも俺に返すようにスリスリと頬擦り返してくれる。

ああ、もう、なんて愛くるしいんだ！

——クスクス、仲がよろしいですね、お二方は——

エクセリアスは微笑ましいと言わんばかりに、そう言ってくれるのが嬉しい。

あははは、お前も実態化出来れば、仲良し三人組ができるのにな。

——仕方ありません。仮に、もし私が出てきたら、みなさん驚かれるし、なにより管理局に目につけられそうですからね……——

……そうだったな、すまなかった。

俺のためを思って考えてくれたのに、俺の軽はずみの発言で寂しくさせたことを、エクセリアスに素直に謝った。

俺はアインハルトを頬擦りしながら、エクセリアスとの対話を終えた。

第27話（後書き）

第28話（前書き）

最近、リアルに忙しくて全然書けない……

第28話

玄関前で俺たちは靴を履き、向かい合った。

「ハンカチ、ポケットティッシュを持ったか？」

「はい♪」

「ちゃんと財布持ったか？」

「おにいちゃんが買ってくれた、ねこさんがプリントされたおサイフ持っています♪」

「お弁当はちゃんと持ったか？」

「はい♪ おにいちゃんこそちゃんともちましたか？」

「うん、ちゃんと持っているから、大丈夫だ。——お菓子は持ったか？」

「はい♪ わたしのだいすきな、チョコパイも——」

「置いてきなさい」

俺はアインハルトの額に軽いデコピンし、

やっぱり、持って行く気満々だったか、お菓子はいらないうぞ。

というか、お菓子はセラが用意してくれるからいらないうての。

「ううゝ、ひどいです、おにいちゃんは」

「酷くないぞ俺は」

恨めしい目——と言っても上目遣いで睨んでいるので、全然怖くない。

そんな不満げな様子のアインハルトの頭を優しく撫でると……。

「ふにゃゝゝゝゝ」

猫のような可愛らしい鳴き声を出すと、俺の手のひらに甘えるかのように擦り寄ってきた。

いやゝ、愛くるしいなゝ。

「さあ、もっとナデナデして欲しかったら、チョコパイを置いてきなさい」

こくりと頷いたあと、アインハルトは靴を抜いで、タタタツと元気良く走って行った。

30秒後。

「おいてきました!」

「よし、そんじゃあ行くぞ」

キラキラと輝く笑顔のアインハルトに背を向けて言うと、手を掴まれ、

「まってください、やくそくのナデナデしてください」

上目遣いでそう言うってくるアインハルトにきゅんと胸の高鳴りを感じた。

抱きしめたいと思うが、そこは我慢して、俺は優しく頭を撫でた。

「ふみゃ〜〜」

アインハルトは鳴き声を出すと、今度は俺の胴体に抱きついてきた。

いや〜、可愛いな、本当。

抱きしめてあげたいとは思っているが、時間も時間だ。

俺は優しくアインハルトを引き剥がし、笑顔を見せて、

「それじゃあ、行こうか？」

「あい!!」

……………あい？

アインハルトは自分の言ったことに気づいたのか、すぐに慌てふためいた。

「はう！　ち、ちがいます、今のはちょっとかんだだけです！」

「……くくっ」

ああ、もうなんて可愛らしい妹なんだ。

俺は慌てふためいているアインハルトの頭をグリグリと意地悪く撫でてやった。？

「さて、もうそろそろ行かないと。行くよ、あいちゃん？」

「お、おにいちゃん、いじわるです」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

待ち合わせ場所とはある喫茶店。

その喫茶店はコンクリートとかで作られた他の建物やカフェとは違い、レンガ製で少し歴史を感じさせる造りだ。

俺はその喫茶店の扉を開き、店内に入った。

「いらっしゃいませ……あらリンクくん、アインハルトちゃん」

店内に入ると、エプロンを付けた金髪を三編みにした三十代の女性――エリアさんが笑顔で俺たちを迎えてくれた。

「エリアさん、どうも」

「お、おはよう、ございます」

アインハルトは俺の後ろに隠れながらも挨拶をする。

この子は人見知りするので隠れるのも無理もない。

「はい、こんにちわ」

「よお、またここを待ち合わせ場所にしやがったな」

からかい気味に俺たちに絡み、厨房から出てきたのは銀髪をポニーテールにした三十代の男性。

「ルーネスさん、許してくださいよ。ここでコーヒー飲んでつて
るんですから」

「コーヒーだけだろ。他にもなんか頼めよ」

全くと言わんばかりに苦笑して、奥のテーブルに指差す。

「あいつはもうとっくに来ているから、あの子が来るまで待ってて
やれ、そんでもってなんかを頼め」

当たり前ですよと言って、俺たちは奥のテーブルに行くと。

「おはよう、二人とも」

そこには、ジーパンにYシャツ姿というラフな格好をしているレノンの姿があった。

やせ細い身体をしているけど、服の下は筋肉が結構ついている、腹も割れているほどに。

「よお、レノン。 早いな」

「おはようございます、レノンさん」

「おはよう。 早いって、君もこの時間帯に来てるくせに、よく言うよ」

アインハルトには優しく接するくせに、俺に対しては冷たいなお前。まあ、どうでもいいけど。

アインハルトは何かを求めるかのように俺を見つめるが、俺はあえて無視して、席に座る。

「ん？ どうした、アインハルト。 座らないのか？」

「……むううう」

俺的にはちよつとした冗談のつもりだったのだが、思ったよりもアインハルトの機嫌が悪くなった。

やれやれと苦笑しながら、アインハルトの両脇を優しく掴み上げ、膝元に置いた。

「……えへへへ♪」

アインハルトは嬉しそうに笑うと、顔を俺の胸に近付きスリスリしだした。

そんな可愛い妹に俺は優しく撫でてあげる。

「はいはい、ご馳走様です。 すいません、ブラックコーヒー二つとココアくださいー」

「あれ？ レノン、お前ってブラック飲めたっけ？」

こいつはまだミルクを入れるレベルのはずなんだけど……。

レノンは俺の考えていることが分かったのか苦笑しながら、

「そんな甘々な場面を見せられちゃ、カフェオレなんか飲めないよ……」？

第28話（後書き）

年齢は違うけど、ルーネスとエリアを出しました。

自分、ルーネスとエリアは幸せに生きて欲しいです。

第29話（前書き）

今回は早く投稿できました……私的に見ればですけど

第29話

リンク side

ルーネスさんの作ったコーヒーは美味しい。コクと苦味の絶妙に合わさったこの味はインスタントや他の店じゃ出せない。

「うん、美味しい」

「？ そんな、まっくろいのですか？」

「おう。アインハルトがこの味を理解するにはまだまだ早いかな」

ココアの入ったカップを両手で持ちながら上目遣いで見てくるアインハルト。

そんなアインハルトを抱きしめたいと思ったが、さすがに危ないので頭を撫でる程度にした。

「むにゅ〜」

撫でられたことによってアインハルトは嬉しそうな声を上げて、俺の体に寄っかかった。

さてさて、それは置いといて……。

「……なに、リンク」

俺の視線に気づいたのか、レノンは不機嫌そうに俺を睨みながらもブラックコーヒーにミルクを入れる――やっぱり入れやがったな、こいつは。

まったく、せっかくのブラックコーヒーが勿体無いじゃないか、というより最初からブラックコーヒーを頼むんじゃないか、と

俺の考えていることが分かったのか、レノンはふうと息をついて、コーヒーを口に運んでいきながら言う。

「……僕は子供舌なんだから、ブラックは飲めないんだよ、君と違ってね」

「……あのよ、それ自分で言ってみなしくないか？」

俺の言葉にレノンはピシッと飲む格好のまま固まった――俺の言葉に一理あると思ったのだろう、若干陰が生まれだした。

まあ、同情はしないぞ、というか自分で自爆したんだから自業自得ってやつ？

「レノンさん、どうしちゃったんですか？」

固まってしまったレノンの姿に、アインハルトは首を傾げながら俺に聞いてきた。

さすがに言ってしまうのはかわいそうなので、俺はただただアインハルトの頭をそつと撫でた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

コーヒーを飲み終えた俺たちは彼女が来るまで、他の飲み物でも飲もうかと思いメニューを取ろうとしたときに、ガチャリと扉が開く音が聞こえたので、俺たちは扉のほうへ向いた。

両手には青色のハンドバッグを持ち、バック淡い色の桜の髪をサイドテールに、膝元しかないミニスカート、そしてこれまた淡い色の桜のTシャツを着てその上にYシャツを羽織っている少女――セラ・フォロンの姿があった。

「はあ、はあ、遅れてごめんね。寝坊しちゃって」

「気にするなって、ただレノンは内心怒りまくってるぞ」

「あう、ごめんね、レノン」

「いや別に怒ってないよ、リンクの嘘を真に受けなくて」

なんだよ、そこは「本当だよ、まったく!」と言うべきだろ。相も変わらず、つまらないやつだな……。

「むう、やっぱり、おにいちゃんのいったとおりです。レノンさんはつまらないひとです」

「ぶふっ!?!」

アインハルトの言葉で、厨房にいる笑いを止められずに噴出してしまったルーネスさんの声が聞こえた。

あつ、ルーネスさんだけじゃなくって、店の中にいるお客さんやバイトの店員、エリアさんにセラまで忍び笑いしている。

レノンは頬を引きつかせながら、アインハルトに聞く。

「……………どういことだい、それ」

「だって————むぐ」

「さて、セラも来たことだし、早く行こうか？」

また面白いことを言う前にアインハルトの口を塞ぎ、抱き上げる。

恨みがましい目で俺を見るレノンを無視して、俺はバイトの店員さんにお金を払い、セラの元に近づく。

「よう、可愛い服着ているじゃないか」

「っ、そ、そう？」

「髪色と同じ色合いの服を着ているし、何よりセラがいいからな」

服というのは着る人によって違ってくるのだ——とどっかの雑誌に書いてたような気がする。

だからといって嘘は言っていない、だってセラが似合うのは事実だし。

「ありがとう」

ほめられたことがうれしかったのか、セラはうれしそうに笑みを俺に向ける。

その微笑みに俺はちよつとドキッと胸がときめいた——成長すると見慣れている微笑みでも胸がときめくんだな……。

ほめたことで、俺もちよつと恥ずかしくってつい頭を掻くと——

「……ていつ」

「ぐふっ」

突然、腹部に軽い衝撃が奔った。

いつもだったら、こんな衝撃に耐えることなんて容易いんだけど、今回は気を抜いたのと——

「むう~~~~」

——可愛い妹であるアインハルトの攻撃だからこそできなかったのだ。

これが弟だったら怒りたいところだったのだが、如何せん妹なのでさすがにできないので、

「こら」

「はうう!?!」

軽いデコピンでアインハルトの行動を戒める。アインハルトは大

げさに悲鳴みたいなのを上げるが、そんなたいした痛みではない。

「こんなことをしちゃいかんぞ？」

「ううゝ、はい」

アインハルトは恨みがましい目で俺を見るが、そこは無視無視。

反省し、ちゃんと謝ってくれれば、文句はないのだ――まあ当然の本人は膨れっ面をしているが。

俺とセラは顔を合わせて、困ったように笑みを浮かべた。

「むうゝゝゝゝゝ！」

「ぶう！？」

それが気に食わなかったのか、アインハルトは思いつきり俺の顎を打ちつけてきた――本当に反省しているのかと疑問に思ってしまった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「ははっ、あの兄妹はやっぱ面白いな」

「ええ、そしてとっても可愛らしい……」

リンクとセラが微笑み、アインハルトがそれを気に食わないのか、リンクの顎を打ちつけるという光景を厨房から覗いて見ながらそう言うルーネスとエリア。

さあ、自然公園に行きましようか！

第29話（後書き）

自分、ルーネスとエリアは幸せになってほしいです。

ですので、あのイチャイチャを書いてみたんですが……どうですか？

第30話（前書き）

ほのぼの路線で書いていきたいと思います♪

第30話

リンク side

ミッドチルダの首都、クラナガンから遠く離れた地方——と言ってもバスで2〜3時間かかる程度——に、サスーン自然公園はある。

近代的な建物や乗り物に溢れた都心と違い、昔から残る自然の風情に溢れた場所だ。休日には、目まぐるしい都心から開放され、自然の癒しを求めてこの場所を訪れる人が多い。

そんな自然公園で、可愛らしいシートを地に張り、そこで座っているセラはジッと俺たちの箸——アインハルトはフォーク——に挟んでいるおかずを見ている。

……正直食べづらい。

なぜ、セラがじっとこうまで見る理由——それは俺たちに始めて自分で作った料理を食べさせるから。

俺はパクッと端に挟んでいた卵焼きを食べる——噛んで噛んで、そして飲み込んだ一言。

「おおう、美味しい」

偽りなんて何もない、正直な感想だ。

「ホント？ よかったあ……」

俺の言葉を聴いて、セラは安堵の息を吐いた。

……そんなに心配することはないと思うけど。

「うん、本当においしいよ」

「おいしいですー♪」

ほら、レノンとアインハルトだっておいおいと言ってるじゃないか。

自分に自信を持てよ、これ本当においしいんだから。

「二人とも、ありがとう。うれしいよ」

「よし、こっからは早い者勝ちだ。から揚げいただき！」

「あつ、ずるい!？」

「それじゃ、わたしはたまごやきをもらいます♪」

「アインハルトちゃんまで!？」

ふつ、レノンよ、早く取らないと無くなるぞ。

『ごちそうまでした』

「はい、お粗末さまでした」

弁当の中身全部を食べ終え、俺たちはちゃんと食後の挨拶をする。

全部食べてくれたことがうれしいのか、セラはとびっきりの良い笑顔で俺たちに言う。

「よしっ、食後の運動と行こうじゃないか」

「はい！」

俺の言葉に勢いよく返事してくれたのはアインハルト。

セラは弁当をハンドバックの中に入れながら、微笑ましい目で俺たちを見る——まるで慈母みたいに見てくれる。

「元気だね、君らは」

あきれ気味に俺たちに声をかけてくるのはレノン。しかし、放った言葉とは裏腹に肩を揉み、身体を軽く伸ばしたりしていた。

……やる気満々じゃねえか。

「……レノン、言ってることとやってることぜんぜん違うよ？」

「う、うるさいな……」

レノンは恥ずかしそうにしながら、セラに返事を返した。

「そんじゃあ、何にしようか……よし、鬼ごっこだ」

「いや、ほかにも人がいるから迷惑になるんじゃないかな？」

「うーん、じゃあ、缶蹴り」

「缶なんてここにはないじゃないか、しかもここから自販機まで結構遠いよ」

「えー、そんなじゃあ、トランプ」

「もはや運動から外れているじゃないか!？ もっと考えてよ!！」

等々、俺とレノンの漫才が繰り広げていると。

「……アインハルトちゃん、私と一緒にキャッチボールしよっか？」

「ボールもってるんですか？」

「うん。ただ、そのボールはやわらかいボールなんだけどね」

そんな会話がしていることなど知らず、俺たちは漫才まがいなことをしながら言い争っていた。

第30話（後書き）

……ちゃんとほのぼのできていましたかね（汗）。

途中、ギャグも入っちゃいましたが……。

第31話

リンク side

「……平和だねえ」

柔らかい芝生の上に寝転がり、アインハルトとセラのキャッチボールをしている姿を見て、俺は思わず笑ってしまう。

平和で心優しい風景を見ているようで、どこか微笑ましく見てしま
う。

レノン？ ああ、あいつならさっきジュースを買わせに行った。
じゃんけんで負けたからな……。

「いやー、本当に和むよな」

——まるでお父様のようなことを考えていますね、マスター——
エクセリ阿斯はどこか呆れながらも、俺の言葉に同意なのか笑って
言う。

「そうかな？ 誰でもあの光景を見ればそう思えちゃうよ」

——ふふっ、それもそうですね——

俺の言葉に同意をするエクセリ阿斯……そうだろうそうだろう。

あの光景を見て、微笑ましくもなければ和まないとか言つた奴はこの俺が直々にぶちのめしてやろう。

——…何を考えているのですか、もう——

え？
なに？
俺なんか悪いこと言ったか？

むしろ正論を言ったような気がするぞ。

——もういいです……はあ——

エクセリアスは俺の言葉に呆れたのか、ため息をつきながら帰って行った。

一体なんだったんだろう、あいつは……。。

「ふわああ」

心地よい太陽の光に、芝生の上で横になっているということもあつてか、眠気が襲い掛かつてきた。

その眠気に俺は負けて、瞼を閉じた――。

「あー、ボールが」

ボールはアインハルトよりも高く上がり、そのまま投げられた方向へと飛んでいく。

アインハルトはそのボールをすぐさま追いかける。

そして、そのボールは吸い込まれるように、リンクの顔にポンと当たり、コロコロと傍らに転がる。

「おにいちゃん、取ってくださいーい」

アインハルトの呼びかけにリンクは答えず、ただただ沈黙していた。もしかして、怒らせてしまったのかも……。

「うう……」

アインハルトは不安で暗くなってしまうそうになるが、すぐさま頭を振るう。

優しい兄がそんなことで怒るはずがないと言いつ聞かせ、歩き始めた――トテトテと擬音が似合いそうな歩みで。

「おにいちゃん？」

アインハルトはリンクの顔をのぞいてみると、そこには心地よい寝顔ですやすやと眠っているリンクがあった。

「ねむってる……」

「アインハルトちゃん、どうした――」

「しいーです」

「……やれやれ」

頭に手をやりながら、首を振っていた。まるで、頭が痛いと言わんばかりに。

その理由というのは――

「おい、人の顔を見てため息つくんじゃねえよ」

「兄貴、こいつぶちのめそうぜ」

首には金色のネックレス、そして鼻にピアスといった柄の悪そうな男と、ヘッドホンつけた柄の悪そうな男の2人に、ガンつけられているからだ。

第32話（前書き）

訂正いたしました。

第32話

レノンside

柄の悪い二人の男の人に睨まれながら、僕はもう一度ため息をつきたかったが、そうしてしまったらこの二人にまた言われるから押し留める。

いったいどうして、こんなことになっているんだっけ？

今から、3分前のこと。

確か、じゃんけんで負けた僕は、自動販売機を探していたんだ。

そして、ようやく見つけた自動販売機で、ブラックコーヒーとオレインジュースとサイダーとピーチジュースを買い終えた僕はジュースをポケットの中に突っ込んで、リンクたちの元へ戻ろうとしたとき、

「おいおい、じいさんよー、人にぶつかっておいて、『ごめんなさい』ってだけかよ?」

「なにを言っているの、そっちが勝手にぶつかってきたんじゃない!!」

ガラ悪い声に振り向くと、そこにはおじいさんと孫であろう気の強

い僕たちと同じぐらいの年頃の金髪の女の子が、これまた柄の悪そうな男二人――首には金色のネックレス、そして鼻にピアスといった柄の悪そうな男と、ヘッドホンつけた柄の悪そうな男の2人――に絡まれていた。

……腐っている奴らだね、いたいけなおじいさんとその娘さんを襲おうだなんて。

僕は思わず舌打ちをし、足をおじいさんたちのほうに向けようとしたとき――、

「うるせえ、邪魔すんじゃない、ガキ！」

「きゃあっ!!！」

「セリス!!！」

女の子は鼻にピアスをつけた男に突き飛ばされ、僕はすぐさま走る。地面に尻餅つきそうな女の子の両脇下に手を滑り込ませて、つかせないようにした。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう」

助かったと言うような表情を浮かべて、僕に頭を下げた。

怪我がないようでよかった。

「セリスっ！」と駆け寄ってきたおじいさんと女の子を、僕は後ろに下げさせる。

「おーおー、かっこいい兄ちゃんに助けられてよかったなー、じいさんに譲ちゃん」

「ひっひっひ、兄ちゃんよ。今なら、その子を渡せば、助けてやるぜ」

二人が馬鹿にしたような笑みで僕を見る——おそらく、見た目で僕を判断したんだろう、簡単に倒せる細身の奴という、見た目で。

まったく失礼な彼らに僕は思わず、

「……やれやれ」

頭に手をやりながら、首を振るう——馬鹿を相手にしているのも苦痛だと言わんばかりに。

「おい、人の顔を見てため息つくんじゃねえよ」

「兄貴、こいつぶちのめそうぜ」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

そうだそうだ、それが原因だったね。

……というか、これだけのことで、怒らないで欲しいよね。

ヘッドホンつけた柄の悪そうな男は、苛立った顔で僕を睨み、拳を

まるで教官のように叱るようにそう言ってあげて、僕は上段蹴りで鼻にピアスの男に、これまたカンちゃんと同じように、顔面に蹴りを入れた。

「ぶらあ！」

奇声を上げながら、鼻にピアスの男の人は仰向けで倒れた。

——こんなに弱いのか！？

あまりの呆気なさに僕は一時呆然としてしまったが、それは三秒で消し去り、僕は後ろにいる2人に声をかける。

「あの、大丈夫ですか？」

「おお、お前さんのおかげで無事じゃったよ、ありがとう」

おじいさんは気のいい笑みを浮かべながら、僕にお礼を言った。

女の子はどこか呆けていたけど、すぐにはっと気づいて、僕に頭を下げる。

「おじいちゃんを、わたしたちを助けてくれてありがとう」

「いいえ、気にしないでください。無事ならいいですよ、それじゃあ僕はこれで」

僕はその場を離れて、すぐさまリンクたちのもとへと向かおうとしたとき、

「お前さんの名前、聞いてもいいかの？」

「え？でも……」

「恩人の名前ぐらい聞いても言いじゃろ？ 儂の名前はシド。そして、こっちは」

「孫のセリスよ。さあ、あなたも名前を言いなさい」

……もし、ここで去ったら、確実に僕はKYという称号をもらってしまうね。それだけは流石に嫌だから、僕も名前を言う。

「僕はレノンって言います。
？また会えたら、いいですね」

笑顔でそう言って、僕は頭を下げ、リンクたちのほうへと向かった。

「……寝てるし」

リンクたちのほうへ戻ってきた僕。

でも、肝心のリンクたちはグッスリと眠っていた。

三人はまるで家族のよう、リンクとセラはまるで新婚さんのように側らで眠っていて、アインハルトちゃんは2人の中心部分で眠っている。

………なんだろう、この家族風景は。

というか、起こすのがめっちゃ勿体ないね。もう少しだけ、寝かせてあげようかな。

僕はポケットからサイダーを取り出して、プルタブを開くと――

「ぶばあ!!」

大量に噴出し、僕の顔にクリーンヒット。

第32話（後書き）

レノンは弱くないですよ。

どのくらい強いかっていったら……うん、ギンガよりも上ってレベルっすかね？

でも、物語の進行情合によっては、変わるかもしれませんよ？ まだ分かりませんがV

第33話（前書き）

いやゝ、更新が遅くなりました。

理由は、やっぱり学校と昔のゲームのせいですね♪

クロノクロス、そしてチョコボさいこー♪

第33話

草も生え、花も咲き、全面的に緑とその花の色に彩られていた草原。

その場所に、一人の若者——髪と瞳の色合いは違うものの、その顔つきはリンクに似ていた——と白いドレスを纏った女性が幸せに微笑んでいた。

若者は女性の脚を抱き上げ、額と額をコツと軽く合わせる。

眼と眼が合うと、二人は笑い合う——本当に幸せそうに。

そして、二人はそっと顔を近づけ、そして——

リンク side

……幸せな光景だったな、あれ。

桃色空間が充満していて、もうお腹いっぱいだな、ありや。

俺はいい加減に起きようと、眼を開ける。

「おはよう、リンク」

「おはようです、おにいちゃん」

セラとアインハルトがひょいと覗き込んできた。

行動が可愛らしい二人に笑い、俺はアインハルトの頭を撫でる。

「おう、おはよう。　　というか、先に起きてたなら、起こしてくれ
たっていいじゃないか」

「うーん、そうなんだけど。　寝顔が可愛くて、起こすのが勿体な
かったから。　　ねー？」

「はいです！」

セラはアインハルトに答えを求めるかのように聞くと、アインハ
ルトは思いつき頷いた。

可愛い……って。　　男の俺に言うなよ、全然嬉しくない。

——あの子たちの言う通り、可愛かったですよ。　　マスター——

……だから、全然うれしくないっつうの。

「よお、よく寝てたな、リンク」

レノンの声じゃない、まったくの第三の声が聞こえて、俺はそっ
ちに振り向くと、

「ああ、新婚夫婦さんじゃないですか」

「「まだ違う　　（わよ）　　！！」」

「『まだ』？　　ということは将来……」

「おぉーと！ お前らなんでここにいるんだ！？」

ちっ、逃げやがった。

もうすぐ新婚夫婦になるだろう一人ーティーダさんは慌てふためいてレノンに聞いた、まるで助けを求めるかのように。

そして、もう一人の人物、オーリスさんは気恥ずかしげに顔を伏せている。オーリスさんはなんか初々しいな。いや、ほら、俺の家族や他の家族らを見ると、ついそう思ってしまう。

そこで、ちよいと視線をティーダさんに戻すと、レノンが苦笑しながら答えた。

「僕たちはここで遊んでいたんですよ、弁当を食べたり、ボール遊びをしたりね」

「ふーん。レノン、こいつらと遊ぶのはいいけどよ、ティアのことも構ってやってくれよ？ 最近、寂しがっててよ」

「はぁ……。っとそういえば、ティーダさん、ティアナちゃんって明日暇ですか？」

「？ ああ、暇だと思うけど……。なんでだ？」

「実はティアナちゃんが見たがっていた映画のチケットを手に入れたんで、二人で見に行かないかって誘うんですよ」

ほほう……。それはいいことを聞いたぞ。

明日、こいつらを尾けて観察でもするかな。

そんなことを考えていると、

「リンク、明日尾けないでね」

レノンにはっこりと笑顔を浮かべているが、眼は俺を睨みつけている。器用だな、こいつ。

俺は「了解」と苦笑しながら両手をあげる。

こういうときのレノンには逆らえねえんだよね……怖くて。

「おにちゃん、どうしたんですか？」

「ん、なんでもないよ。アインハルト……よいしょと！」

「ふきやあ！」

俺はアインハルトを抱き上げて、胸の中に収める——いわゆる抱っこってやつだ。

「よおーし、ここら辺をちよいと散歩したら、帰るとするか」

「そういえば……私たちってここで昼寝しちゃったから、このあたりよく知らないんだっけ……」

「あら、そうなの？ それじゃあ、散歩した方がいいわ。ここは、結構気持ちのいい場所なのよ」

オーリスさんはセラに微笑んで、そう言った。

ん？　ちょっと待て。

「その言い方からすると、来たことあるんすか、ここに？」

「ふふっ、そうよ。それでね、ここでティーダさんに――」

「おおーと！　お前ら、暗くなる前に早く行くぞー！！」

？

オーリスさんが何かを言おうとする前に、ティーダさんが大きな声を上げて、それを遮った。

ティーダさんはレノンの腕をつかんで、引っ張っていった――「痛いですが、痛いです！　引っ張らないでー！！」などと悲鳴が聞こえたが、無視。

ほほう、あの焦りようだ、なるほどね。

俺と同じ答えをたどり着いたのか、セラはニヤニヤしながら俺を見る。

俺もニヤニヤしながら、二人でオーリスさんに言う。

「「お幸せでなによりで」

「です」

「ふふっ、ありがとう♪」

オーリスさんは幸せそうに笑っていた。

☆ ☆ おまけ ☆ ☆

オーリス「それにしても、あなたたちって本当に息があってるわね。
まるで夫婦みたい」

セラ「ふえ!?!」 アインハルト「む……」

リンク「夫婦ね……はは、それ合ってるかも」 (息ピッタリだし、俺たち)

セラ「ふええええええええええええ!?!」

アインハルト「むううううう~~~~!!」

リンク「あいててててて! ア、アインハルト! 抓るな、抓るな! 痛い痛い痛い!」

オーリス「クスクス」

第33話（後書き）

これからも頑張っていきますので、よろしくお願いいたします！

第34話（前書き）

今回はほのぼのだけでなく、若干シリアスが混じっています。

第34話

拳と拳がぶつかり合い、蹴りと蹴りがぶつかりあう。

「双牙斬！」

少年は自分の武器である竹刀を斬り下ろしから斬り上げへと振るった。しかし、その刃は碧銀の髪には掠りもしなかった。

「つつ、にゃろ！」

袈裟懸けを放ったが、軽いバックステップで避けられる。

後ろに下がった女性を追いかけるように少年は足を前方に踏みつけ、

「瞬迅剣！」

少年は突きを放つ——以前この技で友を吹き飛ばしたというちよつとしたエピソードがある威力の——が、女性は避けることなく刃を掴んだ。

女性はこの動作を簡単に行っているが、普通の人間だったら避けることなく吹き飛ばされているだろう。

「まずっ！」と焦りながら、武器を捨てようと手を放そうとしたのだが、今度は手首を掴まれた。

女性は少年の武器を捨て、そして……。

「霸王断空拳!!」

その少年の腹部に手加減の入った女性の拳が入った。

手加減されたとはいえ、やはり痛いものは痛いので、少年は腹部を押さえながら膝をついた。

女性は肩まで切り揃えた髪を払い、笑う。

「はい、おしまい。　まだまだね、リンク」

女性——マリカ・ストラトスは、少年であり自分の息子であるリンクにそう言った。

リンクside

「つくそ、また負けた」

悔し紛れに俺は竹刀を軽く地面に叩いた。

なんでこんなに強いんだ、うちの母親は。

「リンク、大丈夫!？」

仰向けになっている俺に覗き込むように見るのはセラだ。

「心配するなって、母さんはそれほど強く打ってない。　至って無

事だよ」

「よかったあ……」

俺の言葉に一安心したのかセラは安堵の息を吐く。

というかお前も馴れろ、この模擬戦という名の運動を。

まあ、結構マジでやっちゃまうけどな、お互い負けるの嫌いだし。

「ふふん、これでわたしの60勝0敗ね♪」

にやけ顔で俺にいつてくる母さんに正直言って腹立ったが、事実なのでしようがない。

ったく、俺はいつになったら母さんやアルスさんにまともに勝つことが出来るんだ？

未だに追いつけないその背中……。

俺はいつになったらその背中を乗り越えられるんだ？

「ああ……遠いな、こんちくしょう」

「え？」

「いや、なんでもない」

愚痴ったところでなんも意味ないか、コツコツと進んで行くしかない。

俺は自分に言い聞かせて、立ち上がると。

「おにいちゃん！」

「おっと」

アインハルトの声が聞こえたのと同時に、腹に軽い衝撃が奔った。

別にたいして痛くも痒くもないので大丈夫である。

「おにいちゃん、ジュースです！ のどがかわいているでしょう？」

「おお、準備ご苦労。 今度、お前の好きな御菓子を買ってやろう」

「ほんとですか!？」

「但し！ 200以下のやつな」

「……はうう」

「……………こいつは。」

母さんにスポーツ飲料を渡している父さんに向かって俺はため息つきながら言う。

「父さん、いくら可愛い娘だからって、甘やかしちゃダメだ。 知ってんだぞ、父さんがアインハルトのために500もするお菓子を

買ったって」

「うぐ……」

一人娘だからか、父さんはアインハルトを本当にかわいがっている。それは別に構わない、俺も母さんも可愛がっているんだ。

でも、いくら可愛いからって、500もするお菓子を買うのはダメだと思う。まだアインハルトは四歳だぞ。そのときのお菓子も全部食べきれなかったから、俺と母さんが食べたんだよね。

「あははは、そのせいで、マリカさんは体重増えちゃったって嘆いてたね」

「うん、まあ、しょうがないだろ」

結構、あのお菓子カロリー高かったからな。

あのときの母さんの悲鳴すごかったな……。

確か、「みやぎやあああ~~~~!!」だっけか？

色気も何も感じられない悲鳴だったな。

まあ、それは閑話休題^{おごといて}。

抱きついているアインハルトに「ありがとう」と言っ、頭を撫でる。

「ふにゃ〜」と可愛らしい声に微笑んで、アインハルトの手の中にあるジュースを取り、それを飲む。

うん、美味しい。

俺はゴクゴクとジュースを飲んでいくと、ふと思いだす。

そういえば、今日は、レノンとティアナがデートする日じゃないか。見に行きたいと思っても、レノンに釘刺されたから無理なんだよな〜。

「まあ、俺らは俺らでゆつくりしようか」

「? うん」 「はいです!」

セラは戸惑いながら、アインハルトはなにも考えずに声を出して頷いた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

レノンスide

僕は待ち合わせ場所であるカフェのオープンテラスにて週刊雑誌を読みながら、カフェオレを飲んでいた。

その中にある記事『地上が導入した【死刑制度】に本局激怒!』に目が入った。

この【死刑制度】というのは重い犯罪——例えば、大量殺戮やテロなど——を犯した人たちに掛ける制度。

今までは終身刑といわれるものだったんだけど、地上の法律は甘いとのことで、2〜3年前に地上で出来た制度、でもこの制度に反論したのが本局だ。

本局のとある提督さん曰く『犯罪者といえど、人間である。 やりなおす切っ掛けを与えるべきだ!!』ということをやったらしく、それがこの週刊雑誌に書かれていた。

これを見てリンクは、

『やりなおす切っ掛けを与えても、やり直せない人っているよな。特に大きな犯罪を犯した連中』とのこと。

そのときのリンクの言葉に僕は「確かにね」と頷いた。

軽い犯罪を犯した人ならともかく、テロを起こしたり多数の人を殺した人が正直言ってやり直せないと思う。

というか、こうでもしないと地上は守れないと思うし、最近のニュースじゃ、とある拘置場が犯罪者で万杯になっているというのも見たことがある。

やり直せるために拘置場を万杯にさせるなんてね……。

仮にもしもやり直せたとしても、世間の目は厳しい。そしてそのやり直せるお金を払うのは僕たちなんだ。 はっきり言って、善い目などしない。

(はあ、やめようやめよう。　こんなことを考えるのは)

考えるのをやめて、僕は週刊雑誌をゴミ箱に投げ捨てる。

(だって今日は……)

「レノンさん！」

楽しい日になるんだから。

* * * * *

ティアナside

ああもう！　なんでこの日に限って寝坊しちゃったんだろ！！

約束の時間まであと数分もないわ！

全速力で走っているけど、間に合うかな……ううん、間に合わせてみせる！

レノンさんは優しいから遅刻しても怒らないと思うけど、それでもあの人を待たせるわけにはいかない！

やっと見えてきた、待ち合わせ場所。

そのオープンテラスで、週刊雑誌を読みながら、カフェオレを飲んでるレノンさんの姿が。

「レノンさん！」

私はレノンさんが座っている席まで走って、レノンさんの前に立つ。

「ギリギリセーフだね、ティアナちゃん。えらいえらい」

レノンさんは優しく私の頭を撫でる。

それはどこか気恥ずかしい、だけどやめてほしいなんて思ったことなんて一度もないわよ。

「それじゃあ、行こうか」

頭から手が離れるのが分かると、寂しさが募った

けど、手のひらを差し出された瞬間、私はその寂しさが一気になくなり、

「はい！」

嬉しさが身体中を満たしてくれた。

第34話（後書き）

レノンの考えたことは作者自信が思ったことではありません、レノン自身が真剣に考えたことです

第35話（前書き）

レノンとティアナとのデート編ですV

最近、リアルに忙しくなってきた…。

更新遅くなっていますが、これからも読んでください。

第35話

レノンside

『例え、この我が身がどうなろうと、姫は私が守ります』

『レイ……』

そう言っ、主人公であり騎士であるレイはヒロインであるお姫さまをそっ、と抱きしめる。

スクリーンを見ているだけなのに、口の中が甘くなってくるのを感じて、傍に置いておいたお茶を飲む。

今、僕たちが見ているのは、大ヒットしている『騎士と姫君』というものだ。これが結構面白いなだね、アクションも意外と激しいし、ドラマパートも面白く、とてもハマった。

だけど、この恋愛パートがちよっと……その……甘すぎるんだよね。比喩的な意味じゃなくて、言葉どおりの意味で。

……あれ、なんだか、お茶まで甘くなってきたよ。

ティアナちゃんはどうだろう……。

「……………」

真剣に見ていました……。

うん、まあ、女の子だからね。　　こういうのに憧れるのかな？

でも、とりあえず……。

（この甘すぎる恋愛パート……早く終わらないかな？）

本当に切実に願うよ、これは。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

映画が終わり、僕たちはファミリーレストランで休憩し、そこでお昼ご飯を食べようとしているのだけど……。

「はふう……」

メニューを見ずに、ただウツトリした息を吐くティアナちゃん。
その表情は憂いに帯びていて、眼はどこか惚けていた。

「あゝ、ティアナちゃん？」

「……」

……ダメだ。　完璧にあっち側に行っちゃってる。

戻ってくるまで待ってみようかな？　いや、それだと結構な時間を待つと思うし、ここで時間潰すのはもったいないから。

僕はティアナちゃんの眼前に近づいて、額に軽いデコピン。

「いた！？　な、なにするんですか……！？」

「あ、やっと戻ってきた？」

正氣に戻った眼に僕は安心しながらティアナちゃんにそう言っていると、

「は、はははははっは、はひゃい！　ら、らいじょうぶですから……！」

「ん、そう？」

顔全体に真っ赤にしながら言うセリフじゃないけど……ティアナちゃん
 さんがそう言うなら、大丈夫でしょ。

僕はテーブルの上に置かれているメニューを手に取り、なにを食べようかと見ていると。

「……レノンさんの鈍感……」

「? なにか言った?」

「いいえ、なにも！」

ティアナちゃんはおねた様子でメニュー表を見始めた。

変なティアナちゃん。

*
*
*
*
*
*

お昼ご飯を食べ終えた後、僕たちじゃ総合スパー『ディエンダー』にやって来た。

三階は衣料品を取り扱っている、そこで僕たちは……。

「うーん、ティアナちゃん。やっぱり、そのジープンはちよつと駄目かな」

「で、でも、こっちのほうが動きやすいし……」

「でもね、女の子なんだからスカートも着なきゃ、ズボンは似合うけど、やっぱりティアナちゃんはスカートのほうが似合ってると思うよ？」

「そう……でしょうか？」

「うん、そうだよ。ほらほら、試着しにいきなよ」

膝元の長さしかないスカートを見ながら、ティアナちゃんは近くの試着室へと入った。

完全に入ったことを確認した僕はそっとその場を離れていった。

「レノンさん、着ました……ってあれ？」

着替え終わったティアナは試着室を出ると、近くにレノンの姿がなかった。

（どこに行っちゃったんだろ……）

靴を履き、ティアナはレノンを探しに行こうとしたとき、

頬にヒヤツとした冷たいものが触れた。

「ひゃあ！」

「あははははは」

触れられた方向へ振り向いて見ると、いたずらっ子のような笑みを浮かべているレノンの姿があった。

「も、もう！ レノンさん！」

「あはははは、ごめんごめん。 はい、どうぞ」

レノンは左手に持っているオレンジジュースをティアナに差し出す。

ティアナは「もうっ」と怒ったようにオレンジジュースを受け取り、プルタブを開けて、飲み始めると。

「うん、やっぱり」

「？」

「やっぱり、ティアナちゃん、似合ってる」

「っ！」

頬を赤めることも、言葉を詰めることもなく恥ずかしげもなく言う、この男。恐らく純粹に褒めたのだろうが、ティアナにとっては。

「~~~~っっっ！」

最大の殺し文句だ。

第35話（後書き）

最近、レノンを準主人公にしようと考えているこの頃……どうしよう。

第36話（前書き）

レノンとティアナのデートのお話は終わりです♪

次はどんな話しにしようかな……。

第36話

レノンside

楽しい時間はすぐに過ぎるもので、もう17時30分となっていた。

『ディエンダー』でティアナちゃんが履いたスカートを買ったあと、僕たちはとある市民公園にいる。

そこのベンチで僕たちは仲良く座ってアイスを食べていた。

僕はメロン味で、ティアナちゃんはストロベリー味。

お互いに違ったアイスを舐めながら、軽い雑談をしている。

「それじゃあ、勉強頑張っているんだ」

「はい、兄さんや義姉さんに教わりながら、コツコツと」

「そっか……」

ティアナちゃんはティーダさんの夢であった執務官を目指している。

ティーダさんはとある任務で大けがを負ってしまい、戦闘能力は大きく下がってしまったため、もう執務官を目指すのは無理だろうと言われてしまったんだ。

ティアナちゃんはそんなお兄さんの夢である執務官になろうと目指

しているんだ。

……最初、僕たちは反対したんだけど、ティアナちゃんの強い眼に僕たちは負けてしまったんだ。

「ふふ、でもティーダさんがティアナちゃんに勉強を教えているのか……あんなに反対してたのに」

「義姉さんの説得のおかげです。『あなたのために頑張っているのにそれを否定するなんて……最低です』って」

「……………きつい一言だね」

ティーダさんにとってはなによりきついと思うな……。

そんなこと、スバルたちに言われたら——うん、確実に泣いちゃうね、僕だったら。

「？ レノンさん？」

「っは！ な、なんでもないよ！？」

危ない危ない……想像しちゃったよ。

まあ、そんなことはすぐに忘れよう………あつ。

「ティアナちゃん、ストロベリーアイスちよつと食べさせてくれなかな？」

メロン味はもちろん美味しいんだけど、なんだか段々味に飽きてき

ちゃったんだよね。

だからちよつと口直したいんだよね。

「え？ いいですよ……あ、スプーンが」

「ううん、こうやって食べるからいいよ」

パクリとストロベリーアイスを少しだけ口に咥えて吸い付いて離す。

うん、結構おいしい……ってあれ？

「ティアナちゃん？」

「あつ、はう、えう」

「？ どうかしたの？」

変な発言ばっかするティアナちゃんに首を傾げながら、僕は聞いてみる。

それでもティアナちゃんは答えることなく、

「きゅう……………」

気絶してしまった。 ってええええええええええええ！？ なんでええええええ！？

「ティアナちゃん！ どうしたのおおおおおお！！？？」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ティアナが眼を覚ますと、まず眼に映ったのは見なれた自分の部屋の天井。

傍に置いてある時計が目に入ると、既に20時ちょうどであった。

「……あれ？」

ティアナは自分がなぜここに、自分の部屋で寝ているんだろうと疑問に思った。

今日は確かレノンと一緒にデート——レノン自身そう思っているか分からないが——していたはずなのに……。

ティアナが思考に没頭しているなか、ドアがガチャリと開いた。

「おっ、起きたか、ティアナ」

ドアを開けた隙間から覗き込んだのは兄であるティーダだった。

ティアナが目をさましていることを確認したティーダは部屋に入ってきた。

「兄さん……」

「レノンから聞いたぜ、お前気絶しちゃったんだって？」

「……………」

ティーダの言葉にティアナはあのときのことを思い出したのか、頬が赤く染まった。

「まあ、お前はまだ小6なんだからしょうがねえよ。お前にとっ
ちや結構な威力だったろしな」

「むう……」

ニヤリと笑いながら言うティーダに、膨れっ面になるティアナ。

「兄さんだって、オーリスさんにされたらそうなるもん」

「……うおう、痛いところを突くなあ、お前は」

「ふん、からかった罰だもの」

（否定出来ないのが、悔しいぜ……）

実際、自分もオーリスにそうやられてしまえば、ティアナと同じように気絶してしまうだろう。

そう思えるからこそ、否定出来ない。しかし、それを認めるのも男として悔しいのだ。

「まあ、この話は辞めるか。腹減っただろ？ 飯にしよう」

とりあえずはこの話を逸そうと、ティーダはティアナに夕飯を持ちかける。

そう言われたかどうかは分からないが、ティアナは今更ながらお腹

から空腹感を感じた。

ティアナは頷いてベットから降り、ティーダは既に廊下と部屋の境を跨いだのではないかという処で、顔だけを振り向き、

「下でオーリスと一緒にデートの話聞かせてもらうぜ♪」

「っ！？ 兄さん！？」

「ははっ、じゃあな」

ティーダが完全に部屋から出たあと、ティアナはすぐさまニヤリと悪どい笑みを浮かべる。

「ふふん、兄さんがそうするなら、私だって……」

存分に聞いてやろうではないかと思った。

兄であるティーダがどうやってオーリスに告白したのかを。

妹である自分にすら教えてくれないほど恥ずかしいことをしたのだろう、自分もデートの話をするのだ、それくらい――ティーダ本人にとっては違うが――のことを教えてくれたっていいだろう。

ティアナはにやつきながらドアノブに手を掛けた。

第36話（後書き）

レノンに嫉妬という怒りを感じる人よ……もつと感じていいっすよ♪

ティアナはしっかりしてるから小学6年生から兄さんって言えそう
……。

第37話（前書き）

自分はリリカルなのは見たことないです、なのでデバイスによる
戦闘の仕方など皆無に等しいです。

それでも良ければ、どうぞV

第37話

女性は手に持っている片手剣型のデバイスを振るい、襲い掛かってきた魔力の弾丸を全て払い落とす。

さらに襲い掛かってくる魔力弾は地面を蹴り、跳躍して、全てを避けた。

地面に着地した女性はすぐさま目の前にいる、魔力の弾丸を全てが避け切られたことに動揺を隠せない女性魔導師に突っ込んでいく。

魔導師は「チェーンバインド!」と言って、4本の白い鎖のようなものを現せ、それを彼女に向かって奔らせる!

女性は一度立ち止まり、すぐさま剣の刃に手をかける。

剣の刃を折りたたみ、逆に折りたたんであった柄の部分を組み立てると、それは銃へと変形した。

「ブラスト」

《エリアブラスト》

デバイスから女性の機械音声が響くと、銃口から五発の魔力の弾丸が発射される。

魔力の弾丸は白い鎖の全てを破壊し、もう一発は魔導師のデバイスを吹き飛ばした。

このレポートを書き終えるには一時間ちょいといったところだろう。
アモダは自分の部下たちにそのメールを流すと、再びレポートに手を掛けた。

「しかし、こいつの戦闘能力すげえな……こりゃ欲しがるわけだ」
ライトニングの戦いっぷりを見ながら、アモダはそうポツリと呟く。
魔力弾は身体能力で避け、誘導弾はデバイスで切り落とすか、バリ
アジャケットで払い落とすという荒技。

彼女は陸上警備隊に所属していたが、アースラの艦長である『リン
ディ・ハラオウン』がスカウトしたのだ。

リンディが「お試し期間として、アースラに入って、三ヶ月間、ア
モダ隊長の武装隊に所属してもらえないかしら？　もしも三ヶ月間
の働きが良かったら、海に所属できるように進言するわ」と言った
らしい。

ライトニングは魔力値がAランクだったため、『海』に入れるかど
うか微妙であったのだ。

しかし、近距離戦闘能力がA Aランク及びに中距離戦闘能力がAラ
ンクなのだ。

彼女が欲しいと思った、リンディは『海に入れるかもしれない』と
いうのを餌に、彼女に交渉した。

それに了承したライトニングはこのアースラに乗り込み、自分の隊

に入っただのだ。

(……だけど、あいつは海に入るなんて考えていないけどな)

ライトニングが所属した一目、自分を始めとする同期の連中が「お前はなんでアースラ(ここ)に来たんだ? 海に所属するためか?」とライトニングに聞いたたら、

「私は別に『海』に所属する気はない。ただ「金」を稼ぐためにやるだけだ」

それを聞いたとき、自分を含めた同期の連中は大笑いした。

「すごい根性^{タマ}を持っているな、お前」と……。

話がずれてきたので、それはおいといて閑話休題。

自分は長くこの武装隊をやっているが、ミッドチルダ出身の人間で出来る人間など見たことがない。

(ああ、いや……ミッドチルダ出身じゃなくてもいるっちゃはいるか)

一度、自分は彼と戦ったことがある。

彼の剣の腕、運動神経は『化物』クラスだったが、あの時は本当に心のなかが燃え上がった、そしてなにより楽しかった。

「おっと、ライトニングのことは、あのバトルマニアには言わねえようにもメールしておくか……死なせたくなえし」

……アモダの言う『バトルマニア』というのは後に語ろう。

*
*
*
*
*
*

ライトニング
(エクレール)
side

私はスポーツ飲料を口に含んで、思いつきため息をついた。

なんで、私はアースラ（ここ）にいるんだ？

いや、その理由は一番分かっているのは私自身だ。

そう、主に金目的のために、アースラにいる。

海の平和なんて知ったことではない。

「……父さん、母さん」

亡くなった、私たちの両親。

アインハルトが生まれて一年後に両親は居眠り運転によって死んでしまった。

セラはアルスさんたちに引き取られたが、私は陸上警備隊に所属した。

普通の仕事よりも管理局のほうが良い給料がもらえるし、なにより

セラたちの生活を守りたかったからだ。

「のはずなのに……」

リンディ提督の「給料三ヶ月分」に乘せられてしまったことに私は後悔している。

陸上警備隊のその二倍くらいある給料に惹かれた私……愚かなことをしたと思っている。

陸上警備隊だったら、時々だが、セラたちに会えて、そして頑張れという声援をもらえるので、まだ良かったのだ。

でもここは戦艦だ、そう簡単に会いにいけない……。

「会いたいな……」

セラたちに言って貰いたい。

「頑張れ」と……。

第37話（後書き）

ライトニングもといエクレールさんは軽いホームシックになりかけています。

修学旅行に行って、一人になると、そうなりませんか？

自分はそうなります。

第38話（前書き）

今回もリンクの出番はありません。

第38話

黒いスーツを全身に纏い、青と銀の甲冑が胸部と手脚を鎧って、カブトムシのような仮面が頭部を覆っている戦士が住宅街を歩いていた。

戦士は注意深く辺りを見渡し、真新しい二つの住宅の間に古さが目立っている住宅を通ると――

「っ！」

突然、戦士は前方に慌てて転がった。

すると、その数秒後には戦士の立っていた場所が魔力の砲弾がぶつかり、深い穴が広がった。

戦士は鉄甲に付いてあるENTERキーを押すと、タッチパネルが出現した。

タッチパネルには銃のパネル、剣のパネル、砲撃のパネル、鎖と輪のパネル、四つが現れた。

戦士は銃と砲撃のパネルを押し、ベルトに装着している携帯型端末を外した、その携帯型端末をまるで銃のようなものに変形させると、魔力の砲弾が飛んできた方向――古さが目立っている住宅――に向け、

「シュート！」

携帯型端末の銃口から砲撃を、古さが目立っている住宅の窓際に放った……が。

「あ……」

その窓際の壁をも破壊しまった……しかも半分も。

仮面の中の男性は『やってしまった』といわんばかりの表情を浮かべていると……。

『相変わらず、砲撃魔法が下手ね、あなたは』

からかい気味に通信してきた柔らかい声に、男性は舌打ちをし一言。

「……うるさい」

『住宅を傷つけたのでー2ポイントよ』

「ぐ……了解」

通信を閉じると、すぐさま携帯型端末を元に戻し、ベルトに装填しようとしたとき、

「はっ!」 「つうおりゃ!」

「うああ!?!」

前方から現れた剣型デバイスと槍型デバイスに魔力の弾丸が甲冑に襲った。

それらを喰らった戦士は仰け反りながらも、後方にバックステップで下がり、すぐさまタッチパネルを現せ、剣のタッチパネルを押した。

ベルトの右腰に差していた鍔の無い剣の柄を取り、携帯型端末を真横に挿すと、携帯型端末から片刃の刃が飛び出た。

戦士は剣を軽く振って、それを正眼に構える。

「やっぱり、俺は剣のほうが向いてるな……ぜえりゃああ!!」

戦士は全身に甲冑を身に纏っているにも関わらず、二メートル前にいる魔導師たちに高速で接近し、魔導師三人がデバイスを構える前に、剣を一閃させた。

魔導師三人は膝から崩れ落ちて気絶した。

『模擬戦と『アーブトギアシステム』の試運転はこれにて終了。みんな、ご苦労さま』

言葉が住宅街に響くと同時に、住宅街は消え去っていき、全ての住宅街が消えると、あとに残ったのは真っ白い部屋の訓練スペースとなった。

「うゝ、いてえ……」

「つつ、手加減してくださいよ」

「ぐっ、がが、ぐゝ……」

「お、おい。 砲撃喰らったやつ……死んでねえか？」

「いや生きているでしょ？ さすがに……」

訓練スペースには戦士と戦った、『陸』^{おか}の魔導師たち。

見ての通りさっきまで行ったのは、先程の言葉通り、模擬戦……そしてアーブトギアシステムと云われる試運転であった。

そして、そのアーブトギアシステムを身につけた戦士は荒々しくベルトを外すと、甲冑は消え、一人の男が立っていた。

『おつかれさま、アルスちゃん♪』

「そこで待っているよ、バロウウウウウ！！」

男——アルスはそう叫ぶと、すぐさまスペースを飛び出していった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

アルス side

「バロオオオオオオオオウ！！」

「あらあ、アルスちゃん、ご苦労さま♪」

俺はすぐさま訓練スペースを覗けるとある部屋へと駆け込みながら叫んだ。

落ち着けと自分自身に言うが、落ち着けねない！

「もう♪ そんなに怒らないでよ、ちょっとしたお茶目じゃない♪
それにいつものクールが無くなっているわよ♪」

「なにがお茶目だ！ 俺は朝からひどい目にあっただぞ！」

肩まで伸びた金髪の上にはカチューシャ、シワなどまったくない肌の童顔。 はたから見れば立派な女性だが、こいつはれっきとした男——バロウ・クルウス一尉だ。

俺と同じ教導官資格を持っており、そしてデバイスマスターと云われるほどの天才の男いや、オカマであり、俺の親友というか悪友というべき男で俺よりも一段上の上司。

顔はイケメン顔だが、オカマ語を使うため、あんまり寄りつかない……ってそんなことはどうでもいい！！

「貴様、メガーヌになに送った！？」

「なにつて……あなたが今まで抱いた女の数♪」

「ぬあがあああああ！！」

なに平然とこいつはメガーヌに嘘の報告をしているんだ、通りで朝からメガーヌが黒いオーラを纏っていたわけだ！！

勇気を振り出して、デートに誘ったのに、

「あら？ 私じゃなくて、昔抱いた私よりもいい女とデートしてくれば？ きっと楽しいデートになるはずよ？」

と断れたんだぞ！

この野郎……俺がこの〈エアートギアシシステムV1〉の試運転を断ったからって、こんな嫌がらせをして……！

俺の家庭を崩壊させるつもりなのか！

「まあ……その……元氣だせ」

俺の肩をポンと優しく、そして申し訳なさそうに目を伏せているレジアスさ——不本意であったが、今は仕事であるから——中将であつた……って！

「いたのですか!？」

「戦闘が始まってからほぼ最初からな。……すまない、バロウを止められず」

「……………いや別に構いませんけど」

中将は必死に止めてくれてたんだ、この人を責めるわけにはいいかない。

……と怒りを抑えながら、ベルトを投げ渡した。

「とりあえず、〈エアートギアシシステム〉は問題なかった。寧ろ、問題は見つからなかった」

「ええ、ご苦労さまでした。アルス二尉、引き続き休暇をお楽し

みてください」

……有給を取った俺を脅迫し、仕事をさせた奴が言う台詞ではないぞ。

「バロウ一尉、ついに成功したな。 ヘアーブトギアシステムV1
✓が」

「ええ。 これならこの地上にいる魔力値が低い魔導師たちに装着
できます」

「うむ、これはまだ一つしか作ってはおらんのか？」

「いえ、二十本ほど製作できています。 そのうちの一本はアルス
二尉、もう一本はゼスト隊長に渡そうかと……彼の魔力値は変わっ
ておりませんか？」

「うむ、魔導師ランクはS+だが、魔力値は低いままだ……恐らく。
ほか十八本は？」

「ほか十八本はまだ検討中です。 他にアルス二尉やゼスト隊長と
同じとはいかずとも、それほどの実力者がいればよろしいのですが
……」

レジাস中将与バロウの対談が始まり、俺はヘアーブトギアシステ
ム✓がようやく出来たことに感動する。

ヘアーブトギアシステムV1✓……二年半前にバロウが提案したア
ームデバイス。

携帯型端末をベルトに装填することによってアーマーを展開させるデバイス。

これは魔力値が低い魔導師だけ（・・）装着できるデバイスであり、先程の試運転は魔力値がC＋である俺に本当に装着できるのかだ。模擬戦に関しては俺が訓練スペースに入った直後に聞いたが。

携帯型端末には展開させるための暗号を掛けられており、違法魔導師たちに手に渡っても展開出来ないようにさせてある。

暗号は後に手渡す後輩たちに決めてもらおうとしている。

そして、リンカーコア所持者でなくても運用できる、魔力素質を必要としないといわれる「ハートギアシステムV2」も制作中だ。

V1とV2の二つを作るには訳がある……まず一つ目は同じようなアーマーばかりでは混乱する、そして二つ目魔力値がある者とならない者のアーマー耐久度について、これから調べなきゃいけないからだ。さてさて……「ハートギアシステム」を装着させる予定の連中に訓練させないといけないな、アーマーを装着するとやはり身体が重い……、どのように訓練させようか？

ふむ、まだ装着させずに、重りを付けたジャージを身に纏わせるか？

「ハートギアシステムV2」のためのプロトタイプのようなものですけど、地上の平和を守るためにどうか使ってください。レシアス中将」

「ハートギアシステムV1」の製作、ご苦労だった、バロウ一

尉。引き続きヘアーブトギアシステムV2も頼む。しかし、無理をせずに、有給を取り、体を休めろ」

おっと、考えている間に、レジアス中将与バロウの対談が終わったようだ。

さて、試運転は終わったことだし、俺は帰るか……って！

「どうすればいいんだ、俺!？」

「あら、どうかしたの？」

「貴様……!」

いけシャアシャア、そんなことを言えるなこの野郎!

いや、こいつと口論している場合じゃない! とりあえず、誤解を解くためにさっさと家に帰らなければ!

俺はレジアス中將に敬礼し、部屋から出ていった。

我が家に着き、俺はすぐさまメガーヌがいるであろう部屋に行くと、

「……ふうん、それ本当なのかしら？」

真っ黒いオーラを発し、笑顔なのだが目が笑っていないという表情を浮かべ、ベットのの上に座っているメガーヌに俺は震えそうになりながらもなんとか耐えながら頷いた。

「ああ、全部バロウの嘘っぱちだ。　というより、信じるな、あいつを」

「ふん、どうかしら」

そう言って、メガーヌはプイッと俺から顔を反らした。

「メガーヌ……俺をそんなに信用出来ないのか？」

「……………」

「仕方がないな……………っと！」

「きゃっ……………！」

俺はメガーヌに一気に近づき、そのままベットに押し倒した。

背中越しから、メガーヌのうなじをツツと舌で舐める。

ここはメガーヌの弱いところなのだ。

「っうんっ!!」

「それならば、信用されるまで……………しようか？」

「っあ!　べ、別に……………やあん!？」

「ん?　いやか?　だったら止めようか、仕方ない」

「え？」

そう言って、俺はメガースから離れて、ベットから降りる。

「仕方がないな。　メガースが嫌がっているんだから、今日はもうやめるか」

「……………」

「残念だな、俺はメガースとやりたかったんだがな。　しょうがない、朝お前が言っていた通り、昔の女とデートしてくるか」

「っ！」

ベットから立ち上がろうとしたとき、腹の周りに腕が巻き付かれた。

「……………ないで」

「ん？」

「意地悪しないで……………お願いだからあ、行かないでえ」

……………。

いかん、これは少し虐めすぎたかもしれんな。

メガースが涙声になってしまっている、やりすぎたな。

そっと腰にまきついていいるメガースの腕を放し、俺はゆっくりと後ろに振り向くと。

「……………っっ」

上目遣いでしかも涙目で許しを請うかのように潤んで見つめてくるので、パリンと頭のなかで何かが砕かれたような気がする。

「っ！」

「んむっ！？ んんうゝ」

メガーヌの唇を奪うと、すぐさま彼女の口内に舌を進入させた。

俺たちは唾液を交換し合い、唇と唇を吸い付き合う。

「…………っ、もう我慢できんぞ？ いいな？」

「…………はあ。 ええ、もう滅茶苦茶にして」

ここから先は俺たち夫婦の営みだ、もうこれにて君たちにもう見せることは何もない。

第38話（後書き）

はい、ここからは夫婦の営みなので邪魔しちゃ飽きませんよ。

それとヘアブトギアシステム∨での戦士のイメージはカブトのマスクドフォームそしてG3-Xが融合としたイメージであり、これに関しては個人が勝手に考えたものであり、苦情に関しては一切受け入れません。

第39話（前書き）

50万PV達成！

読んでくれているみなさん、本当にありがとうございます！！

近々、記念短編小説を書きたいと思っていますので、よろしく願
いいたします！

第39話

リンク side

……暇だ。

リビングにあるソファで寝転がりながら、そう思った。

アルスさんはメガーヌさんとデート——後に聞いた話、家の中でニヤンニヤンしてたらしい——してるし、母さんと父さんもデートしちゃってるし、ゲンヤさんファミリーは果物狩りに食べ放題バイキングに行ってるし。

今家にいるのは俺とアインハルト、セラとルーテシアの四人だ。

ルーテシアは今日デートに行っているアルスさんたちに預かってほしいと言われたからだ。

今頃三人は俺の部屋でゲームでもしているんだろう——今日はなぜか外に出ようと気がまったくでないから、家にいようとみんなで決めた。

「暇だなあ……」

今日はもうトレーニングをする気力もないし、このまま寝ちゃおうかな……。

ウトウトとしてきたので、瞼をそっと閉じると。

「それだったら、遊べー！」 「遊ぶですー♪」

「ぐべえら！」

腹部に強い衝撃が奔った!!

しかも、ちょうどいい場所に入ったので、悶絶してもおかしくないくらい……っ。

俺は痛みに耐えながら瞼を持ち上げると、俺の腹部に座っているのは意地悪い笑みを浮かべた二人の姿があった。

「っこの……なにしゃがる、アインハルトにルーテシア」

「ふーんだ。 わたしたちをむしして、ねているおにいちちゃんにばつだもん」

「ばつです、ばつです！」

「ああ、そう……」

反論する気力もない俺は二人をゆっくりと降ろして、俺もソファーからゆっくりと立ち上がる。

まったく、さっきまでのウトウト感がなくなっちゃまったじゃねえか。

「それでどんな遊びするんだ？ 言っとくがゲームはいやだぞ、以前お前らは俺に負けたからって泣いたからな」^ま

今から三ヶ月ぐらい前に、俺は二人と一緒にゲームをしたんだが、この二人俺に負けたことが悔しかったから思いっきり泣いた。

そして、その原因とみなされた俺は母さんとセラにしっぽり怒られてしまったというわけだ。

あの悲劇はもうごめんだ……。

『……………』

二人は俺の言葉に黙り、すぐさま顔を寄せ合い、コシヨコシヨと話し合い始めた。

……おいおい、ゲームのほかは何も考えていなかったのかよ。

「……思いつくまで、俺は横になってるぞ」

『だめー！ー！ー！』

寝転がろうと、再びソファーに座り込んだが、二人はすぐさま俺の腕をつかみ寝転がせないように引っ張り始めた——なにくそ、負けるもんか！

俺は寝転がろうと二人から腕を引き剥がそうと力をこめるが、ちびっ子パワーと言うものはすごいものでなかなか外れない……。

腕を引っ張る二人と、寝転がろうとする俺との対決にいつになったら終わるんだろうと考え始めると――。

「はい、そこまで」

後ろからちよつとだけ強く押された俺は二人に引っ張られたこともあり、ソファーから離れた。

振り向くと、そこにはいたずらっぽく微笑んでいるセラの姿があった。

「リンク、二人ともやつぱりリンクと一緒にゲームしたいんだって。私はほらゲーム弱いから」

後半の部分、哀愁漂わせるように寂しそうに言わないでくれよ。

まあ、セラはゲーム苦手だからしょうがないけどな……。

「……はあ、二人とも」

『……』

「俺に負けても泣かないって言う約束をしてくれるなら、俺はお前らとゲームをしてやるぞ？　約束するか？」

「！！　するする！！　ぜーえたいなかない！」

「泣かないです！」

二人は手を上げて、そう言った。

「よし、それじゃあ部屋に戻ってな。　すぐに行くから」

『はーい!!』

二人はどたばたと足音を立てながら、リビングから出て行った。

「さてと、小さな姫さんたちの相手をしに行くか」

「え？　私も？」

「当たり前だろ」

不安そうに聞いてくるセラに問答無用でばっさりと言う俺だが、

「大丈夫だって、やり方は俺が教えてやっから。　へたくそなりのやり方をな♪」

「なっ、リンク!!」

「おお、怖い怖い♪」

「もー！　絶対にリンクを倒してやるんだから！」

セラはプリプリと怒りながら、リビングから出て行った。

いやー、あんなにムキになるところが面白いっていうか、かわいいっていうか。

――マスター、セラちゃんをからかってしまっではいけませんよ？

「やれやれ、まあ別にいいけどな」

これがレノンとかサイファーなどの男供だったら遠慮なく蹴っていたものだが、今寝転がっているのは女の子。

しかも二人は幼い子でもう一人は幼馴染、そしてその三人は愛くるしく可愛い寝顔で眠っているのだから起こす気もない。

「さてと、俺は部屋を片付けますか」

部屋のフローリングは食べかすやお菓子の袋によって少しだけ足の踏み場がなく汚れてしまっている。

さすがにこれは見逃すことはできないな……。

——マスター、がんばってくださいね——

「ありがとうございます、がんばるよ」

エクセリアスの応援に苦笑しながら答え、俺は散らばっているお菓子の袋をまず一枚拾い上げた。

第40話（前書き）

今回はシリアスあり、そして甘めもあり……………かな？

第40話

半身を隠しながら少女は悲しくそして寂しげに見つめていた。

目の先にいるのは一人の若者と白いドレスの女性が仲睦ましく互いに微笑みあいながら手をつないでいた。

少女はあふれ出てきそうな涙を抑えようと両手で目元を押さえたのだが、それでもあふれ出る涙を抑えることができずに頬を濡らした。

少女はすぐさま自室に戻り、高級感溢れるキングサイズのベットに横たわり――慟哭した。

セラはゆつくりと目を開き、まず視界に映ったのは暗闇に包まれ滲んだ天井だった。

——滲んでいる？

「なんでだろ？」

目元を手の甲で拭くと、滲んでいた原因が分かった——涙だ。

どうやらこの涙のせいで滲んで見えてしまったのだろう……。しかし、

「どうして、涙なんて流れちゃったんだろ」

自身がなぜ涙を流していたのか覚えていない……夢見が悪かったの
だろうとセラはそう決め付けるが。

「どうして……こんなに胸が痛いのか？」

どうして？ なぜ？ いくら考えても考えても答えが見えなかった。

セラは頭を手でそっと添えながら、自分がどうしてこんなに胸が痛
いのか涙を流してしまったのかを考えようとしたとき、

「おーい、もう飯の時間だぞー」

パチンとスイッチ音を立てると同時に、この部屋の電気が点いた。

セラは声のした方向を振り向くと、そこにはTシャツに長ズボンと
いったラフの格好のリンクの姿が立っていた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

リンク side

電気をぱちんとつけると、そこには目覚めたセラがベットに身体を
預けている姿があった。

でも目は開いているから、起きているな。

「おー、ようやく起きたか………って大丈夫か？」

部屋に入って早々俺はセラに思わずそう言葉を投げつけた。

横目でしか分らないが、若干セラの目が赤くなっている……どうしたんだろ。

「え？　だ、大丈夫、だよ」

セラは上半身を上げ笑顔でそう言ったが、そのセラの笑顔に陰りがあるのが分かる。

長年一緒にいるから分かるその笑顔、そして——冬馬（俺）がリンク（俺）になるまえの、笑顔にそっくりだったから。

「なにが『大丈夫』だ。　涙が目じりについてるぞ」

「ええ！？　さっき取ったのに！？」

ということはやっぱり涙がついてたのか……簡単に引っかかってくれてありがとうと言っているのか？

ああ、それはどうでもいいか——それよりもセラだ。

俺はセラに近づき、ワシヤワシヤと乱暴に頭を撫でて、さらに頭を小さく回す——軽い力をこめて。

「あう、うにゃ、やああ、や、やめてえ〜」

「うるせえ」

悲鳴混じりにそう言うセラに俺は軽く無視し、さらにさらに回して、ポイとベツトに放り投げ。

「ううゝ、気持ち悪いゝ」

「まったく、お前は」

こいつは何もか溜め込んでしまうタイプだ――冬馬（俺）もそうだった、家族には嫌なことを言わず溜め込んで、ついには暴走した……その結果、家族に酷い傷跡を残してしまったんだ。そして、溜め込みすぎると……心が壊れちまう。文字通りの意味で。

「あんまりさ、一人で考えすぎんな。お前には俺やアインハルトにおまけのレノンがいるんだからさ」

セラにとって最高の相談相手であり心の拠りどころであるリュージュさんやノエルさんはもういない。

二人が眠っている墓の前で泣いているセラの姿を見て、俺は決めたんだ――セラの心の拠りどころになってやるって。

「リンク……」

「だからさ、話せ――多分いやな夢でも見たんだろ？　言ってみろ、解決してやつから」

「……分からないの」

セラはポツポツとしゃべりだす。

「覚えていないけど、なんだかとても胸が痛かったの、悲しかったの」

「どうしてかは分からないんだけど……ただこれだけは言えるの」

「大事なものを取られた——目を覚ましたらそんな気持ちになつてたの」

——なんて言えはいんだろう。

まず思ったのはそれだった。

冬馬のときは言う立場だった、でもときたまに受ける立場になる。

でもこれはさすがに、なんて言えいいのか分からない——こういう相談は冬馬のときにはなかった、なにせ受ける立場は片手で数えるくらいしかなかったから——だから。

俺はそつとセラを抱きしめた。

「リンク……？」

「……なんていえばいいのか分からないからさ、これで勘弁してくれ」

さすがに恥ずかしいと思ったけど、これしか思いつかなかった。

こんなんでセラの抱えている気持ちをなくすことができるかなんてわからない……でも今の俺にはこれしかできない。

「……ううん、これで十分だよ」

「セラ」

「ありがとう……」

そう言って、セラは嬉しそうに俺の胸に擦りつく……。

そんなセラの頭を俺はそっと撫でようとしたとき。

「リンカー、セラちゃん、ごは……」

部屋に響く母さんの声。

俺たちはそつと後ろを見ると、そこには遅い俺たちを呼びに来ただろう母さんの姿があった。

『……………』

「な、な、な、な」

第41話（前書き）

今回はリンクくんがめっさ男らしいですV

第41話

リンク side

現在、俺はセラとルーテシアの二人を家に送るために外に出て歩いている。

ルーテシアは夕飯を食べ終えた後、アインハルトと遊んで、すぐに熟睡——今は俺の背中ですやすやおねんだ。

真夜中によつて、外は暗闇に包まれども電光灯のおかげで明るく難なく歩ける——歩けると言つたら歩けるんだが。

「……痛い」

「あ、あはははは」

歩けば歩くほど身体が揺れ、その度に右頬がずきずき痛む……頬にはシップを張っているというのに。 いや冗談抜きで。

なぜ痛むのかというと、それはかれこれ一時間半前にさかのぼる。

一時間半前。

俺とセラが抱き合っている姿を見て母さんは。

「なにをしてるの——！！！」

そう叫び終えた後、母さんは俺たちのもとへ小走りで翔けて、俺とセラを引き離せて――。

「じっの……バカー……！！！」

母さんは腰を深く沈め、右腕を大きく振りかぶって――ズガァッと俺の頬に思いつきり殴った。

[illegible]

「セラちゃん、大丈夫！？
肉欲獣リンクはもう倒したから！！」

「ち、ちがいます。勘違いしないで――――！！」

覚えているのは……そうだな、この会話と空中で回転したのが五回か六回ということだな……。

「……あのときのリンク、まるで格闘ゲームのキャラクターのようにクルクル回ってたよ」

「……ああ、五回か六回は廻まわってたもんな。そう見えるのも無理ないな」

いやー、まさか現実で——しかも殴られて空中回転なんて人生初だな。

貴重な体験をしたと言えどしたのだが、さすがにもう一度体験した

いなんて死んでも思わないけど……。

「まっ、そんなことは忘れて。 さっさと行くぞ」

「そうだね……あんまり思い出したくないし」

この話を打ち切って、早くセラたちを送ろうと足を速めようとしたとき――。

「ちよいと、そこのお二人さん」

丁度通り過ぎようとした路地裏から呼び止められ、俺たち二人は振り向く。

そこには、一人の女性が椅子に座っており、その女性の前にはテーブルがあり、そのテーブルに紫色のシーツを被せて中央には水晶玉を置いてあった――占^{うらな}い屋か。

「ふふっ、占いしていかない？ 今ならタダでするわよ」

「ああ、いいや。 あんまり興味湧かないし」

「もう、せっかくタダにしてくれるんだからやろうよ」

バツサリと切り捨てる俺にペチンと頭を軽く叩くセラ。

……叩く必要はないのだと思うんだが、まあセラだから許そう――

他の親しい女じゃなきゃ反論するが。

「それじゃあ、お願いします」

「はい。 それじゃあピンク色の髪のお嬢さんから――」

女性は水晶玉に手を伸ばし、触れるか触れないかの位置で止まると、そっと目を閉ざす。

……それから数分経つと、女性はゆっくりと目を開くと。

「お嬢さん、 あなたはいつかとんでもない事を仕出かすわ……」

「ええ!?!」

「だからこそ、 常日頃から気をつけなさい……特に無色に」

「無色にどう気をつければいいの!?! 　　というか、 色に気をつけなきゃいけないの!?! 　　ていうかどうやって気をつけるの!?!」

「……占いはそこまで出ていないわ」

「ええ――!?!」

セラよ……お前最近さ、 レノンに似てきたよな――特に突っ込み部分。

「さてさて、 次はあなたよ。 　　かっこいいお兄さん」

「ああ、 だから俺は……」

「はいはい、あなたの意見は却下。やるわよー」

聞けよ、人の話。

女性は再び水晶に向き、手を伸ばすと……。

「!?!」

「? おい?」

女性は驚愕の表情を浮かべて、すぐさま水晶から手を離し、真剣な目で俺たちを見つめる。

「お兄さん……男に、赤と黒の男に気をつけなさい。それさえ気をつければ、あなたは無事にすごせるわよ——いえ、もっと簡単なのはそこのお嬢さんと会わないほうがいいわ。それがあなたのためになるし、本当に無事に過ごせる——でもその代わりお嬢さんはどうなるか分からないけど」

「!?!?」 「……………ふん」

女性の言葉にセラは驚き……だけど悲しみを含んだ表情を浮かべる。
対して俺は鼻で笑ってやった。

「やっぱり、占いなんてしてもらうんじゃないかな。おい、セラ行くぞ」

「え……あ……うん」

俺はセラの手をつかみ、早くこの場を去りたい一心で早足で歩を進めるが。

「待ちなさい!!」

去ろうとする俺たちに女性は声をかけるが無視して歩を進める。

「それがあなたのためになるわ! 彼女は確かにどうなるかは分からない、でもあなたは無事に――」

「ふざけるな」

「っ!」

紡がれる女性の言葉を俺は声は低く怒りを込めて止めた――セラがどうなるかわからない? 俺だけが無事になる?

冗談じゃねえ!

「だったら、余計に俺はセラと一緒にいるさ。俺はセラを護る、こいつがどうなるか分からない目に合うんだったら、余計に一緒にいたほうがいいぜ」

だから、占い屋の女性の言葉なんて全部無視だ。

俺はセラの手を引っ張り、その場を去った。

あれから五分が経ち、今では二人いや熟睡しているルーテシアを入れて三人は

アルスとメガーヌの家路を歩き、近道といわんばかりに、リンクはセラの手を繋いで公園内を進んでいた。

「……………」

占い屋から離れた後でも、セラは何も言葉を発することなかった——ただ占い屋から言われた言葉が頭の中で回っている。

『お兄さん……男に、赤と黒の男に気をつけなさい。それさえ気をつければ、あなたは無事にすごせるわよ——いえ、もっと簡単なのはそこのお嬢さんと会わないほうがいいわ。それがあなたのためになるし、本当に無事に過ごせる——でもその代わりお嬢さんはどうなるか分からないけど』

リンクとは離れたくない、だが自分と関わればリンクはどうなるか分からない。

しかし、リンクと離れば、自分がどうなるか分からない——いやそれはどうでもいいことだ。

自分さえ離れば————。

「気にすんなよ」

「……」

「さっきの占い屋のことなんて気にすんな。 とっとと忘れろ」

「でも……」

「でももへちマもあるか。 あんなくだらない占いを本気で信じんな」

「でも……!」

「うるせえ……!」

リンクは繋いだ手を離し、セラの頭に拳骨を落とした。

ゴツツといい音を立ててた——そしてそれなりに痛かったのだろう、セラは涙目になっていた。

「つつつ……」

「あの占い屋の意見も、お前の意見も全部却下だ! あの下らない占いが不安なら俺が全部吹き飛ばしてやる!

お前に、今居ない占い屋にも言ってやる!

俺はなんともならねえ! もちろんお前もだ! どうなるかわからない目にセラが合うんだったら、俺がお前を護る!」

俺はセラの手を離し、セラに指差す。

「お前に拒否権はない！　そんでもって、答えは聞いてない！」

「……」

「以上！　じゃ、帰るぞ」

リンクはそう言って、セラに背を向け、歩きだす。

「リンク」

「ん？」

「……ちゃんと護ってね、私を」

「へっ、当たり前だ。　お前こそ、俺から離れんなよ」

「は～い」

第42話〈遊園地編?〉

リンク side

「きゃあああああああああああ!!!」

「うわあああああああああああ!!!」

「「きゃあああああああああああああああああ!」」

恐怖の悲鳴を上げているのはセラとレノン、そして感激の悲鳴を上げるのはスバルにギンガだ。

今俺たちがいる場所はミッド有数の遊園地であり、四人は現在ジェットコースターに楽しんで乗っている。

本来ならアインハルトもここにいるはずだったが、風邪のため欠席。中止にしようと考えた矢先、あの子は笑顔で「行ってらっしゃい」と行ってくれたのだ、自分のことを省みず。

だから、俺たちはあのこの分まで楽しもうとここにいます。

……まあ、レノンとセラは楽しんでいる場合ではなさそうだな。

乗る前セラは涙目になっていたうえにレノンなんか顔が真っ青になっていたんだから。

苦笑しながら上を見上げると四人が乗っているコースターが出口に向かってゆっくりと向かっているのが見え、俺は買っておいた四本

のペットボトルを手を持つ。

階段から降りてくる興奮が収まらない二人、そして恐怖で身体を震えている二人の下に俺は歩む。

「よお、楽しかったか？」

「うんとっても！ すっっごい勢いだったよ、リンク兄！！」

「すっっごいスピードでした！」

スバルとギンガは元気良くそして叫ぶかのように俺に言う――すごく興奮してるな、鼻息荒いし、瞳がめっちゃキラキラしているし。

んで、そんな二人とは対照的に……、

「うう……」 「……つく、うう」

おおー、真っ青な顔になっているうえに、すでに二人は涙目になっているよ……。

まあ、気持ちは分かるな。 サイクロンは二回、ループが三回、コークスクリューにマウスは一回ずつ――トラウマになりそうなもん結構入ってたし。

「大丈夫か？ ほら、紅茶買っておいたぞ」

「「あ、ありがとう……」」

二人はフラフラとしながら紅茶を受け取る――ダメージでかいな、

こりゃ。

「もー！ セラ姉もレノン兄も情けないなー！ あたしやギン姉を見習いなよ！」

「いや、あれを平然としているのはおかしいんだぞ、普通」

スバルに思わず突っ込んでしまう俺……だってそうだろ？

サイクロンやループ、コークスクリューにマウスを平然と楽しむのはきつって……。

俺の言葉にスバルは大して気にせず「あははは」と軽く笑うが、

「お、おかしいですか？」

ギンガはスバルのように軽く笑わず、ショックを受けたのかプルプルと小鹿のように震えながら俺を見る。

「あ、いや」

「へ、平然としてるのって、お、おかしいですか？」

参ったな……どうしようか。

頭の中でギンガを落ち着かせることが出来る言葉を考え始めると――

「だったら兄さんやセラさんのようになるまで、乗ってきます！ だからさきに行ってきたください！」

「ちょ、ちょいまってー！ー！！」

再び乗りに行こうとしたギンガの手を掴んだ、なにアホなことをしようとしているんだこの子は！？

「はーなーしーてーくーだーさーいー！！」

「誰が離すか……てうおお！？」

お、俺のほうが力が強くそして体格が大きいというのに、ギンガはそんなこと気にすることなく一歩ずつ歩み始めた。

くっ、なんつう馬鹿力……！！

「あはは、頑張れー、リン兄ー」

「くっ、この……」

……他人事と思って言いやがって！

強制的にお前も手伝わせてやる！

「スバルう！ もしも手伝わてくれたら、トリプルアイスを買ってやる！ ……レノンが！」

「ちょお！？」

「ほんと！？ やったあ♪ それじゃあ手伝う！」

このあと、スバルの協力を得て、なんとかギンガを阻止することが

できた……レノンのお金を犠牲に。

すまん、レノン。

さてさて次に向かったのはコーヒークップ。

コーヒーカップに乗っているのは、俺たち全員——五人一緒だ。

「きやあああー！ー！ー！ー！ー！」

「ううわあ————！！」

「うおーーーーーー」

「きゃあああああああああああああああ♪」

現在俺がコーヒークップを最高レベルの回転させている。

うん、すっごい面白い！

「リンク兄、もっともっとう♪」

「リンクさん、もっとまわしてくださーい♪」

「おっしやあ！ 任せろ！」

スバルとギンガの後押しもあって、俺はまた早く回し始めた。

「リ、リンクー！ 止めてー！」

「きゃっほー♪」

「つて、聞いてない……！」

なんかセラの悲鳴のように感じる声が聞こえたが無視無視！

今はこれを楽しもうぜー♪

しかし……コーヒークップを降りた直後。

「リンク？ 少し……お話しようか♪」

「あ、いや、面白かったからいいじゃん？」

「うふふふ、問・答・無・用♪」

セラの可愛らしくもどこか恐ろしくも感じられる笑顔、しかも背景に「ゴゴゴゴッ」という効果音が見える。

俺は助けを求めるため三人に視線を送るが。

セラは右腕にギンガが左腕に抱きついてきている……まあ仕方ない
といえは仕方ないのだが、若干で良いので離れて欲しい……その…
…な……うん。

「? どうしたの、リンク？」

セラはさらに俺の腕に密着し、俺の顔を覗き込む。

——さっきまでちよつとしか当たっていなかった柔らかいものが、
俺の腕を挟むかのように密着してきた!?

「セセセセセセ、セラ!？」

「? なに、リンク？」

「胸が当たってる!」と正直に言ったら俺はお話されてしまう……
! ど、どうしよう!

「ひゃあああああ!！」

「うお!」

ギンガが悲鳴をあげながら俺の身体に抱きつく。

不意だったため、俺はふらつき、そして——。

ムニユ♪

『あ……………』

バランスを崩した結果、俺の左手がセラの胸を掴んでしまった……。

……あつ、これやばい。

そう思った数秒後に――

「き、きゃあああああああああああああああ……!!!!」

パーンと頬を叩く良い音になった。因みにその発生現場は俺の頬だ。

くれぐれも忘れないでくれたまえ。

第42話〈遊園地編?〉（後書き）

主人公特有ラッキースケベ発動♪

一度やってみたかったです。

第43話〈遊園地編?〉(前書き)

今回は短いです………すいません。

第43話〈遊園地編?〉

リンク side

「……リンク、大丈夫?」

「……まあまあ」

レノンには恐る恐るといった感じで俺に聞いてきた、それも仕方ないだろう。

今の俺の右頬には赤い紅葉が咲いているのだから……。

「二人とも次はメリーゴーランドに乗ろうか? ……………リンク、あとでアイス奢ってね」

「……はい」

セラはまだ赤い頬なのだが、俺を睨みつけ眉をひそめて、スバルとギンガの手を掴んで歩み始めた。

怖い、怖いよ、セラ。

でも、胸を掴んだのは俺なんだし、悪いのは俺か……でも俺だってわざと触ったわけじゃないのに——でも結構柔らかかったな。

「リンク、顔にやけないほうがいいよ。また殴られるから」

「うっ、わ、わーってるよ」

呆れたような目で俺を見るんじゃないレノン。

しょうがないだろ、その、つい思い出したんだから——ていうかセラって意外と胸でか……ってなにを思ってるんだ俺は！！

ク、クールになるんだ、俺！ 思い出すんじゃない！ セラの柔らかい胸を――

「リ、リンク！鼻血出てる、鼻血！」

「え？ あつ、ああ……」

駄目だ、俺。

心弱いな……なさけねえ。

*
*
*
*
*

レノン
side

13時になって、僕らはお腹が空いてきたので、遊園地内にあるレストランでご飯を食べようと、それぞれの席に座っている。

僕たちはリンクとギンガから三つ離れた場所にいる——人が多いせいか僕たちはリンクとギンガから四つほど離れている。

まあ理由はそれだけじゃない、今日の前に座っている意地っ張りな幼馴染が離させたというのもある。

……いつまで意地を張ってるんだが。

僕はピザの一切れを口にくわえ、ため息をついた。

僕たちはそれぞれ頼んだご飯——スバルは大盛りご飯のビックスターキーで、僕はミートピザ、セラはドリア——食べている。

あ、リンクたちの頼んだのが来た。やっぱり僕もリンクと同じチーズハンバーグにすればよかったな……。

お……ギンガ積極的だね、自分のポテトをフォークに刺してリンクに『あーん』するなんて。リンクも笑顔で食べた——ギンガがほほえましい姿だと思ったんだろうね

「……………」

そしてそんな姿をつまらなさそうに見ているのはセラだ。

セラは「むっ」とした表情を浮かべるけど、すぐさまなんでもないようにドリアを食べ始めた。

「……そんなに羨ましいなら、意地なんか張らなければいいのに」

「べ、別に意地なんか……」

「張ってるよ。まったく、君は分かりやすすぎる」

「……………」

「……そんな君にチャンスを与えてあげようか？」

「チャンス？」と言ってセラは首を傾げ、スバルと僕はいたずらっ子の様に笑みを浮かべる。

登場人物紹介 (第43話までの) (前書き)

今回は43話までのキャラクター紹介をします。

登場人物紹介 (第43話までの)

リンク・ストラトス (14)

性別…男

特技…剣術及びにストライクアーツ。家事もそれなりに出来る

見た目…黒髪を短く切り揃え、紅い瞳

一人称…俺

設定…十四年前にマリカに拾われる。

転生者であり、嘗ては榊原 冬馬と言われる病弱の青年だった。

前世は落ち着いた性格だったが、今世では大人の雰囲気を出す元気な性格。

アルスに剣術を学んでおり、ストライクアーツは母親であるマリカに学んでいる。

仲良し三人組 (リンク、セラ、レノン) のリーダー的ポジションに立っている。

恋愛は前世ではあまり体験———というか初恋すらしていないので、

恋愛事に関してはかなりといていいほど鈍い。

剣術及びにストライクアーツの強さは不明……。

因みに前世での漫画の知識はあまりないに等しい、序章でのるる剣以外はなにも出ていないのが証拠である。

さらにはニコポとかナデポの意味もさっぱりである。

セラ・ファロン (14)

性別…女

特技…家事全般そして治療 (主にリンクが怪我するので、得意になっってしまった)

見た目…紅桜色の髪をサイドテールにし、蒼い瞳

一人称…私^{わたし}

設定…セラ・ファロンとまんまの設定。

違う点といたら、若干意地っ張りのところだろうか。

リンクとレノンとは幼馴染であり、仲良し三人組と言われている。

武道に関してはなにもやっていないがメガーヌに教えてもらった家事——特に料理が得意。

リンクのことが好きであり、告白したいと思っではいるが……。

レノン・ナカジマ（14）

性別…男

特技…料理、ストライクアーツ

見た目…青髪を短く切り揃えている、深緑の瞳

一人称…僕^{ぼく}

設定…ゲンヤとクイントで出来た息子。

心優しい性格だがやるときはやる少年で、仲良し三人組の一人。
恋愛に関しては鈍くない、まあ今でもラブラブしている夫婦がいる
ので当然といえば当然だが……。

両親とも管理局が遅いため、普通に身に付いた。あとクイントの
料理を食べたくないから。

ストライクアーツでの強さはそこらへんの不良なんて一蹴するほど
レベル。だがまだ実力を隠しているよう。

ルーク・ストラトス（30）

性別…男

特技…家事全般

見た目…茶髪をきちんと整えた、黒い瞳

一人称…僕

設定…三十代に入っても、その好青年の顔つきは変わらない。
専業主夫であり、ストラトスに婿入りした。

嫁が稼いでいるお金の全ては彼が管理しており、無駄遣いしないようにしている。

しかし、娘のアインハルトには甘く、時折高いお菓子を買って上げていることもしばしば。

マリカ・ストラトス（30）

性別…女

特技…ストライクアーツ

見た目…碧銀の髪をポニーテールに纏めた、瞳はアインハルトと同じ色合い

一人称…わたし

設定…アインハルトとリンクの母親。

三十代に入っているけれども、その美しさは変わらない。そして、家事

全般駄目押しされているのも。

ストライクアーツの教官をしており、ストライクアーツをしている

姿に惚れる男性や女性も多い。

霸王に関する夢など見たことはない、というか見たとしても彼女自身あまり気にはしないだろう。

アルス・アルピーノ（32）

性別…男

特技…剣術

見た目…ダークブラウンの髪を乱雑に纏め、ブラウン色の瞳

一人称…俺

設定…メガーヌと結婚し、アルピーノに婿入り

孤児であったため家族はいない。

ゲンヤとは年の離れた親友であり、バロウは同期というか悪友である。

メガイヌとはとある大会で出会い、互いに一目惚れし、交際を始める。

剣術は達人クラスに入り、身体能力は最早人間とは思えないほどのクラスに入っている。

性格はクールなのだが、若干ヘタレ部分が見え隠れしている。

バロウ・ムース（32）

性別…男…いやオカマ

特技…デバイス製作

見た目…肩まで伸びた金髪の上にはカチューシャ、蒼い瞳

一人称…あたし

設定…アルスとは同期であり、地上のデバイスマスターと言われているが、オカマである。

見た目は美女なのだがちゃんとした男、しかも口調も女性らしいのでたちが悪い。

エクレール・ファロン（17）

性別…女

特技…料理（それなり）、運動

見た目…セラと同じ色合いの瞳、髪も薄紅色で肩まで伸ばしている

一人称…私^{わたし}

設定…FFのライトニングとまんまの設定。デバイスもFF13

の初期装備と同じ武器。

違う点といったら、アースラのいるため若干ホームシックで、三人（リンク、セラ、レノン）には優しい顔をしているといったところ。アルピーノ家に世話になっていて、ただ世話になるだけじゃ嫌だという理由で管理局の『陸』に所属したが、リンディによる勧誘で『海』に行く。

別に本人は『海』に所属したい訳ではない、ただ給料のためにいるだけ。

仕事場ではライトニングと付けており、本名は出していない。
作者の技術で書けるかどうか不安だが何とかがんばっていこう。

ティーダ・ランスター（23）

性別…男

特技…特になし

見た目…ティアナと同じ髪及びに瞳の色をしており、肩まで切り揃えている

一人称…俺

設定…リリカルなのはのティーダ・ランスターの姿をしている。

原典では事故で亡くなっているが、こちらの世界ではアルスに鍛えられたせいか、生き残った。

しかし、その代償として、戦闘値及びに魔力値が大幅に下がったことで、戦場に立つことができなくなってしまった。

病院で入院の際、なんども見舞いに来てくれたオーリスに恋心を抱き、退院したときに告白し、付き合うこととなった。

オーリス・ゲイス（23）

性別…女

特技…料理（時たま、レジアスやメガーヌに教えてもらっている）

見た目…リリカルキャラのオーリス・ゲイス

一人称…私^{わたし}

設定…この世界ではティーダと付き合っている。

このことを一番喜んだのは父であるレジアス・ゲイスであり、早く孫の顔が見たいものだと言っていた。

料理はほとんど駄目という状況だったが、レジアスやメガーヌの教

えもあつて、すすくと上達している。

レジアス・ゲイス（45）

性別…男

特技…料理

見た目…リリカルなのは *strikers* のレジアスのまんま。

無論、体重も。

設定…地上の平和を第一に考えている。

オーリスとティーダの付き合いをとっても喜んでおり、早く孫の顔を見たいと思っている。

仕事面はとても真面目にしているが、私用では親バカそして孫バカ（リンク、セラ、レノン、アインハルト、ルーテシア）である。

エクセリアス（??）

性別…女

特技…不明

見た目…銀髪を腰まで伸ばしたロングヘア、銀目
設定…ガイアミュールの【扉】の先に存在した女性。
人間体と剣体と二つのモードがある。

現在はリンクの中に住んでおり、彼らの日常を見守っている。

リユーグ・ファロン ノエル・ファロン

両名、（40）にて故人。

セラとライトニングの両親。

管理局に所属していて、とても優秀であった。

しかし、運転手の居眠り運転により、事故にあつて、二人は亡く
なってしまった。

他のリリカルキャラクターに関しては年齢が原典より低いだけで、性格に関しては変わってはいない。

原点で違う点でいえば、メガーヌが囚われず、専業主婦。

ルーテシアはvividと同じ活発。

クイントは生存、ゼスト隊の隊員で、ゲンヤとラブっている。

登場人物紹介 (第43話までの) (後書き)

といった感じですね。

これから彼らのことをよろしくお願いします。

第44話〈遊園地編?〉（前書き）

……早いことにもうすぐこの小説を書いて一周年となります。

新年も迎えるし、自分も年も取りますし、本当に早いものですね。

一周年——そして、過ぎてしまった50万Hit記念——ということもあって、後々番外編小説を書きたいと思っています。

50万Hit小説に関して、本当に申し訳ございません……。

ですが、今度は必ず書き上げたいと思っています！ よろしく願います！

第44話〈遊園地編?〉

リンクside

お昼ごはんを食べ終えた俺たちが次に向かったのは、魔女が住んでいる森をイメージしたアトラクション。

そのアトラクションは、コースターに乗り、その森を探検するというアトラクションだ。

しかし、それは三人ずつしか乗れず、必然的に三人と二人と別れてしまう。

そう別れてしまう……別れてしまうんだが。

「……………」

「……………」

なんで俺とセラが二人っきりで乗らなくちゃいけないのさ。

さっき胸触ったこともあって、ちよつといやすごく気まずい……。

なにか離そうと思っても、何を話せばいいのか分からないし……どうしよう。

俺は考える、この気まずい雰囲気を出する話題を。

すると……。

「きゃあ！」

「うお！」

突然、セラが悲鳴を上げて、俺に抱きついてきた。

っ、やわらか……ってそんなことを思ってる場合じゃないって。

なにがあつたかを聞こう、それにチャンスだ！

「セラ、どうした？」

「ま、魔女がいきなり現れちゃって驚いただけ。　ご、ごめんね、抱きついちゃって」

「い、いや別にいいって。　それよりも、その」

「胸を触ってごめん」と言おうとしたとき、

「あっ、可愛い！」

バットタイミング。

目の前から可愛いキャラクターが現れて、セラはそれに夢中になってしまった。

……恨むぞ、おい。

進んでいる間、可愛いキャラクターでセラは歓喜の悲鳴をあげ、

魔女は驚きの声を上げるが最早慣れてしまつて俺に抱きつくことはなかった。

抱きついてからの終始は、無言で終わってしまった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

さてさて、どう謝ろうか……。

アトラクションに出て、俺はどうやってセラに謝ろうと考えていると。

「リンク、いこっ」

「え？」

突如、セラが俺の右手を掴んで、走りかける。

俺はバランスが崩れかけるが、なんとか整えて、セラと一緒に走る。

「お、おいっ。 レノンたちは……」

「大丈夫だから、早く行こ！」

いや何が大丈夫なんだよ、待ってなくてもいいのかよ？

——まあ、セラがそう言うなら、大丈夫……かな？

それにこれは謝れるチャンスかもしれない。

(すまん、レノン。離れたからって恨まないでくれよ)

俺は心の中でレノンたちに謝って、セラに引っ張られるがままに走る。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

レノン side

夕焼けのまぶしさに僕は思わず目を瞑ってしまった。

アトラクションから出て、僕はすぐさまセラとリンクの姿を探す――うん、いないようだ。

「レノン兄、成功だね」

「そうだね」

僕はスバルとハイタッチし、無事にセラがリンクを誘えたことを喜ぶ。

あのレストランで僕らが言った『チャンス』というのは至って簡単。

『僕らが乗っている隙に、リンクを連れて行って、二人つきりになったとき、謝れ』というものだ。

セラは『二人つきり』というので恥ずかしがっていたけど、リンクを叩いたことに罪悪感があったため、戸惑いながらも何とか頷いてくれた。

事が全て進んでよかったと思っていた矢先に……。

「……………」

問題が発生しました。

その問題の原因は膨れっ面で僕とスバルを睨みつけているギンガです。

仲良くするため、二人つきりにしたとギンガに言ったんだけど……どうやら間違いだったようで。

僕はてっきりお兄さんとしてリンクが好きだったと思ったんだけど、どうやら本気のようなです。

ギンガは二人つきりで行かせたことに苛立ちと怒りの視線を僕たちに送っています……。

『あ、あはははは……』

僕とスバルは空笑いで誤魔化そうとしたけど、どうも無駄だったようです。

余計に怒らせてしまったようで、指の関節の骨を鳴らしてる……！

参ったな………うん本当に参った。

リンク、僕たちが提案した案とはいえ……恨ませて、いや本当に。

第45話く遊園地編（終）く（前書き）

今回は甘め？ だと思えます。

今回で遊園地編終了です。

第45話〈遊園地編（終）〉

リンク side

レノンたちと別れ、俺たちはさまざまなアトラクションに乗った。

二人乗りのレーシングカー、メリーゴーランド、空飛ぶブランコ、スカイライダーなどいろいろなものに乗った。

俺たちは終始笑顔で、それを全部乗り楽しんだ。

いや、とても面白かったな。

しかし、楽しい時間というのはあっという間に過ぎるもので、もう夜中の20時になっていた。

そろそろ、レノンたちと合流して、帰らないとな……。

「セラ、そろそろ」

「リンク、最後に観覧車乗ろ？ はい、決定！」

セラよ、俺の意見は却下で、しかも強制ですか……。

俺の手を引っ張ってくるセラに苦笑しながら早足でついて行く。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

観覧車って始めて乗ったけど、意外と狭いな……。

いきなりなにを思ってるんだといわれそうだが、そう思わないや
ってられない。

なぜなら、いま俺とセラが互いに向き合って座っているんだから。

狭い室内、さらにはこうやって向き合うという状況は初めてなので、
すごい胸がドキドキする。

そのせいか、お互い無言になっていて、俺自身なにを話そうか迷っ
ている。

まだ動き出したばっかなので、大して上がってないし、外の景色……
：夜空と綺麗に輝くイルミネーションなんて見てない。

どうしようかと考えていたら……。

「ごめんね……」

「え？」

「その、叩いたこと……痛かったよね？」

「え？ あ……」

そうだ、セラに謝らなくちゃいけないことあったんじゃないか……。

何忘れてんだよ、俺。 セラの、む、胸を触ったことを。

「いや、俺のほうこそ、ごめん。 事故とはいえ、胸を触っちゃって」

「ううん、私のほうが悪いよ。 ごめんね」

「いや、俺が」 「ううん、私が」

「「……………ぷっ、あっははは」」

なんか互いが互いに謝っていることにおかしくなった俺たちは思わず笑った。

「ああ、なんかおかしいや。 とりあえず、お互い許した。 それでいいか？」

「うん、そうだね。 そのほうがいいかも」

俺たちは笑いながら、視線を窓に移すと。

「うお！」 「きゃあ！」

そのとき、ガタっという音と共に観覧車が止まった。

「どうしたのかな？」

「うーん、どうやら止まったみたいだなーん？ おい、見ろよ」

「え？」

景色を見ると、暗い夜に輝く、いくつものイルミネーションが宇宙に広がる幾千もの星みたいでとても綺麗だった。

「綺麗だな」とセラに言おうとしたとき……固まった。

横顔だけでも、セラの表情がうつとりとした表情で、窓に手を添えて「綺麗……」と言う。

……その横顔を見て、俺は固まってしまい、そして見惚れてしまった。

セラってこんな表情を浮かべることが出来るんだ……めっちゃ可愛い。

というか俺なんでこんなに胸がドキドキするんだ？ それにどうしてこんなに胸がきゅくと締め付けるような感じになるんだ？

——わっかんね……なんでだよ。

そう考えていると、再びがつくんと動き出した。

「きゃあ！」

突然の出来事だったため、セラはバランスが崩れて、俺の胸元にポスッと飛び込んできた。

「っ」

柔らかい身体、そして男の俺とは違う女の子特有の香りに、俺は思わずドギマギしてしまう。

「あ、っ、ごめんね、リンク！」

セラは顔を真っ赤にし、慌てて俺から離れた――少しだけ心が寂しく感じたのは俺の気のせいだろうか？

この気持ちは何なんだろう……。

* * * * *

観覧車から降りて、俺はレノンたちに連絡しようと携帯端末を取り出すと……。

「見つけましたよ……」

血の気が引くような寒気を感じた。

その声は幼いけど、まるで地獄の底から聞こえたかのような、低く恐ろしい声だ。

声が聞こえた方向に向くと。

『ギ、ギンガ（ちゃん）……』

いやそこにいたのはギンガじゃなかった、そこにいるのは——『鬼』だ。

前髪が邪魔で目が見えないが、おそらく獣みたいに鋭くしているんだろうな……。

あれ？　そういえば、レノンとスバルは？　まさか、殺^やられた？

うん、とりあえず、やるべきことが一つ出来たな……それは。

「逃げるぞ、セラ！」

「え？　きゃあ！」

俺はセラの右手を掴み、走り出した！

——そう！　やるべきことというのは逃げることだ！

「あっ！　逃がしません！」

当たり前だが、そうはさせないといわんばかりにギンガは俺たちを追いかけるため走り出した。

「ふはははははははは！　俺たちを追いかけるなんて、まだまだ早いぜ〜！」

「あはははは……頑張って、ギンガちゃん」

「~~~~っ！ 負けません！」

……そのあと、遊園地のスタッフさんに掴まり、『人が少ないとはいえ、走らないでください』と叱られました……。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

オマケ

「つう、あの子はどうして、嫉妬するとああも強くなるのかな……」

「大丈夫、レノン兄？」

ベンチで横になっているレノンを心配そうに見つめるスバルの姿があった。

レノンはリンクとセラを二人きりにした罰で、ギンガに思い切り腹に拳を打ち付けられた。

気絶する直前、レノン曰く『踏み込みも拳の突きだし……見事だった……』とのこと。

スバルはレノンに膝枕をしてあげたかったが、流石に体格の差もあって出来なかった……が。

(これはこれで幸せかも……)

間近でレノンの顔を見ることが出来るので、これはこれで幸せだと
感じることが出来るスバルであった。

一周年記念アンド50万PV記念小説（前書き）

今回は本編とは関係のない、キャラクターの雑談小説です。
よろしくお願いします。

一周年記念アンド50万PV記念小説

祝・一周年記念アンド50万PV記念小説開催！！

リンク「一周年はともかく50万PVは遅いぞ」

……………まあ、それは置いといて。

この小説も一年続いたよ……早いもんさ。

ネタやキャラクターが思い浮かんでは消えて、違うネタで書いていたことも懐かしいよ……。

リンク「へえ、他のネタやキャラクターなんてあったのか、興味深いな」

セラ「ねえ、それについて教えてよ」

ん？ ああ、いいよ。

ぶっちゃけ、今回はそれについて語ろうかと思ったんだよ。

それじゃあ、まずは？『レノン』について語ろうか。

レノン「え？ 僕？」

うん、最初はレノンの性格は今のリンクのような性格にしようとし

たんだ。

そして、一人称は『俺』、風貌は若干ツンツンした髪型をした、生意気いじめっこ風少年みたいな。

リンク「……………ぜんぜん想像できん」

セラ「というかもうレノンじゃない、そんなの」

僕は最初そうしようと思ったんだけど……………リンクがああいう性格にするんだったら、同じ性格を持った二人はいらないなと思ったし、なにより書きづらいからね……。

そして、読書の皆さんも混乱するだろうと思って、レノンのこの性格は却下したんだ。

レノン「……………助かったかも」

その？ 実はリンクを仮面ライダーにしようと考えたんだ

リンク「なんで!？」

いやゝ、仮面ライダーが好きなもんでVV

セラ「でも、それじゃあどうしてそのネタは却下したの？」

うゝん…………あの若者の夢を出したときさ、ベルトじゃちょっと味気ないと思ったんだ。それに管理局に目に付かれちゃう上に、怪人の出現が難しい、そしてリリカル×仮面ライダーって結構多いから、却下したんだよ。

セラ「うう、でも勿体無いな……」

レノン「まあしょうがないさ、作者の言うとおりもあるし」

リンク「それに作者が却下したおかげで『エクセリアス』と出会えたんだからな、ありがとうよ」

よせやい、照れるぜVV

その？ オリジナル主人公の名前

リンク「俺？ 俺の名前はリンクで確定したんじゃないのか？」

いや、最初は『リンク』なんて思いつかなかったよ。

最初はやっぱりカッコいい名前がいいよな〜って思ってさ、『ゼノン』や『ロイド』、さらには『レオン』なんてもあったな。

セラ「結構いろいろあるね……」

やっぱり主役だからカッコいい名前がいいよなって思ったんだけど……全部在り来たりの名前だと判断して、却下しました（汗）

レノン「……否定できないね」

そんで、主役の名前に頭を抱えていると、ふとゼルダの伝説を思い出したんだ。

そして、そのなかの主要人物――リンクは僕のヒーローだったことも思い出して、そんな誰かのためのヒーローになれる主人公になってほしいから、『リンク』っていう名前をつけたんだ。

リンク「……作者」

ま、頑張って、誰かのためのヒーローになってくれよ♪

リンク「……おうよ」

その？ ハーレムに関して

セラ「……………」

リンク「？ ハーレムってなんだ？」

……セラよ、手に持っている刀を下ろして、落ち着いて!!

俺の首もとを突きつけないで!!

レノン「けど、なんでいまさらそんなことを言うのさ?」

い、いや、リリカル小説でのハーレムはあまりにも多いからね……。だからさ、こっちのハーレムはハーレムでも、精々少人数にしようかと……。

リンク「さて、セラが帰ってきたことだし」

レノン「ここまで付き合ってくださいった皆さんに最後の挨拶をしようか」

セラ「うん♪　せーの！」

三人『一周年記念アンド50万PV記念小説を最後まで読んでくださって、ありがとうございます！　これから覇王の義兄は転生者をよろしくお願いいたします！』

作者「だ、誰か、へ、ヘルプ、ミー……………ガクッ」

第46話〈始まり……〉（前書き）

彼の本当の物語が……もう少しで始まります。

だから、暖かい目で見守ってあげてくださいね。

第46話〈始まり…?〉

リンク side

唐突に言うが今日は春休み最後の日。

休みが長く続いたせいで、セラとレノンに言われるまで、明日は学校だということをすっかりと忘れてしまっていた……。

もうちょっと休みをくれたっていいじゃないか、学校め。

まあ、そんなことはどうでもいいか。

今はとりあえず――。

「おにいちゃん、はやくー!」

「リンク、行くよー!」

このフリーマーケットで掘り出し物を見つけないとな! あと気に入ったマグカップとか食器類などを!

そんでもって安い日用品があったら、速攻買わないとな!

春休み最後の日、このサスーン自然公園でフリーマーケットをやっ

ているというチラシを見て、俺の両親はゲンヤさん一家、それに俺とレノンにセラ、そしてアインハルトにギンガとスバルを連れて、ここにやってきた。

他の人らも誘ったが、忙しいとのことで却下された……。

まあ、しょうがないといえば、しょうがないが。

「それじゃ、行くぞ、セラ、レノン、アインハルト」

『はい』

父さんと母さんなら二人っきりで行かせてやったぞ。

それに、ゲンヤさんたちはスバルとギンガを連れて、久々の家族団らんだ。

レノンも行けばいいじゃないかと言ったのだが、レノンは「ギンガとスバルは最近父さんと母さんと一緒だなんてないからね、まあ家族サービスみたいなもんだよ」とのことで、俺たちと行動するらしい。

俺はアインハルトとセラの手を優しく掴んだ。

「あっ……」

「♪」

「迷子にならないように……な」

二人に笑いながらそう言って、喧騒溢れる道を歩き始めた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

レノン side

三人が仲良く手を繋いで歩いている――もちろん、他の人には迷惑かけないように、腕と腕がくっつけあう距離でだ。

そんな三人を邪魔したくないから、僕は後ろで彼らの背中を見つめる。

三人はまるで本当の親子のように見え、僕は思わず微笑みを浮かべてしまう。

「おにいちゃん、あれほしいです！」

「ん？ あれか？ 駄目駄目、どうせ使わないだろ？」

「むゝ、ほゝしゝいでゝすゝ」

「もう、アインハルトちゃん。 リンクの言うことを聞かないと、駄目だよ？」

……あの光景と会話を聞く限り、初対面の人とは絶対に親子だって勘違いするね。

いや、勘違いするよ、絶対に。

「むゝ、それじゃあ、このゆびわほしいです」

「指輪〜？ お前にはまだ早いだろう、駄目」

アインハルトちゃんは飾られているおもちゃの指輪を見つけて、それを買ってもらうようにリンクに頼むけど、リンクはそれを却下。

若干、頬を引きつかせているのは気のせいかな、目尻も引きつかせているのも。

アインハルトちゃんはそんなリンクを気にせずに可愛い笑顔で、こう言った。

「このゆびわはセラさんからおにちゃんをうばうためのおまもりです！」

……アインハルトちゃん、一体どこでそんな台詞覚えたのさ……。

見てよ、周りの人がポカンと口を大きく開けちゃってるよ。

ていうかそんなこと言わないで、アインハルトちゃん。 まだ四歳児でしょ、きみ。

「……アインハルトちゃん、ちょっとお話しようか？」

「セラ、落ち着け。 子供の言っていることなんだから」

笑顔を浮かべているセラだけど……決して目が笑っていないため、怖い。

ああ……周りの人もなんだか面白い目で見だしちゃった……。

さっきの言葉は前言撤回しよう——今日の前の広がっているのは……修羅場となりました。

第47話〈始まり…?〉（前書き）

まだまだ、彼らの平穏な日々は続きます。

でも、そんな平穏な日々は…いつまで続くでしょう？

第47話〈始まり……〉

あれから一時間近く、このフリーマーケット内をとぼとぼ歩んだが、収穫はなし。

まあ、運が悪ければ、目ばしいもんなんて無いに等しいか。

「むー、もうちょっとさがしましょう！」

アインハルトは悔しさのあまり頬を膨らませながら、俺の手を引っ張って、そう言う。

……ムキになるなよ、おい。

これが男だったら、呆れたようにため息をついてやるが、如何せん女……しかも妹なので、そうは言わない。

「よし、行くか」

ムキになっているアインハルトに苦笑いをしながら、俺は引っ張られる。

後ろにいる二人を見てみると、二人も苦笑いしていた。

（でもまあ、もうちょっと付き合ってくれや……頼むよ）

そう目で訴えると、二人は伝わったのかこくりと肯うなずいてくれた。

さっすが、俺の親友ら、分かってくれるね。

というわけで、さっさと行くとしましようかと思った矢先、

「あ！」

と言って、アインハルトはちょうど真横にあった露店に目をつけ、すぐさましゃがみこんだ。

ん？ なんだなんだ？

覗き込むように見ると、そこはペンダントや腕輪などアクセサリーや手作りぬいぐるみ等を売っているもので、しかも値段が手頃なもので、ワンコインなどで買えるものばかりだった。

「ほしいのか？」

「はい！」

……即答かよ、まあいいか。

苦笑しながら、アインハルトに「何が欲しいのかを指を指しな」と言うのと、アインハルトはペアと輝かんばかりの笑顔を浮かべるとすぐに何にしようかと思始める。

「おい、セラも来いよ。俺が奢ってやるから」

「それじゃあ、お言葉に甘えます♪」

セラは嬉しそうにそう言うと、しゃがみこんで、品々を覗き込む。

女の子ってこういうのを選ぶのは結構時間掛かるんだよね……まっ、
気長に待つか。

「これです！」

「うん、私はこれかな」

「と思ったら、まさかの数分ですよ、こんちくしょう」

あっさりと決めましたよ、この二人は。

俺のさっきの気長に待つかと言う言葉を返せや。

「いや、別にいいじゃない。それくらい……」

「いやいや、なんとなくそう言っただけだ」

「いやいやいや、だったら心の中で言いなよ」

「おー、どんなの選んだんだー？」

「無視!？」

レノンの突っ込みなんてどうでもいいから、この二人がどんなもの
を選んだのかを見たい。

「わたしはこのぬいぐるみです！」

どれどれ……。

俺はアインハルトが手に持っている腕輪を覗き込んで見ると。

「…………やめなさい」

「えー……」

当たり前だろうが。

なんだ、この不気味に笑っている白黒クマのぬいぐるみは。

白い部分は可愛らしく笑っているが、黒い部分は最早悪魔みたいな笑みを浮かべているじゃないか。

夜中に見たら怖いよ……買わない、絶対に買わない。

俺はアインハルトの手から白黒クマを取り上げて、露店の女性に返す。

「うゝゝゝ」

「あきらめろ、父さんも絶対に買わないと思うから」

こういうタイプのぬいぐるみは父さんも苦手なんだよな。

俺は呻いているアインハルトの頭を撫でて、次のセラの両手に納められているものを見ると。

「へえ、青いペンダントか。いいんじゃないか？」

セラが選んだのは、青色のダイヤ型のガラスペンダントだった。

女の子らしくっていいもんだと俺は思う。

俺は露店の女性に金を払うと同時に、セラはさっそく首にペンダントをつけた。

「ふふっ、どう、似合う？」

「おお、似合う似合う。 いいじゃないの」

「えへへっ」

セラは嬉しそうに笑うが、アインハルトはつまらなさそうにムスツとしていた。

……ったく、しょうがないな。

「ほら、元気出せ。 これあげるから」

俺は苦笑しながら、ポケットの中からチョココレートを取り出す。

このチョココレートは先ほど周っていたときに売っていたので、買っておいたのだ。

別に俺自身が食べるためではない、決して。

「わー、ありがとうございます♪」

アインハルトは嬉しそうにこのチョココレートを受け取り、すぐさま封を開けて、パクパクと食べ始めた。

……可愛いなあ。

「「あ、あはは……」」

なんだか後ろからどこか呆れたような笑い声が聞こえたが、気のせいだ、気のせい。

俺は笑顔を浮かべ、チョコを食べているアインハルトの頭を撫で続けた。

番外編：夫婦の日（前書き）

11月22日の夫婦の日——まあ、過ぎてしまいましたが気にせず。

夫婦の日ということで書きたくなったので、書いてみました。

若干殺意を湧くかもしれませんが、よろしくおねがいします。

ちなみに、これはリンクたちが春休みを過ぎているひとコマみたいなものです。

もしかしたら、物語にも……。

番外編：夫婦の日

ストラトス家にて。

「どこへやったっけな……セラー、『あれ』どこだっけ？」

リンクはリビングにある食器棚を覗いたりしながら、ソファアールで雑誌を読んでいるセラに尋ねる。

「え？ 『あれ』ならここにあるよ？」

セラはテーブルの上においてある箱の蓋を開けて、『鋏』を取り出した。

「おお、そんなところにあったのか。ありがとな」

「ううん、気にしないで。 あっ、リンク。 『あれ』どこにあるか知らない？」

「あ？ 『あれ』か？ 『あれ』なら、俺の部屋にあるぜ。 持ってきてやるよ」

リンクはセラから鋏を受け取ると同時に、リンクはリビングから出て行った。

それから一分も経たずに、リンクはセラの言う『あれ』を手に戻ってきた。

「はい、『髪留め』」

「うん、ありがとう。 あっ、のど渴いたでしょ？ なにがいい？」

「あゝ、それじゃあ、『いつもの』」

「OK。 ちょっと待っててね」

「おっと、それじゃあ、『あれ』も」

「はゝい」

セラはリンクに返事を返して、台所に向かった。

リンクはソファアに座って、先ほどセラが読んでいた雑誌に手を取り、『いつもの』と『あれ』が来るのを待つ。

それから数分後……。

「はい、リンク。 『ブラックコーヒー』と『お菓子』」

「おお、ありがとう。 本当にありがとう」

「気にしないでったら、もう」

セラは当たり前のようにリンクの隣に座り、リンクは読んでいた雑誌をセラに返そうとしたが。

「一緒に見ようよ、それなら効率いいよ」

「……ん、そうだな」

セラに言われて、リンクは自分の膝の上に雑誌を置いて、二人で一緒に見ることにした。

ドアの隙間からそんな二人の姿を見守っているのはリンクの父であるルーク。

「……なんで、『あれ』だけで伝わるんだろう。しかも、なにあの夫婦っぷり」

ご尤ものである。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

ストラトス家の庭で、レノンとの組み手試合のとき。

レノンはすでに準備完了しており、リンクは竹刀を腰に挿し、自分のバックのなかで何かを探していた。

そんな二人の姿を、アインハルトとセラは縁側に腰掛けて見守っていた。

「リンク、何を探しているんだい？」

「うん？ ああ……『あれ』がないんだよ」

「？ 『あれ』って？」

「『あれ』は『あれ』だよ。セラ、『あれ』どこ？」

リンクは縁側に腰掛けているセラに『あれ』がどこかなのかを聞くと。

(……なんでセラに聞くんדר？ セラだって分からないはず)

「『あれ』はテーブルの上においてあったよ」

(え!?)

「お、そうか。 セラ、悪いけど、取りに行ってくれない？」

「うん、いいよ」

セラは部屋の中に入っていったのと同時にレノンはリンクに聞き出す。

「な、なんで、分かるのさ! 『あれ』って言葉だけで!？」

「あ? わかんないのかよ？」

「分かるわけないだろう!？ なに、そのくらいも分かんないのかお前って目で見ないでよ!!」

すさまじい突込みにもリンクは大して気にせず、ただただレノンの言う『そのくらいも分かんないのかお前』っていう目で見ろ。

「ふたりともけんかしちゃ、めっです」

「アインハルトよ、俺たちは喧嘩なんてしないないぞ。 ただ、俺がレノンに呆れているだけだ」

「そうなんですか、じゃあいいです」

「いや、よくないからね、アインハルトちゃん!!」

「取ってきたよー」

漫才紛いなことをリンクとレノンがしている間に、セラが戻ってきた。

リンクの言っていた『あれ』……膝当てを持って。

「おお、サンキュー」

「……セラ、なんで分かるの?」

「え? レノン、分からないの?」

「……いや、分からないの、当たり前だと思うけど」

「? そうかなあ?」

まあ、レノンの言い分もよく分かる。

『あれ』だけで理解するというのも無理の話である……。

それだけで理解できる人間たちといえば――

(夫婦……ぐらいだよね)

この二人は付き合っていない、付き合っていないはずなのに。

（なんなの、この無自覚夫婦バカップルは……）

下手にイチャつくより、余計腹立たしいのは気のせいかなとレノン
は思った。

……レノンよ、それは絶対に気のせいではないと思うぞ。

番外編：夫婦の日（後書き）

どうも読んでくださってありがとうございます。

中途半端に打ち切りましてすいません。

作者の技量じゃこれが限界です……。

またこういう番外編とか書くようになりましたら、がんばります。

これからもよろしく願います。

小ネタ〜意地悪リンク〜（前書き）

本編とは関係のないです、ただなんとなく書いたネタです。

小ネタゝ意地悪リンクゝ

セラ「あれ？ 私のケーキどこ？」

リンク「あれ？ テーブルの上に置いてあったケーキ、セラのだったの？ 悪い、俺が食べちゃった」

セラ「ええ！？ せっかく買ってきたのに、リンクったらひどい！」

リンク「ごめんごめん。あとで一緒に買いに行こう、勿論俺のおごりで」

セラ「むゝゝ」？若干涙目

リンク「セラ」

セラ「ん？ な――」

プニツ（？振り向いたセラの頬にリンクが指さした）

セラ「……」

リンク「うっはは、まんまと引っかったな」

セラ「……ひゃにすんのよ」

リンク「いや、別に」

セラ「……………」？悔しさの余り、涙目

セラ「…………リンク、それなに？」

リンク「うん？　これ？」？手に持っているクッキーが入った可愛い袋

セラ「…………詳しく教えて欲しいな」

リンク「ああ、いいよ。　これはな、とあるお菓子屋さんで買ったものなんだ」

セラ「……………へ？」

リンク「いや、でもこのお菓子美味しいな」

セラ「……………帰る！！」？てっきり女子に貰ったものと勘違いしたので、恥ずかしさのあまり涙目で逃げ去った。

リンク「おい、一緒に食べようぜ？　……………ニヤリ」

レノン「リンク、あんまりセラをいじめちゃためたよ？」

リンク「いや、わかってんだけどさ。 セラの泣きそうになってる
顔が可愛らしくって、つつい」

レノン「…………… （生粋のドSだ、リンクは）」

これも一つの愛情表現である。

第48話く始まり…(終)く(前書き)

さあ、始まりますよ……。

本当の物語が……ついに……。

第48話〈始まり…(終)〉

リンク side

「はい、みなさーん！ よってらっしやい、みてらっしやーい！」

もうそろそろ、約束した集合場所に行こうとしたとき、とある広場で男が叫んでいた。

見ると、結構な人が集まっていて、俺たちは興味を引かれて近づいていくと。

「おお、お前らじゃねえか」

「やつほー。 あんたたちもここに來たんだ」

「父さん、母さん」

人ごみの中にはゲンヤさんとクイントさんにスバルとギンガの四人組が揃っていた。

すげえ偶然だな、おい。

「一体これはなんなの、父さん？」

「ああ、簡易的な転移装置を作ったんだと。 しかもどこぞの企業に所属している一般人がだ」

『えええ!?!』

衝撃の言葉だ。

まさか、ただの一般人が転移装置を作っただなんて……。

すげえなんてレベルじゃないな、そりゃ。

「しかも、その機械オタクつてのが、これまた美人さんつつうからな、結構な賑わいをみせてんだよ」

「へえ」

簡易的移転装置か……それがここ（ミッドチルダ）に流れたら、結構な反響を呼ぶんじゃないか。

「なんだか面白そうだね」

「お！ そこのお嬢さん！」

「え？」

呼び込みをしていたおじさんがセラに目をつけて、スタスタとセラの下へ歩んだ。

「もしよかったら、あれに乗ってみないかい？ 大丈夫、危険なんてないさ」

「え？ あ、あの……」

「いいんじゃないか？ さっき見ていたが、危険もなさそうに、さっきの客も隣の転送装置に移ってたしよ」

ゲンヤさんのフォローもあったことか、セラはゆっくりと頷きながら、おじさんについて行った。

そして、中央に設置してある左右の転移装置。

セラはその左のほうの転移装置に立つ。

それを確認した女性は転移装置の起動を作動するため、手元にあったキーボードを打ち始める。

「転移装置、ON！ エネルギー充填完了！」

おお、結構本格的——何に対しての本格的は分らんが——じゃん。

なんかドキドキしてきた。

俺はセラがいつ隣の転移装置に移動するのかを楽しみに見ていると。

——マスター！——

うおお！ なんだよ、エクセリアス！？

——驚かせてしまったことは謝ります！ ですが、それよりも早くセラちゃんを！——

！！ どういう意味だ！？

いつもとは違うエクセリアスに若干狼狽えた俺だが、すぐさまエクセリアスの言葉を理解し、すぐさまセラのほうへ振り向くと。

「きゃあああああああああああ！！！」

セラの上空には大きな黒い孔が広がっており、その孔にセラが吸い込まれそうになっている光景が広がった。

セラはそこらへんに立っていた棒に捕まり、なんとか抵抗している。

「セラ！！！」

そんなセラを見て、俺はすぐさま走り出した。

本来なら、ここにいるクイントさんに任せるべきなのだが、クイントさんはギンガやスバルを抱きしめていて、動きそうにない。

ゲンヤさんは……まあ無理だ。

その孔に吸い込まれないように逃げている人や、何かに掴んでいる人を避けながら走る。

俺も吸い込まれそうになるが、足に力を込めながら走り続ける！

そしてなんとか転移装置前まで来れた俺は棒にしがみついているセラの手を掴む。

「行くぞ、セラ！」

「う、うん！」

俺は棒を引っこ抜き、棒を使ってセラと一緒に孔から逃げようと歩き出したとき、

「っあ！」

「うあ！」

セラが地面のデッバリに足を取られ、手を繋いだ俺も足を取られてしまい――

「っうあああああああああ！！」

地面から引き離されてしまった！

「おにいちゃん！」

「リンク、これにつかまるんだ！ 早く！」

レノンが長い棒を俺たちのほうに突き出し、俺も空中にいながらなんとかそれを掴むことが出来たが、ギョオオオオオツと音が聞こえるほど、孔はさらに吸引力を増し始めた。

「っうう！！」

なんとか吸い込まれないように棒に力を込めたが。

「っう、あああああああああ！」

「やあああああああああああ！」

レノンとアインハルトの足が浮かび上がってしまい、棒を持っていた人がいなくなったことで、ついに――

『ウアアアアアアアア！！』

『キャアアアアアアア！！』

俺たち四人は孔の中に吸い込まれてしまった。

「リンク、アインハルト、セラちゃーーーーーん！」

『レノンーーーーー！』

最後に聞こえたのは……母さんとゲンヤさんとクイントさんの悲鳴だった。

第48話〈始まり…（終）〉（後書き）

今回における転移装置。

あれは世界を渡れるほどのものではないもので、所謂クロノトリガーのルツカが作った装置と同じものである。

しかし、管理局に所属している者ではなく、ただの一般企業の人間が作ったからこそ、人気があったということである。

第49話（前書き）

今回から新章に入ります。

そして、ほんの数話の間、リンクたちは出てきません。

第49話

周辺を海や山に囲まれ自然も多く残っている場所——海鳴市。

夜中の19時の時間で、人氣がまったくない——結界張られてあるからしょうがねえけど——海鳴市にある海鳴臨海公園は今戦場となっていた。

武器と武器が交差しあったり、魔法を相手にぶつけさせているというものだ。

俺は襲い掛かってきた奴を切り裂いて、前に立っていた女性の隣に立った。

「デイベイン……バスター！」

空中に浮かんでいる白い悪魔が桃色光線を出して、相手にぶつけた……。

というかあんの砲撃馬鹿悪魔は分かってんのかよ？　いま、てめえが倒したトカゲ人間の後ろには武装した局員がいたんだぞ？

巻き添えにするつもりか……まあどうでもいいか、局員が怪我したらあいつのせいだし、俺に何の影響もないしな。

それにしても、痛そー、相手が人間だったら一応は心配はしてやるぜ——人間だったら。

「ぐぎゃあああああああああ！！！」

耳障りな悲鳴を上げながら、トカゲ人間——文字通り人間のように二本足だが、頭はれっきとしたトカゲで身体は鱗で覆われているのだ。

悪魔の魔法をぶつけられたトカゲ人間は消えていった……どういう原理なんだ、ありゃ。

一応は非殺傷設定にしているはずなのによ。

「そんなことを気にしている暇があったら、さっさと片付けたらどうだ？ キョウイチ」

「こりゃ厳しい」

隣に立っていた女性——ライトニングさんの言葉に思わず苦笑しながら答えると同時に。

後ろにいた二匹のトカゲ人間をライトニングさんとともに身体を反転させて切り裂いた。

俺は刀型デバイスをポンポンと肩に叩きながら、消えていったトカゲ人間にそう言った。

「さすがだな」

「どうも」

『敵、殲滅を確認しました。皆さん、お疲れ様です』

音声のみの連絡が来ると同時に、俺はデバイスを元の形態である腕輪に戻し、ライトニングさんに背を向ける。

「? どこに行くんだ?」

「帰るんっすよ、もう腹がペコペコで」

包帯で巻かれまくっている左腕で俺は腹をさすりながらそう答える――元々俺はライトニングさんみたいな局員じゃない、頼まれたら行くという傭兵みたいな存在だ。なので艦長に連絡するのは局員だけで十分だろ。

無論、タダでやるつもりはないんだ、艦長から金をもらってるぜ。

「そうか」

「そうっす、そんじゃあ」

俺はそう言って、ライトニングさんに背を向けて、この公園から去るため入り口付近まで歩き始めた。

その途中、武装局員が俺を見ると顔を逸らした。

まあ、しょうがねえけどな。

なにせ俺の顔は左側の額から首もとまで火傷の痕があるんだからな、ほとんどの奴は俺から顔を逸らす。しかも火傷痕はここだけじゃないんだよね、なんと左腕まであるんだ――だから左腕に包帯巻いているのよ。

顔に関してはもうしょうがないのモロに見せてるよ、もちろん。

そのせいで、俺には友達がないのだ、いや一言二言喋ったことはあるが、すぐさま俺から逃げる。

学校にいても「気持ち悪い」か「近寄るな」という悪口を言われるのだ。

このせいで、女の子が近づいてこないのが痛いんだよね……まああの悪魔や闇の書の主はごめんだがな。

なんも悪いことしてねえのに、俺は毛虫のように嫌われちゃう……。

「まっ、しかたがねえけど」

俺、須崎 恭一は思わずため息をついた。

第49話（後書き）

今回からの新キャラ須崎恭一くんです。

恭一君は火傷跡のせいで嫌われております。

だったら、顔を隠せばいいじゃないかという意見もありそうですが、
どうなんですか恭一君？

恭一「そんなことしたら視界が悪くなるんだよ、それにいつまでも
隠し続けることが出来ねえから、巻いてねえ」

ということらしいです。

これからがんばっていきますので、よろしくお願いします。

第50話（前書き）

みんな懐かしいあのキャラクター登場します。

アニメを見た人なら分かりますよ♪

第50話

恭一 side

朝を迎えたので、朝食であるお茶漬けを食べ終えて俺はさっさと聖祥中学校に向かって歩き始めた。

歩いて十五分で、校門前に着くと、殆どの生徒は俺のほうに視線を向けるが、無視……一々気にしてたらキリがないからだ。

さっさと校舎内に入って、靴から上履きに履き終え、自分の教室に向かうため歩き始めた。

聖祥中学校の廊下を歩いていると、視線——嫌悪と恐れなど負の視線が俺に突き刺さる。

「うわ、相変わらずグロいな……」

「ちっ、朝から嫌なもん見ちまったぜ……」

「怖い……」

「なんで来てんのよ……朝からテンション下がるわ」

ヒソヒソ話しだしたらもうちょっと声を抑えろよ……。

というか、見んなよ人の顔——って無理かそれは。

俺は自分の教室である、2一の扉を開けると、さっきの廊下よりも

密度の高い負の視線が突き刺さった。

まあ、ホームルーム始まる時間帯だし、殆どの生徒が来ているからな……無理もないか。

さっさと窓際にある自分の席に座って、机の中から一限目につかう教科書を取り出すと。

「おはよう、相変わらずギリギリね」

「おお」

俺に話しかけてきて、さらに俺の席の隣にいた女学生兼悪魔の幼馴染、黒瞳で黒髪のパニーテルでそのパニーテルはリボンで二つに結っている、リサ・パツィフィーストは教科書を探し出すが。

「……あ」

「忘れたんだろ？ バーカ、バーカ」

「何度も言わなくなったっていいじゃない！？ そんなに言わないで！」

リサは悔しそうに俺を睨みつけるが、すぐに……。

「お願い、見せて！」

両手を合わせて、俺に頭を下げる。

まあ、ホームルーム終わって、その五分後に授業始まるからな……こいつの幼馴染とやらの教室は遠いからな、

しかし、そんな頼み方で俺は了承しない、それどころかよ……。

「『お願い』、『見せて』？ 頼み方が違うんじゃないか？」

「うっ……お願いします、見せてください」

「よし、見せてやろう。素直はいいことだ、パツィフィースト」

俺はニヤリと口元を笑うと、パツィフィーストは悔しそうにする。

まあ、そんなことしなくても、見せてやるけどな。

「ちっ」

「なんであいつなんだよ……」

はいはい、うざってえ男どもの遠吠え何ぞ聞こえねえ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

一限目授業の数学、俺の机とパツィフィーストの机はくつつけあって、教科書を一緒に読んでいる。

真面目に受けている奴もいりゃ、寝ている奴もいる、そのどちらでもない奴はただ不真面目に受けているやつ。

俺は一応前者のほうで真面目に授業を受けているが、視線がうざってえったらありゃしねえ。

この視線は男子の嫉妬だ――パツィフィースト及びに悪魔の親友たちは聖祥美少女として有名だからな……一緒に教科書を読んでいる俺が憎いんだろうよ。

まあ、どうでもいいけどな。　　というかぶっちゃけ言って慣れた。

とりあえずは授業を真面目に聞きますか。

「この問題を……須崎、やってみろ」

「ほいほいと」

メガネを掛けた40代の教師の岡田さん――裏表もない素直な人で結構いい人だ――に指名され、黒板前に来て、チョークを手取る。書かれた計算問題をスラスラと解いて、岡田に視線を向けると。

「うむ、正解だ。　ちゃんと復習をしているようだな」

「へへっ、どうも」

岡田さんに褒められ、俺は照れくさくなって頭を掻く。

まあ、ぶっちゃけ、家に帰れば勉強ぐらいしかやることがねえしな……。

「お前らもちゃんと須崎を見習って復習しろよ？」

「はい」

『……………はい』

うわっ、パツィフィースト以外の生徒らめっちゃ不満そうな声と顔。
絶対に『余計なことをしやがって』みたいなことも思ってるぜ、あいつら。

「……………もういい。 須崎、戻れ」

「へーい」

岡田さんはそんな生徒たちにため息をつき、俺は自分の席に戻った。

「すごいわね、あれって結構難しいのに」

「ああ、まあぶっちゃけ勉強していれば、できるさ」

パツィフィーストは素直に俺を褒めてくれる——連中もこういう優しさを俺に渡してくれないかね？

——あ、そういや今日って限定五十食のレアチーズクリームパンとインドカレー弁当の販売じゃないか！

四限目が終わったら――ああいいや新人女教師のつまんない英語だからサボって、早々に買いに行かなきゃ！

第50話（後書き）

リサ・パツィフィーストの友好関係は私的オリジナルです。

実際の彼女の友好関係に関してはまったく知りません——もう昔の話ですし。

第51話

恭一 side

三限目の授業をサボった俺は先生らに見つからないようにコソコソと廊下を歩み、階段に上がり、三階に辿り着く。

身体を隠し、顔を出して廊下を見る――いないな。

誰もいないということを確認して、一気にダッシュ！

先生らに見つかったらうるさく注意されそうだが、今この廊下には誰もいないし、だから走る！

そして、俺は目的の場所に着き、準備をしているオバちゃんたちにニッコリと笑って一言。

「限定五十食のカレー弁当とクリームパン、くださーいな」

俺の笑顔に食堂のおばちゃんたちは授業サボってまで来た俺に苦笑しながら、「はいよ」と答えてくれた。

よっしゃあ！ 一番乗りい！！

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

戦利品を手には俺は屋上で優雅に食べていた。

「いやあー、三限目の授業を犠牲にした昼食を美味いね、美味いね

ー♪
」

どこかの芸人さんのモノマネをしながらカレーパンとクリームパンをパクパクと口の中に入れていく俺。

いやー、本場の味を再現したカレーとレアチーズの味がたまりませんなー、はむはむ♪

カレーの最後の一口を食べようとすると、屋上の扉が開き、俺はそっちに視線を向けると。

「……………っち」

思わず舌打ち、さっきまでの高揚感が一気にフォールダウン。

だって屋上の扉が開いたの――

『……………』

悪魔と闇の書の主と金髪娘――確か、バーニングだっけ？――がいたんだからな。

ダウンした理由？　いたって簡単、俺は三人が大がつくほど嫌いだから。

「……………あ、きよ、恭――」

「うぜえ、俺の名を呼ぶな、近づくな」

俺は不機嫌のままカレーを食べて、ベンチから立ち上がる。

「……ずいぶんな態度やな」

「うっせえ、口開くな」

闇の書の主に睨みつけると、すぐさま目を逸らした——恐怖を感じるんだろうよ、この顔に。

バーニングのほうは何も言わない、ただ気まずげに俺から逃げるかのように視線を逸らした。

「まったく、なんでお前ら来てんだよ、ここは俺の憩いの場だぜ？
とっとと出てけよ、お前さんらだったらどこにでもいれんだろ？」

「別に、あたしたちがここに來たっていいじゃ」

「分かってないなあ、バーニング」

俺はバーニングの言葉を否定する……否定する理由なんていたって単純。

「お前らは俺と違って聖祥……なんとか美少女といわれ、どこにいてもチャホヤされてるじゃねえの。対する俺はみんなの嫌われ者……ここしか居場所はないの、分かるか？」

「……うちらだって、ここしか居場所があらへん。周りにいる男子らや女子らに誘われたりされとるからな、うちらがこうやって一緒に食べる場所がここしかないんや」

「はっ、羨ましいねえ。俺もそういう人生を送りてえもんだ——」

犯罪者家族さんの主は羨ましいぜ」

「っ！！ あの子らは——」

「犯罪者なんかあらへん！　ってか？　まあ、そう思ってるよ」

くくつと馬鹿にしたような笑みを浮かべると、はやては悔しげにそして怒りの視線を俺に向けた。

こいつは、いやこいつらはちゃんと管理局の任務こなしていれば罪を償っているって考えているんだろうな。

……そんなはずねえのになあ。

こいつらが必死になって任務をこなしている姿を思うと滑稽だな、おい。

「つたく、てめえらと会っちゃったせいでテンション下がったぜ。
俺は帰る、じゃあな」

俺は扉の前でただずんでいる三人を退かして、屋上から出た。

……もう気分乗らねえな、帰るか。

どうも嫌いなもんを見ると、ついつい帰りたくなる性分な俺。

今日は四限目の途中までか……まあいつもと比べると早いな。

いつもだったら、五限目の途中か、最後まで残っていたんだけど……。

どうでもいいか、今日はさっさと帰ろ。

第51話（後書き）

どうも、今回はこのような話となりました。

まあ、読んでいただいたとおり、恭一くんはさっきの三人嫌いですが、その理由も後々で。

ちなみに恭一君のせりふである「聖祥……なんとか美少女」というのは、あれは恭一くんにとってはどうしてもいいものなので、たいして覚えていないもので、あれが正式な命名ではありません。

第52話

恭一 side

「そんじゃ、よろしく頼むわ」

ピッと携帯電話での通話を切ると同時に、キーンコーンカーンコーンと授業が終わりの鐘が鳴り響く中、テンションダウン、気分がフオールダウンした俺はさっさと家に帰るため、二階の廊下で待機。

そういや、なんであいつら授業の途中なのに、あそこに来たんだ？
どうでもいいか。

教室から多くの生徒があふれ出て、颯爽と走っていく——多分限定食目当てなんだろう。

しかし、俺にとってはどうでもいいことなんで、無関心でいると。

「あっ、恭一」

目の前から俺に声をかけてきたのは、……………ええと。

「ハオラオンか？　なんかよう？」

「ハラオウンだよ！？　いい加減に覚えてよ！　というより、なにその噛みそうな苗字！？」

そうそう、フェイト・T・ハラオウンだっけな。

直訳すると運命・T・ハラオウンだよ、変な名前だよな、まあそんなことより。

「相変わらずいい突っ込みだな、誰に仕込まれたんだ？」

「仕込まれてなんかいないよ!?　ただ恭一と同じ性格の人の親友がいるから、そうなったの!」

ほう、俺と同じ性格の奴がいるのか……是非とも会ってみたいな。

「あれ?　そういや、なんで食堂に向かっているんだ?　弁当あんたろ?」

「……………今日みんな寝坊しちゃって、お弁当作る暇なかったんだ。だから今日は――」

「須崎先輩!」

ハラオウンが言葉を繋げている最中、違う女子の声が聞こえた。

おお、来てくれたか。

「須崎先輩、頼んだバックを持ってきやした!　あと、あたしの奢りのコーラっす、どうぞ!」

「バックはありがたいが、コーラはいらんぞ。それはお前が飲め、いくらお前が百歩譲っての舍妹でも、俺がお前に奢られる筋合いはねえし」

「いいえ!　須崎先輩の舍妹だからこそ、奢るんっす!　ささ、ど

うぞつす！」

俺の言葉に反論し、無理やり300mlコーラを手渡すのは、自称…
俺の舍妹……三元^{みつもと} 花梨^{かりん}だ。

花梨は二年前に、ロリコン高校生に襲われそうになったところを、俺が助けた。

そんなときの俺の強さに憧れを抱き、俺を尊敬してしまったといったところだ。

何度も何度も俺のことを尊敬すると言っても、ぜんぜん聞かない困った子だ。

だけど、そこが可愛く思っちゃうんだよな、まいったね。

「あつ、ハオラオン先輩。 どうもっす」

「……あのね、つてあれ？　なんでバックを持ってるの？」

「ああ、これっすか？　これは恭一先輩のです。　恭一先輩、もう帰るっすから」

「ええ！？　もう帰るの！？」

ハラオウンの言葉に頷いて、俺は花梨から鞆を受け取り、さっさと家に帰ろうと

「待ちたまえ、須崎 恭一」

したかったんだが、目の前から三人の男が現れた――？　こいつら

は……ああ。

「変態集団か」

「誰が変態集団だ!? 我々は――」

「だから変態集団」

「ち・が・う！」

三人の男の一人である眼鏡男は荒々しく俺の言葉を否定する……後ろから「やっぱり、リンクに似てる」というハラオウンの呟きが聞こえた。

ふむ、どうやらそのリンクと言う奴が俺に似ている友達なのだろうな、是非とも会ってみたいものだ――この顔でよければ。

「とりあえず、俺に何のようだよ。俺はさっさと帰りたいんだ」

「安心しろ、すぐに済むことだ。単刀直入に言おう、これ以上リサ・パツィフィーストさんに近づかないでもらおう」

やれやれ、やっぱりそれか。

俺は思わず肩を竦めて、ため息をついた――。

こいつらが何なのかは最初から知っている、変態集団ではないのだ――いや似たようなもんか。

こいつらはリサ・パツィフィーストのファンクラブのメンバーの連

中で、パツィフィーストと仲良く喋っている醜い俺のことが気に食わないのだ。

「別に俺から近づいているわけじゃねえよ、あいつが勝手に近づいてくるんだ。文句はあいつに言え」

「ぶぎっ、パ、パ、パツィフィーストさん自ら!? う、羨ましい！」

「しゃべんな、デブ男」

「ぶぎいいいいいいい！ 何だとおお！」

後ろを見ると、花梨が気色悪そうな目でデブ男を見て、ハラオウンは若干顔を青くしていた。

……十分気持ちは分かるぞ、うん。

「はっ、んな嘘つくんじゃねえよ。 どうせ、てめえが脅して、そういうふうにしたんだろうが」

「……あのさ、それで俺になんのメリットがあるわけ？ 何を言ってるんだね、この黒髪ヒヨコ頭。 もう少し、考えて言えよ」

「んだと、てめえ!!」

というか自分で自分に返すけど、メリットどころか、寧ろデメリットしかないね。

こいつらみたいな連中に目を付けられるし。

「ふん、兎も角だ。これ以上、パツイフィーストさんに近づくなよ？ いいかね？」

「あゝ、とりあえず了解」

眼鏡男に言葉を返すと、不満そうに俺を睨みつけて、俺たちを通りすぎた。

「……ああいう連中がいるから、めんどくさいんだよな、学校（こく）にいるの」

さっきの奴らの僻みもそう思うが、廊下（こり）を歩いている連中から非好意的な視線を感じるのもめんどくさいと感じちまう。

「……………っ」

「須崎先輩」「恭一……」

心配げに俺を見る二人。

「なに、苛められるよりかはマシだ。忠告だけだしよ……小学生の頃はひどかったし」

当時のことを考えると、ひどかったと思う。

この火傷を負って、「気持ち悪い」と元友達にも迫害されたし、「オバケ」と言われて女子に陰口たたれたり、「化け物」と呼ばれてホースから水をぶっ掛けられて、机には落書きされてた……。

理不尽だと思いながら、校舎裏で一人で泣いてたな……。

……そんなことはどうだっていいか。

「……花梨、とりあえずお前はハラオウンと一緒にいろ。こいつと一緒に大丈夫だろ。それに もし、俺と一緒にのところを見られてたら、「脅された」って言っとけ」

学校が始まって、まだ数日しか経ってねえ、新一年生であるこいつが俺との付き合いは見られても「脅された」っていえば、なんとかなんだろ。

それにハラオウンと一緒にいれば、花梨はいじめられねえし、陰口も減るだろ。万々歳だ。

携帯に関しては非通知にしろと言っておいてるし、大丈夫だろ。

「じゃあな、俺は帰る」

とりあえず、家に帰ったらなにするかが決まったな——寝よう。

第52話（後書き）

フェイトはいまでもリンクたちと交流しており、さらにはレノンのツツコミを深く受け継いってしまった哀れ（？）な子です（笑）

そして、恭一としゃべれることができる子です、その理由も後々…
…。

第53話（前書き）

連続更新！！

第53話

花梨side

家に帰っていく須崎さんの背中がどこか寂しくそして悲しく見えたのは、きっとあたしだけじゃなく、隣にいるハオラオン先輩も見えたと思うっす。

そんな須崎さんの姿を見て、あたしは理不尽だと思った。

須崎さんは何も悪いことも酷いこともしていないのに、周りにいる連中こいつらのせいで、あの人の評判はがた落ち……それは今でも。

一年生のクラスもあの人のうわさが流れている、「お化け」や「気持ち悪い」等とあの人は言われている……それがとてつもなく悔しいっす！

（須崎さんのことを何も知らないくせに……！）

苛々が達して、思わずあたしは舌打ちをしてしまう。

あの人は高校生に襲われかけていたあたしを助けてくれたのにも関わらず、当時のあの人の顔を見てあたしは恥ずかしいことに情けなく悲鳴上げて泣いてしまったっす。

そんなあたしを、須崎さんは怒りもせずただ苦笑いしながら、持っていたジュースを渡してくれた、拳句の果てにあたしが泣き止むまですっと待っていてくれたんっすよ。

本当は、優しくそして強い人なのに……！

「花梨」

知らず知らずに強く握り締めていた右拳に優しく這わせてくれたのは、隣に立っていた、ハオラオン先輩だった。

先輩は優しく微笑みながら、あたしの右拳をそっと開くと。

「あ……」

手のひらがあたしの爪によって傷つけられていた……いまさらだけど軽い痛みが感じてきたっす。

「保健室に行こう？ その後、お昼食べようか？」

「……はいっす、お気遣いありがとうございます。 ハオラオン先

輩」

「……………だから、何度も言うようだけど」

「ふみゃああ！」

ハオラオン先輩は腕を軽く上げて、ゴツウとあたしの頭を叩く。

そして、笑顔を浮かべながら、荒々しく言う。

「私は！ フェイト・T・ハ、ラ、オ、ウ、ン！……！！」

……………すいませんっす。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

フ ェ イ ト s i d e

もうなんで間違えるかな!!

それもこれも、みんなハラオウンという苗字のせいなんだ!

……………うん、さすがにそれは八つ当たりだ、やめておこう。

今、私は花梨を連れて、保健室に向かうため、廊下を歩いているところ。

お腹は空いているけど、それよりも花梨を連れて保健室に連れて行くのが先決。

花梨の手の平は爪あとだらけで痛々しく感じるから……………早く治療させてあげたい。

……………たぶん、花梨の手のひら、恭一を思っただろうと思う。

花梨の気持ちは良く分かる。

恭一は何も悪いことも酷いこともしていないのにも関わらず、酷い噂が流れているんだから……………。

誰も味方のいないこの学校に来ている恭一があまりにも寂しく見えちゃう……………。

(リンク、セラ、レノン……)

この三人がいれば、恭一は一人じゃなくなるのに……。

三人は見た目だけで判断する人じゃない、あの三人は優しいんだ。

恭一がこの三人に会えば、仲良くなれる、きっと！

「でもなあ……」

その分、レノンと私が苦勞しそうだなあ。

恭一ってリンクとどこか似ているから、私たち突っ込み疲れしそうだなあ……。

思わず、私は思わずそんな未来の日を思って、遠い目をしちゃった……。

第53話（後書き）

フエイトの思う、とある未来の日は遠くないかもしれませんよ♪

第54話

『来るなよ、お化け!』

少年の手は仲が良かったはずの友達には手を払われ、さらには顔を殴られる。

殴られた衝撃を受け流すことが出来ず、少年は教室の床に尻餅ついた。

そんな少年を誰も助けようとせず、教室にいる生徒たちはただただ見ているだけだった。

少年はそんな反応を寂しく思い、そっと立ち上がり、自分の机に向かう。

しかし、机には酷い落書きが書かれていた。

『死ね』 『化けもの』 『お化け』 『学校来るな』 など様々なことが書かれていた。

そして、こう思った。

(どうして……)

『須崎くんの顔、気持ち悪いよね』

教室に入る前、その言葉を聴いた少年は扉に手を掛けた状態で止まった。

『うんうん、まるで人体模型みたいだね』

『なんで学校に来てるんだろうね、あの顔を見ると、やる気を失くすよね』

『『『それ、分かる』』』

少女たちの残酷な言葉を聴いた少年は扉から手を離し、そっと教室から離れていった。

バシャアと冷たい水を掛けられ、少年はその冷たさに身体を震わせた。

『ぎやはははは、なにやってんだよ』

自分に水をかけた元友達。

明日になれば、もしかすると高熱が出るかもしれないほどの寒さにもかかわらず、この元友達は自分に水を掛けた。

少年は寒さに耐えながら、元友達を睨みつけ、ゆっくりと立ち上る。

『な、なんだよ……』

元友達は何かに怯え、一歩後ずさる。

これまで耐え切ったのだが、少年はもうこれ以上自分を耐えることが、押さえることが出来なかった。

元友達を睨みつけ、そして――

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

恭一 side

「――」

……嫌な夢を見たもんだ。

俺はゆっくりと瞼を上げて、既に見慣れた天井なんて目に入らず、俺は傍に置いておいた時計を見ると、既に夜の七時だった。

もう窓に日が差していない、外はもう真っ暗だ。

「……料理つくんの面倒だし、コンビニの弁当買いにいこ」

布団を蹴り飛ばし、制服を脱ぎ捨てていき、ロングTシャツにカーゴパンツを着て、急いで部屋を出る。

俺の住んでいるのは外観がめっちゃ古くて、至るところがボロボロとなっているアパートだ。

このアパートに住んでいるのは、今のところ、俺と一階に住んでいる今年五十に入った大家夫婦と娘さんぐらいだ。

周囲にはわずかにある住居だけだが、ほとんど住人は住んでいない。

それじゃあ中はボロイだろうと思われるが、ところがどっこい。

実は内装や住居設備などは存外しっかりしている、しかも家賃は安いんだ。

問題なのは一つ、商店街や駅からは遠いこと……そうだな、歩いて二〇三分はかかる。

そこが問題なのよね、参ったねどうも。

そんな話はどうでもいいか。

さつさと、コンビニに行って、さつさと弁当を買おう。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

俺に向けてくる視線がうざ飼ったが、何とかコンビニの弁当が一番安いシャケ弁だ。

シャケ弁が入った袋を片手に、俺はアパートに帰るための近道である海鳴公園を通り過ぎようとしたとき。

「! !」

突如周囲にいた人が消えて、暗かった空が紫黒色となっていく、さらには周りには同じ色の霧が出てきた。

……一体誰だよ、こんな結界を張ってる奴。

趣味悪いな、おい。

俺は袋を懐に入れて、腕輪状態のデバイスを起動させる。

「起動しろ、さっさと」

<Set Up>

機械音声が告げると、私服が変わっていく。

ロングTシャツにカーゴパンツの服装は変わっていく、剣道の胴着のようなものとなった。

腰には一本の刀が差されており、俺は刀を抜いて、さっさとこの結果を張った馬鹿を倒すため、走り出した。

第54話（後書き）

今回で恭一sideは終了です。

次回からはみんなが知っている主人公sideに切り替えます。

リンク「やっと、俺たちの出番か」

レノン「結構長かったね、話数は少なかったけど」

セラ「うんうん」

ごめんね、三人とも。

もうすぐ出番だから許して♪

三人「いや、そんな怒ってはいないけど……（汗）」

アインハルト「はやくしなさい！ わたしとおにいちゃんのでばん！」

は、はい……、ごめんなさい

第55話（前書き）

今回はちゃんと主人公sideになりましたよ、前回の後書き通りに。

第55話

リンクside

「——ク！——ンク！ リンク！ 目を覚まして、リンク！」

「うっ………んんう」

頭を軽く振るって、見上げるとそこには心配そうに俺を見つめるセラとアインハルトにレノンの姿が合った。

「おきましたか、おにいちゃん？」

「おお、起きたぞ、アインハルト」

俺は倒れながらも心配させて悪かったという謝罪の意味を込めてアインハルトの頭を撫でる。

倒れている身体を起き上がらせ、周りを見渡す。

紫黒色の霧が漂わせ、さらには人氣がまったく感じられないといった、おそらく公園であろう場所だった。

「……僕たち、どこかに転移されたようだね。ここどうみてもサースーン公園じゃないからね」

「お前に言われなくても分かるっての。問題はどうするべきかだ」
俺とレノンだけだったらまずこの場を散策することができる。

だが、今この場にはセラとアインハルトがいる。

俺ら二人は一応は戦い方をたしなんているが、この二人は別だ…
：戦うことが出来ないこいつらを連れて、どこなのかが分からない
この場所を歩き回るといいうのは危険だ。

さて、一体どうするか……。

「……リンク、歩こ？」

「いきましょう！」

「は？」

まさかのセラとアインハルトの申し出に俺は思わず呆けた声を出した。

「ここがどこかを調べようよ、ここにいたって仕方がないでしょ？」

「セラさんのいうとおり、いきましょう！」

セラとアインハルトは強い眼差しで俺を見据え、その強い眼差しにはどこか不安げが混ざっているような気がした。

……無理しちゃって、まあ。

「……いや大丈夫だ、とりあえず少しだけここで待とう」

不安に駆られながらも気丈を張ってくれた二人には悪いけど、この

提案にした。

「で、でも！」

「セラ、だったらその震えている身体をなんとかしろ」

「っ、こ、これは武者震いだよ！　だ、だい——」

「嘘ならもうちょっとマシな嘘をつけ、大丈夫心配するな」

意地を張るセラに苦笑しながら、俺は頭を撫でる。

セラは顔を俯かせ、「ごめんね、ありがとう」と言った。

やっぱ無理してたか……ったく。

「気にしてねえよ、だからいつもどおりの顔に戻ってろ」

「うん……」

セラに関してはもう心配はないな、あとは——アインハルトだ。

俺はアインハルトの背に合わせてしゃがみ込む。

「子供が無茶しようとすんな、怖いんだろ本当は？」

「そ、そんなこと」

「それじゃあ、俺の目を見ながら、それを言ってみ」

アインハルトは俺を見つめ、俺もまたアインハルトを見つめる。

気丈な眼差しを俺に向けるアインハルトだが、俺の真っ直ぐの視線にすぐさま目を逸らして、「……ごめんなさい」と謝った。

「……素直に言えよ、別に怒りはしないからさ」

「……………です」

「ん？」

「——い、——わい、こわい、こわいですう！」

アインハルトの強かった眼差しは消え、涙目へと変え、俺に抱きついてきた。

「ここ、どこお！？ ううう……パパア……ママア……どこお……ひっぐ……うう、うえええええええええええん！」

「……………」

泣き叫ぶアインハルトの背中を優しく撫でる——そんなんで泣き止まないとは思ってはいても、そうやって少しでも不安を消えるだろう。

この後、俺たちはアインハルトが泣き止むまで、ただただ待っていた。

そして、キキイと靴からブレーキ音(?)を鳴らして、俺たちの前に立ち止まった。

「あのすんません!　ここって海鳴市の海鳴公園っすよね!?!」

いや、そんなの俺が知りたいわ。

というかここって海鳴公園っていうのか……………うん?

海鳴市の海鳴公園——まさか!?!??

レノンもここがどういう場所なのかを気づいたか、驚愕の表情を浮かべながら俺に振り向く。

「リンク、もしかしてここって、フェイトが言っていた……」

「……………多分、ここは地球だろう」

『海鳴市の海鳴公園』という単語で思いつくのは、地球と言う星だ——かつて俺が榊原　冬馬の住んでいたところでもある。

以前フェイトが家^{うち}に遊びに来たとき、地球の海鳴市に住んでいたみたいなことを言っていたし、今度海鳴公園で地球の友達と一緒にピクニックに行くみたいなことを聞いたな。

多分、ここが……………海鳴公園なんだろう。

「それにしても……………あいつって意外と趣味が悪いんだな」

「え？」

セラの疑問の声が上がったので、俺は丁寧にかつ丁重に答えた。

「いやだって、こんないやな空気が流れている場所でピクニックするなんて……あいつはそこまで堕ちちまったってことなんだ。友達である俺たちがそ_レを直してやらないと――」

「いやいやいや!! 君は何をいつているんだ、リンク!? そんなことないじゃないか、なんでフェイトが――」

レノンが長いツツコミを入れている途中――。

「フェ、フェイト先輩のこと知ってるんすか？」

黒髪ツインテール少女は涙目ながらも俺たちに聞いてきた。

いや、知ってるも何も。

「俺たちとあいつは親友だ、そういうお前はあいつの何なんだ？」

「うん、あたしっすか? あたしはフェイト先輩の後輩っすよ」

「バ、バカな、あいつに後輩ができるなんて……!」

「何を言ってるの、もう」

セラは呆れながら俺の頭を軽く叩いてツツコミをいれた。

……ちよつとした冗談じゃねえかよ、本気にすんなよ。

「まあ、リンクのことは放っておいて。きみがフェイトの後輩だつてことは助かったよ、端末——いや携帯電話持っているなら、彼女に電話を——」

「ああ、それは無理っす」

バツサリとレノンの提案を切り捨てやがった、この少女。

「さっき、携帯で電話したんっすが、繋がらなかったっす。いったい——」

どうなつてんっすかねと言葉が紡がれるだろうと思っている矢先、林からガサガサと音が聞こえた。

俺たち全員は顔を音の発したほうへ振り向いて見ると——。

「シュルルルル………」

……なんだ、あれ？

トカゲ……いや人間？

いや、まるで人間の足を持ったトカゲのように見える……なんだよ、あれ？

「シュルルルルルル！！」

トカゲは手に持っていた片手剣を振り上げ、俺の元へ走り出した。

逃げろ、逃げろ！ 逃げろ！！

足を動かせよ、みんなを連れて逃げて、走れ！

そう思っても、足が動かない、動いてくれない……！！

そして、トカゲ人間の剣が俺の頭上に振り上げられ――。

――マスター！！――

「リンク！」 「おにいちゃん！」

エクセリアス、そしてセラとアインハルトの声で俺は恐怖を振りほどき、そして正気に戻った。

剣が振り下ろされる前に、俺はすぐさま拳を強く握り締め、思いっきりトカゲ人間の腹を殴った。

「ぐびゃあ！」

トカゲ人間は苦しみ、手に持っていた剣を手放した。

俺は剣をすぐさま掴み、すぐさまトカゲ人間の頭を峰で思いっきり叩いた。

「びぎい！」

トカゲ人間は軽い悲鳴を上げ、叩かれた勢いで地面に思い切り倒れた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「ふうむ、なかなかやるな、あの少年」

「一般人にしてはなかなかのレベル……ふむ」

「少し……手をつけてみるか」

遠くからリンクたちを見ていた一人の男がニヤリと笑った。

第56話（後書き）

さてさて、最後に出てきた男は一体何者なのでしょう。

そして、リンクたちは海鳴公園から脱出できるでしょうか？

次回をお楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9329o/>

覇王の義兄は転生者

2011年12月19日13時47分発行